# はじめに

本活動事例集は、地域赤十字奉仕団の活動がより活性化することを目的に作成を始めて平成20年度で５冊目の刊行となります。今年度の事例集の作成にあたっては、平成16年に定めた赤十字奉仕団活動強化要綱の共通活動項目をもとに、「高齢者支援活動」、「児童の健全育成活動」、「災害救護・防災活動」「赤十字の思想普及・ＰＲ活動、社員増強に対する支援対策」等をテーマとして募集しました。また、本年度も全国からご応募いただいた事例に、過去にご応募いただいた事例の中から優れた活動でありながら、惜しくも僅差で選考されなかった事例についても再度選考に加えた全46事例を選考対象とし、学識経験者を交え選考を行った結果、モデル活動10事例が選定されました。

モデル活動全体としては、地域に根ざした赤十字奉仕団であることを生かし、地域における児童の健全育成活動に取り組んでいる事例が多く選定されているほか、中には、実際の災害を経験したことにより、従来の災害への備えをより現実的な取り組みへとつなげているという事例も見受けられました。しかし、いずれの活動も１つのテーマではくくりきれない、幅広い要素を持った多様性のある事例であります。

また、今回、モデル事例として選定されなかった事例の中には、他の奉仕団にとって参考となる事例が多く寄せられましたので、その活動概要を参考事例として紹介させていただきました。

ついては、本事例集をご活用いただき、所属の奉仕団では取り組んでいない活動、あるいは取り組んでいるものの未だに改善の余地がある分野の活動等について、それぞれの優れた取り組みの中から、今後の奉仕団活動の活性化やより良い運営につながるヒントをつかみ、赤十字運動の担い手としてより一層地域のニーズにこたえた奉仕活動を展開していただければ幸いです。

末筆ながら、原稿をお寄せいただきました地域赤十字奉仕団員の皆さま、また、ご多忙の中、取材や執筆等にご協力いただきました選考委員の先生方をはじめ関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成21年３月

日本赤十字社
総務局長　大給　乗龍

# 目次


## 1．モデル事例　高齢者支援活動 …… 005

北海道北広島市赤十字奉仕団 …… 006

地域で「必要な実際的事業」に自ら取り組み、発展させている北広島市赤十字奉仕団の活動

国際医療福祉大学　教授　小林　雅彦 …… 011

○コラム１　『もっとクロス！計画』実施中！ …… 012

## 2．モデル事例　児童の健全育成活動 …… 013

青森県むつ市大畑分区赤十字奉仕団 …… 014

地域の中で多くの人々に支えられたむつ市大畑分区赤十字奉仕団の活動

国際医療福祉大学　教授　小林　雅彦 …… 019

埼玉県越谷市赤十字奉仕団 …… 020

地域に必要とされている奉仕団活動を展開―越谷市赤十字奉仕団の活動―

帝京平成大学　助教　山口　佳子 …… 025

兵庫県姫路市赤十字奉仕団 …… 026

子どもたちには遊びの場を、保護者たちには交流の場を提供する地域奉仕団の取り組み

日本社会事業大学　教授　村川　浩一 …… 032

○コラム２　日本赤十字社のミッションステートメント紹介 …… 033

徳島県徳島市地区赤十字奉仕団 …… 034

地域奉仕団が学校と協働で、障がいのある人達を理解するきっかけづくりに貢献

広島国際学院大学　准教授　田中　里美 …… 039

長崎県諫早市赤十字奉仕団…… 040
自分たちの町は自分たちで支える理念が奉仕団員に浸透　国際医療福祉大学　教授　小林　雅彦…… 045

○コラム３　連携から協働へ　他団体と積極的につながろう！！…… 046

３．モデル事例　災害救護・防災活動…… 047

群馬県南牧村赤十字奉仕団…… 048
「災害を経験して、さらにたくましく」南牧村赤十字奉仕団の活動について
帝京平成大学　助教　山口　佳子…… 053

奈良県香芝市赤十字奉仕団…… 054
「防災紙芝居」づくりを通じて、次世代の防災意識向上・健全育成に取り組む
日本社会事業大学　教授　村川　浩一…… 059

大阪府大東市赤十字奉仕団…… 060
防災マップを作り、自主防災活動を推進する大東市赤十字奉仕団の活動
日本社会事業大学　教授　村川　浩一…… 065

○コラム４　より良い活動のための５つのポイント…… 066

４．モデル事例　赤十字思想の普及・PR活動、社員増強に対する支援対策…… 067

福岡県北九州市門司区赤十字奉仕団…… 068
地域の変化に対応し社資募集を展開　広島国際学院大学　准教授　田中　里美…… 073

○コラム５　地域赤十字奉仕団 都道府県別団数・団員数…… 074

５．特別掲載事例　赤十字思想の普及・PR活動、社員増強に対する支援対策…… 075

兵庫県新温泉町赤十字奉仕団…… 076
地域のニーズに応え、多彩な活動を展開“定年制”を導入しつつ
広島国際学院大学　准教授　田中　里美…… 081

6．応募事例紹介　高齢者支援活動 …… 082

秋田県北秋田市鷹巣赤十字奉仕団 …… 083
栃木県上三川町赤十字奉仕団 …… 084
千葉県勝浦市赤十字奉仕団 …… 085
山梨県甲斐市赤十字奉仕団 …… 086
鳥取県北栄町大栄赤十字奉仕団 …… 087

7．応募事例紹介　児童の健全育成活動 …… 088

青森県五所川原市赤十字奉仕団 …… 089
茨城県日立市十王地区赤十字奉仕団 …… 090
東京都府中市赤十字奉仕団 …… 091
新潟県村上市赤十字奉仕団 …… 092
大分県宇佐市赤十字奉仕団 …… 093

8．応募事例紹介　災害救護・防災活動 …… 094

宮城県美里町南郷赤十字奉仕団 …… 095
神奈川県大磯町災害救護赤十字奉仕団 …… 096
富山県射水市大島赤十字奉仕団 …… 097
長野県中川村赤十字奉仕団 …… 098
長野県原村赤十字奉仕団 …… 099
岐阜県垂井町赤十字奉仕団 …… 100
静岡県掛川市赤十字奉仕団 …… 101
三重県伊勢市地区地域赤十字奉仕団 …… 102
岡山県新見市哲多町赤十字奉仕団 …… 103
愛媛県宇和島市宇和島赤十字奉仕団 …… 104
熊本県宇城市地域赤十字奉仕団 …… 105

9．応募事例紹介　赤十字思想の普及・ＰＲ活動、社員増強に対する支援対策、及びその他特色ある活動 …… 106

長野県青木村赤十字奉仕団 …… 107
愛知県津島市赤十字奉仕団 …… 108
兵庫県加東市赤十字奉仕団 …… 109

赤十字奉仕団活動事例集　応募事例一覧 …… 110

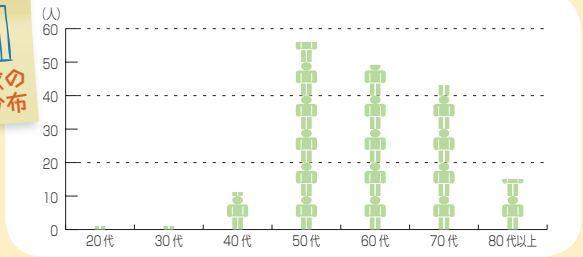
# 高齢者支援活動

北海道北広島市赤十字奉仕団

# 北海道北広島市 赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和45年９月
- 団 員 数：176人（女性：168人／男性：８人）
- 委 員 長：長谷川　眞知子

団員数の年代分布




北広島市の地域の概要

- 人　　口：60,987人
- 世　帯　数：25,303世帯
- 面　　積：118.54 平方キロメートル
- 高齢者比率：19.5%（65歳以上）

## 北海道北広島市

### 地域紹介

北広島市は、札幌市と新千歳空港の中間に広がるなだらかな丘陵にあり、豊かに息づく緑の環境、ゆとりの土地空間、整備された交通網など自然と都市機能を併せ持つ町です。

明治17年に広島県人25戸103人が一村形成を目指して集団移住し、本格的な開拓の鍬がおろされてから120年余が経ちました。

札幌市を中心とする道央圏の中で、宅地開発や工業団地の造成、各都市施設の整備が進められて着実に成長を遂げ、平成８年に市制を施行、平成16年には、人口６万人を達成しました。クラーク博士が“ボーイズ・ビー・アンビシャス（青年よ大志をいだけ）”の名言を残したゆかりの地でもあります。

先人のフロンティア精神を受け継ぎながら、豊かな自然や美しい緑に包まれた都市環境を生かし、自然との共生を基本に市民相互の温かい交流や活発な産業活動のある、生き生きとした生活文化都市創造のために歩み続けています。

北広島市にあるクラーク博士の記念碑▶

**奉仕団の主な活動**

- 社員（社費）募集活動
- リサイクルバザーの実施、ＮＨＫ海外たすけあいの募金活動
- 救急法、ハイゼックスを使用した炊き出し等の実演講習の実施、防災訓練時に炊き出し担当などの災害救護・防災活動
- 高齢者支援活動（話し相手、高齢者福祉施設での手芸指導、ゲーム大会のレクリエーション等）
- 雑巾を縫製して学校に寄贈（平成19年度は1,800枚。30年間継続）
- 地域のイベントに参加して、ポスター、チラシ、ＰＲグッズの配布による赤十字思想の普及活動
- 移動献血車での献血呼びかけ支援
- 障害者宅におけるゴミ出し活動
- 高齢者福祉施設での清掃や花植えの活動
- お年寄りへの芸能奉仕活動

雑巾作り▶

# 地域における高齢者支援活動「赤十字ふれ愛サロン」の実施

**活動に至るまでの経緯**

10年程前（平成10年）から市が主催する脳卒中後遺症による障害者を対象にした交流会に年３回協力しています。この事業が平成19年４月からお年寄りを対象にした、閉じこもり予防のための事業へと変わってからも、年に２回協力しています。

この事業への協力を通じ、外出する機会も少なく、家でテレビばかり見ているお年寄りが多いことに気づき、赤十字奉仕団が主催する事業として、地域のお年寄りが利用できるサロンを開設することにしました。

◀▲サロンの入り口、チラシ

## 活動内容

これまで10年間、市の事業に協力してきたノウハウを生かし、参加者に楽しんでいただくことには慣れていましたので、奉仕団員が一丸となって進めることができました。

活動の準備や事前の広報については、市の広報誌や地元の新聞、ＦＭラジオなどのメディアに幅広く協力を依頼しました。また、活動を行うにあたり、赤十字マークが広く一般の皆様に対して、心を安心させるマークであることから、赤十字の旗を団員による手作りで作成しました。

お年寄りと一緒に手芸

「赤十字ふれ愛サロン」の開催当日、奉仕団員は、会場の入り口に赤十字旗と「ふれ愛サロン」の垂れ幕を掲げ、ドアを開け放しにし、予め用意した懐かしい音楽と暖かいコーヒーの香りとともにお年寄りを笑顔で出迎えます。

サロンが始まると、お年寄りは奉仕団員と一緒にコーヒーを飲みながら、おしゃべりに花を咲かせます。手芸を楽しんでいる姿はとても生き生きとしています。

身体を動かすレクリエーションの「ペットボーリング※」や「宝引き」などのゲームを行い、会場は笑いの渦につつまれ、そうこうしているうちに初対面同士のお年寄りも皆仲良くなっています。

ペットボーリング

また、奉仕団員が手作りをした「巾着袋」や「小箱」等のゲームの景品は、大変喜ばれています。

最後は、お年寄りと奉仕団員全員で大きな輪になり「ソーラン節」や「炭坑節」などの民謡の曲に合わせて踊ります。踊りは団員が踊りやすいように振り付けを工夫しており、全員で心地のよい汗を流しながら賑やかに踊っています。

お年寄りの一人ひとりが満足して団員と握手を交わし、足取りも軽やかに元気に帰る後姿を見送りながら、団員はこのサロンの活動を開設したことの喜びを感じています。

※　ペットボトルを使用したボーリング

## 活動当日までの流れ

〔２ヵ月前〕
- 活動内容の詳細とそれぞれの担当者を決める。（役割分担）
- 後日、担当者・役員による打合せを行う。

〔１ヵ月前〕
- 手芸の下準備、ゲームの内容等を決める。
- ゲームの景品等を作成する。
- 「炭坑節」の踊りを創作し、必要な小道具（スコップやツルハシ）を手作りで作成して練習する。

〔２～３週間前〕
- 市の広報誌によりPR

〔前　　日〕
- 茶菓子、コーヒー等の買出し
- コーヒーメーカー、カップ等を借用

## 当日のタイムスケジュール

- 11：00　奉仕団員集合、会場設営開始
  入り口には「赤十字旗」とサロンの「垂れ幕」を設置
  会場内に机をパーティー形式に設置
- 12：00　コーヒー、お茶、お菓子、手芸用の材料（和紙など）を準備
- 13：20　お年寄りを笑顔で出迎え
- 13：30　サロン開始
  ①お年寄りと奉仕団員が一緒に手芸を行い、出来上がった手芸品は土産となる。
  ②ペットボーリング大会にて競ったお年寄りに景品を渡す。
  ③お年寄りも奉仕団員も全員一緒に輪になって、炭坑節を踊る。
  この時、手作りのスコップやツルハシを持って踊る。
- 15：00　サロン終了、次回のサロンの案内状をお年寄り一人ひとりに握手を交わしながら渡す。
- 15：30　奉仕団による後片付けの後、お茶を飲みながら反省会を開催
- 16：30　反省会終了、解散

輪になってソーラン節

お土産の宝引き

## 活動の費用、財源

年６回開催のうち、５回は参加費は無料です。12月だけは「ふれ愛クリスマスパーティ」ということで、クリスマス用の花やケーキ、果物等の分の負担とし、参加費500円をいただいています。

ゲームの景品やクリスマスパーティーのプレゼントなどは全て奉仕団員の手作りで、手芸品の材料などは全て団員からの無償提供です。参加費無料のサロンのコーヒーや茶菓代は、地区からの交付金で賄っています。

## 創意工夫している点

サロンの雰囲気を盛り上げるためにコーヒーの香りを演出として利用し、これがお年寄りにも大変好評です。サロンの開設時間は２時間程度ですが、その時間の中で、内容を３段階に亘って変化させ、飽きさせない工夫をしています。土産の手芸品、ゲーム、民謡曲から創作した踊りなど、回毎に奉仕団員が意見を出し合って、その日のサロンの内容を企画しています。そのほか、お年寄りが緊張しないように奉仕団員も自然体を心がけ、お年寄りと一緒に楽しむようにしています。

## 日頃から心がけていること

活動時には、必ず奉仕団マークの入ったエプロンやワッペンを身につけ、赤十字をＰＲしています。地区とは日頃から綿密に相談や報告等を行い、奉仕団の活動が地域に根ざしたものになるように連携を心がけています。

また、奉仕団員の特技や資格、得意分野等の個性を十分に発揮した活動をしてもらうために、役割分担をし、一人ひとりが奉仕団の活動を担い、やりがいや満足感を味わえるようにしています。

## 活動のために行っている研修会、講習会等

◎ 家庭看護法講習会（団員研修）
- 車椅子介助、災害時高齢者生活支援
- 三角巾の活用法

◎ 救急法講習会（団員研修）
- 心肺蘇生法（ＡＥＤの使用法含む）
- 喉に異物が詰まったときの応急処置

◎ 炊き出し釜を用いたハイゼックス実演（団員研修）

◎ 支部主催による基礎・中級研修会を受講

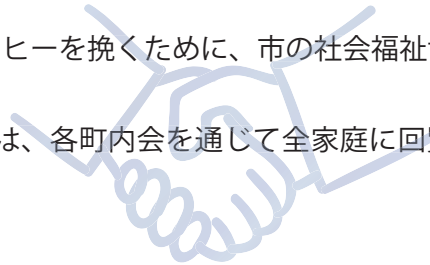
## 他団体等との連携

奉仕団の事務を担当している地区、市の社会福祉協議会、町内会など地域住民の協力により、奉仕団の活動も円滑に行うことができています。

たとえば、サロンの開催日について、地区から市で発行している広報誌に掲載の依頼をしたり、新聞や地域のラジオなどに幅広くＰＲをしていただくこともあります。ほかにも、写真撮影、垂れ幕や横断幕の作成などにも協力していただいています。

お年寄りをもてなすためのコーヒーについても短時間で沢山のコーヒーを挽くために、市の社会福祉協議会に協力いただいてコーヒーメーカーを借用しています。

12月の「赤十字ふれ愛クリスマスパーティー」の案内状については、各町内会を通じて全家庭に回覧をお願いしています。



## 活動の効果、成果

参加したお年寄りが「楽しいから」と友人を誘ったり、夫婦で参加するようになったりと、サロンを利用した人の口コミで、参加人数が徐々に増えています。

街の中のスーパーや道端で参加者に出会うと、自然と声を掛け合い、立ち話をするなど、回を重ねるごとに仲良くなり、サロン活動をきっかけとした地域のコミュニティの輪が広がっています。

また、地域の関係団体からも、「赤十字奉仕団の活動を話して欲しい」「見学させて欲しい」などといった依頼もあり、活動の反響が大きいことを実感しています。

手作りの手芸品

## 今後の展望

この活動を長く継続するためには、お年寄りの皆様の意見や感想を聞き、ニーズを取り入れた企画をしていくことが大切だと考えています。

また、将来的には、子育て支援の観点から、就学前の子どもとその親を対象にしたサロンの開設をしたいと考えています。そしてその際には、子どもとお年寄りのサロンを合同に開設して、子どもたちからお年寄りまでのふれあいの場、架け橋の場になることを目指しています。

お見送り

# 地域で「必要な実際的事業」に自ら取り組み、発展させている北広島市赤十字奉仕団の活動

国際医療福祉大学
教授　小林　雅彦

北広島市赤十字奉仕団は、市が行っている介護予防事業などに以前から協力してきましたが、その中で、お年寄りの外出機会が少ないことを肌で感じ取ったことから、奉仕団主催による「ふれ愛サロン」（以下「サロン」）をはじめました。

昭和31年に日本赤十字社が制定した赤十字奉仕団規則第１条には「明るい住みよい社会をきずきあげていくために必要な実際的事業に奉仕する」という奉仕団の目的が掲げられていますが、北広島市赤十字奉仕団はまさしくこの「必要な実際的事業」を自らの手で始めたわけです。

２ヵ月に１回、市内の２地区で同時に開催されるサロンは、参加者も着実に増え、地域に根ざした活動に発展しています。このように、自らが事業を始め、そして発展させることができた背景や条件はいくつも考えられますが、団員の皆さんにお話を伺った中で、印象に残った点を３点に絞って報告します。

第１に、団員の中に様々な資格や専門的知識、経験、特技などを持つ人がいることです。元看護師長や元幼稚園教諭などの専門家はもとより、詩吟、太鼓、手芸、唄、踊り等々、北広島市赤十字奉仕団は実に人材が豊富です。そして、重要なことは、それらの豊富な人材の一人ひとりを委員長がよく把握し、上手にそれぞれの出番を作っていること、言い換えれば、事業の中で人材が最大限生かされていることです。団員の皆さんが、口々に、そして楽しげに「気がつくと委員長にうまいこと乗せられて色々なことをやってしまっている」と話していたことが印象に残っています。

第２に、ふれ愛サロンに限りませんが、様々な活動を団員自身が楽しみながら行っていることです。この点は、今回だけでなく、活発に活動している全国の赤十字奉仕団を訪ねて共通に感じる点です。今回、あらためてそのことを強く認識しましたが、楽しむことが次の活動に向かう意欲を生み出していると思われます。

第３に、事前準備を丁寧に行っていることです。準備では、例えば、サロンの中の１時間で出来る手芸をまず考え、当日ゼロから始めたのでは時間内に完成できない恐れがあるので、ある程度の下準備をしておきます。その際、肝心な部分は高齢者等が出来るように残しておきます。そうすることで、参加者一人ひとりが達成感を得ることが出来るわけです。

最後に、エピソードとして、サロンに参加しているお年寄りから、「いつもお世話になっているので寄付したい」という申し出があり、それを赤十字の寄付としていただいた話や、町内会の役員の間で、「サロンを実施している赤十字奉仕団」ということで、より身近な存在として認知度が高まり、社資募集もしやすくなったという話を聞きました。サロンは地域に密着した活動であり、その取り組みが奉仕団の認知度を高め、他の事業にもプラス効果をもたらす好例だと思います。北広島市赤十字奉仕団のこれからのますますの発展に期待しています。

コラム1

# 『もっとクロス！計画』実施中！

日本赤十字社では赤十字活動をもっと人々に知ってもらい、理解してもらうために、社会と、市民と、時代と、そしてなによりも赤十字の社内でもっとクロスしていく活動を『もっとクロス！計画』と命名して平成20年９月から全社的に取組んでいます。

**『もっとクロス！計画』のねらいは３つ。**

（１）日赤で働く一人ひとりが日赤の使命、組織、事業について正しく理解する。
（２）日赤の使命、組織、事業をわかりやすく説明できるようにする。
（３）より多くの人に赤十字運動に参加してもらえるようにする。

日本赤十字社本社・支部・施設に従事する全ての職員等を対象に目的を達成するための社内キャンペーンを実施しています。今後は赤十字奉仕団・ボランティアにも同計画のコンセプトを浸透させていただくことを考えています。ご理解とご協力をお願いします。

2. モデル事例

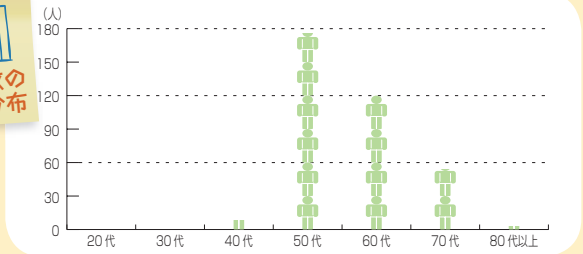
# 児童の健全育成活動

青森県むつ市大畑分区赤十字奉仕団
埼玉県越谷市赤十字奉仕団
兵庫県姫路市赤十字奉仕団
徳島県徳島市地区赤十字奉仕団
長崎県諫早市赤十字奉仕団

# 青森県むつ市大畑分区 赤十字奉仕団

●結成年月：昭和50年３月
●団 員 数：361人（女性：361人／男性：0人）
●委 員 長：北川　ヤヨヱ

団員数の年代分布




むつ市の地域の概要

●人　　口：65,129人
●世　帯　数：28,430世帯
●面　　積：863.79 平方キロメートル
●高齢者比率：23.2%
（65歳以上）

## 青森県むつ市大畑町

### 地域紹介

むつ市大畑町は、平成17年３月にむつ市、川内町、脇野沢村と合併し、「むつ市」となりました。市の北側に位置し、大畑川河口にある大畑港は、下北随一のイカの水揚げを誇る漁業の町です。大畑川上流に位置するカッパ伝説のある薬研（やげん）温泉郷は、津軽海峡に注ぐ大畑川の上流約10kmの渓流沿いにあり、静かな温泉の薬研温泉と、さらに約２km上流の奥薬研温泉の２つの温泉からなっています。薬研渓流遊歩道は、ヒバやブナなどの深い森におおわれ、新緑や紅葉の季節の移り変わりを楽しめます。何千年もの間、侵食作用によって形成された異なる河底美・河岸美が、四季折々に混生林・清流・岩盤等が一体となって様々な美しさを見せてくれます。ニジマスを津軽海峡で育てた海峡サーモンも絶品です。

町の南西に位置する恐山は霊場として、人の死後霊魂がここに常住すると信じられ、年に一度の大祭は祖先の霊を供養し、家族の安穏を祈願し、世の平和を願うという習わしがあります。毎年７月22日には上山式が行われ、７月22～24日は大般若祈祷、７月20～24日には、大施餓鬼法要が行われます。期間中はイタコの口寄せが行われ、今は亡き人の声に涙する光景が見られます。

薬研温泉郷にある全国でも珍しい露天風呂「カッパの湯」

**奉仕団の主な活動**

- 献血推進活動
- 社員募集　分団ごとに各戸訪問して実施
- NHK海外たすけあい等の募金活動　母体となっている婦人会と協力して活動
- 災害救護訓練での炊き出しの実施
- 高齢者への支援活動　ひとり暮らし高齢者との食事会（年２回）
- 団員の意識高揚のための研修会の実施



## 活動内容

むつ市大畑分区赤十字奉仕団では献血推進活動への取り組みは以前より行われてきましたが、平成15年から17年まで県支部のモデル奉仕団の指定を受けたことを契機として、改めて献血推進活動に力を入れることになりました。

### ●献血推進活動

移動採血者の大畑地域への配車年間計画に合わせて、事前に告知の張り紙を張るなどのPR活動や献血会場の準備、呼び込み、受付などの活動を行うほか、献血後、感謝の気持ちを述べ、併せて青少年赤十字に加盟している小学校のメンバーが書いた「感謝の言葉」を封筒に入れ、予め奉仕団で用意したティッシュ入れと共に献血者に渡します。 贈られた献血者の方からは「ありがとう」とか「今度あれば、また来るよ」という明るい声が返ってきます。また小学生の感謝の言葉を見るのが楽しみだという献血者の方もいらっしゃいます。早朝からの活動で少々くたびれ気味の私たちも、この一言で疲れも吹っ飛んでしまいます。

大畑地域への移動採血車の配車は年２回から３回行われ、一回につき大畑庁舎前、大畑診療所前、ホームセンター前やスーパーマーケット前など３、４ヵ所の場所を巡回します。

毎回50人ほどの住民から献血の協力が得られますが、地域の人々や団員の中での献血に対する意識と意欲が回を追うごとに高まってきているように感じます。

献血の受付を行う奉仕団員

「感謝の言葉」を渡す奉仕団員

### ●青少年赤十字加盟校との連携

前委員長が学校とのつながりを持っていた方なので、地元の青少年赤十字加盟校に働きかけ、青少年赤十字メンバーの児童から献血者への感謝の気持ちをメッセージとして書いてもらうという活動が実現しました。学校としても命や健康について学ぶ機会となることから、道徳や特別活動の１時間の中で、奉仕団が献血についてのビデオ（「アンパンマンのエキス」など）を使って命や健康の大切さについてお話をし、質疑

応答を経た後にメッセージを書いてもらいます。学校との協力は一時休止していた時期もありますが、加盟校の校長先生をされていた赤十字奉仕団支部指導講師の協力を得て、平成20年９月から大畑小学校で再開することができました。

基本的には５、６年生を対象としていますが、平成20年は３年生２学級を対象に実施しました。スケジュールは学校の年間計画が完成する年度初めに相談を行います。

学校で説明する奉仕団

これらの献血推進活動とあわせて、むつ市大畑分区赤十字奉仕団では市内で学校を中心に展開している食生活改善グループの活動にも参加しています。献血の促進活動を通じた命と健康の大切さを理解することにつなげて、大畑の小学校の高学年を対象に、食事のメニューに合わせて、「カルシウムについて」など、将来の健康のために必要な栄養の話をし、子どもたち自身も将来献血のできる健康な大人になれるように説明しています。

### 「感謝の言葉」とティッシュ入れ

ティッシュ入れは、ボランティア団体の「つくしんぼの会」が活動資金募集の一環として作成しているものを安く譲っていただき、それに団員が赤十字マークを協力して張り付け、中にティッシュを入れ、小学生の書いた「感謝の言葉」とともに献血者の方にお渡ししています。

献血協力者あての児童からの感謝の言葉とティッシュケース

## 活動当日までの流れ

- 1ヵ月前　むつ市大畑庁舎健康福祉課の担当者を交えて相談
  小学校へ出向き、献血の話を行ってメッセージを依頼
- 3週間前　ポケットティッシュ入れの打ち合わせ、封筒に赤十字マークを記入。
  併せてティッシュ入れにティッシュを入れる作業および封筒にメッセージを封入。

## 当日の実施項目

献血会場準備、担当者とともに受付け、告知の張り紙や呼び込みの実施、献血後にティッシュと感謝のメッセージ入り封筒の贈呈等を行い、１日で４ヵ所をまわり、全日程で７時間かかります。

## 活動の財源

- 支部の助成金
- フリーマーケットでの収益金（団員の持ち寄るタオルやバスタオルの販売）

## 他団体、地区分区等との連携

活動の拠点は日本赤十字社むつ市大畑分区のある総合福祉センターです。３年間のモデル指定を機にこれまで以上に行政担当者の方々との絆が深まりました。行政の献血担当窓口も同センターにあるので活動が円滑に推進できます。

小学校での児童との交流は、学校行事に併せて組み入れてもらえるように連絡を密にしています。

## 活動の効果、成果

献血者にお渡しする児童・生徒からの感謝のメッセージは、大きな反響を呼んでいます。「感動した」との声がたくさんありました。「重い病気で入院した時、輸血をしてもらって治った。大きくなったら恩返しに献血をしたい」「体に気をつけ、栄養のあるものを食べて丈夫になり献血したい」などの内容が書かれています。なによりも地域の人々の献血に対する関心が高まったこと、団員のモチベーションも上がって献血に積極的に取り組んでいることが見受けられます。

## 創意工夫している点

献血者への感謝の言葉を書いてもらうために、何度も学校訪問をし、校長先生をはじめとする先生方へ献血の大切さを継続して訴えています。また団員は、参加している「食生活改善の会」で培った知識のもと、献血できる体作り、食生活の大切さを児童へ指導しています。

また移動採血車来車時の工夫点としては、活動時間が７時間にも及ぶことから、高齢団員の多い当団としては、活動時間を半日単位としたり、配車場所に近い分団から協力を得るような調整・工夫に努めています。

## 日頃から心がけていること

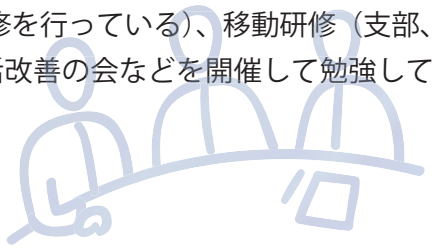
若い人たちに赤十字奉仕団の理解を深めてもらうための働きかけ、きっかけ作りを目下模索しています。また男性団員の加入を広めていくことも課題のひとつです。さらに災害に際しては、日ごろから実技研修や話し合いをして非常時に備えています。

## 現在抱えている悩み、問題点

奉仕団の運営資金が乏しく、活動を続けるために団費を値上げすることも考えています。団塊の世代を含む幅広い年齢層からの参加受け入れを図ったり、現役の団員に継続をお願いしたりしながら、奉仕団の活性化に努めていきたいと思います。他にも、分区の担当者の異動が頻繁なため、変わるたびに、奉仕団のことを一からわかっていただくのに時間がかかったりすることも悩みの種です。

## 団員同士のコミュニケーションの方法

分団長会議を増やし、自由に意見を言える雰囲気作りに努めています。また、１日研修（総会に併せて炊き出しや救急法の研修を行っている）、移動研修（支部、施設、他団の訪問など）、献血推進のため食生活改善の会などを開催して勉強しています。



## 今後の新たな事業への展望

献血推進活動と並行して青少年赤十字の普及や加盟推進に力を入れてきました。これまで小学校３年生80人とともに団員も熱心に学習しました。現在、小学校１校との連携を行っていますが、大畑の他の３校の小学校にも働きかけていきたいと思います。

# 地域の中で多くの人々に支えられたむつ市大畑分区赤十字奉仕団の活動

国際医療福祉大学
教授　小林　雅彦

青森県むつ市大畑分区赤十字奉仕団は、地元の大畑小学校と連携して、献血者に感謝のメッセージを渡す活動をしています。お話を伺い、活動がうまく進んでいるポイントとして特に印象に残った３点を紹介します。

第１に、活動を多くの人で支えるという視点を持つことです。「高齢になると献血はできないが奉仕団としてならお手伝いできる」という団員の話から、「では、より積極的に出来ることは何か」と考えた結果、以前から福祉教育に取り組んでいる大畑小学校と連携して、生徒にメッセージを書いてもらう活動をはじめました。このとき、団員が「自分たちだけでやれることは何か」と考えなかったことが重要です。自分達が頑張るのはいいのですが、それだけでは活動が広がらず限界があります。特に、献血のように多くの人の参加が必要な事業では、それぞれ自分のできることを通して関わることが重要です。メッセージを書く（小学生）、献血をする（献血者）、運営を手伝う（奉仕団員）等、それらが１つにつながることで、献血が活発に行われ、広がっているのだと思います。

第２に、生徒達の学習とつなげていることです。小学生に対し、ただメッセージ作成を頼むのではなく、ビデオ「アンパンマンのエキス」の上映や団員の講話を通して献血について学ぶ場にするとともに、健康の大切さを教えながら、「献血の出来る体づくり」も一つの目標にして食育も行っています。こうして、大畑小学校の生徒は、献血に協力しながら自らの健康を考えたり、食事の大切さを学ぶ機会を得ているわけです。

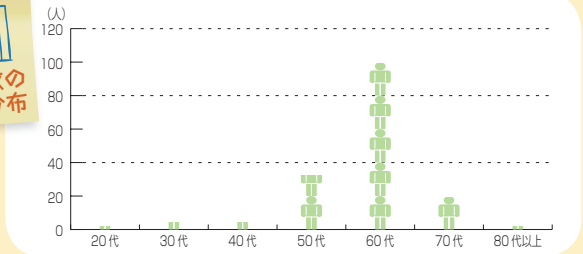
第３に、小学校との橋渡し役の存在です。もともと活動が始まった時点では、当時の委員長を中心にした小学校での活動実績がありましたが、その後、少し間があき、平成20年度にメッセージを書いてもらう際には、改めて年度途中での小学校へのお願いが必要になりました。小学校では年間計画があらかじめ組まれていることから、趣旨には賛同を得られても、実際に協力を得ることは難しい場合があります。しかし、大畑分区赤十字奉仕団の場合は、青森県内に12人いる指導講師の中で、地元の「むつ地区」を担当する元小学校の先生だった指導講師が橋渡し役を担い、協力を得ることができました。橋渡し役は、必ずしも指導講師とは限りませんし、直接交渉するという方法ももちろんありますが、状況によってはこのように橋渡し役に動いてもらうことも有効だと思います。

以上、３点に絞ってまとめましたが、大畑分区赤十字奉仕団の活動は、地域で活動を進めるうえで周囲との連携が必要なことをあらためて教えてくれています。この活動が定着し、さらに理解者、協力者が広がることを期待しています。

# 埼玉県越谷市 赤十字奉仕団

- 結成年月：平成11年４月
- 団 員 数：162人（女性：148人、男性：14人）
- 委 員 長：北条　住子

団員数の年代分布




越谷市の地域の概要

- 人　　口：316,521人
- 世　帯　数：127,131世帯
- 面　　積：60.31 平方キロメートル
- 高齢者比率：17.6%（65歳以上）

## 埼玉県越谷市

### 地域紹介

越谷市は、埼玉県南東部、県庁所在地であるさいたま市に隣接する人口約32万人の市です。これは県内においてはさいたま市、川口市、所沢市、川越市についで第５位の人口を誇っており、「彩の国」の中核都市にも指定されています。

また「埼玉県民の鳥」であり、「越谷市の鳥」でもある国指定の天然記念物「シラコバト」は、越谷市周辺が主な生息地として定められており、越谷市ではその元気な姿を見ることができます。

越谷市の鳥『シラコバト』

### 奉仕団の主な活動

- 社員（社資）募集…社員増強運動用配布資料の梱包作業を実施
- ＮＨＫ海外たすけあい募金活動…市内７ヵ所のイベントに参加し、赤十字募金活動を実施
- 災害救護活動…埼玉県支部と共催で救急法講習会（基礎・養成）を年１回開催
- 高齢者の支援活動…高齢者福祉施設における車椅子介助活動を実施（年７回）
- 児童の健全育成活動…市内青少年赤十字加盟校（小･中学校）と活動を通して交流
- 赤十字思想の普及活動…地域住民との交流を図り、赤十字思想を普及
- その他の福祉活動…県民健康村における「園芸ボランティア」
- 研修会…クラフト講習会（募金へのお礼の品を製作するための研修会、年５回）、スタディーツアー（近隣の赤十字施設を視察）、救急法基礎講習会（ＡＥＤ使用）の受講、市や地域の防災訓練・イベントへ参加、テント設営や非常食の炊き出しを実施
- 広報活動…広報誌「赤十字奉仕団だより」の発行（年２～３回発行、300部）

# 児童の健全育成活動の実施

## 活動に至るまでの経緯

越谷市赤十字奉仕団は、平成11年３月の結成以来、市内の各地域のイベントに参加し、義援金等の募金活動を中心に活動をしていました。募金活動の際には、募金協力者に対し、奉仕団員の手作りによる記念品、タオルで作った「子犬」や「うさぎ」のぬいぐるみ、「赤十字ビーズブローチ」等を差し上げています。

奉仕団結成当初から、募金活動の協力者として市内の東中学校の生徒が組織している「青少年赤十字委員会」に声かけをしたことが、現在行っている子育て支援（子どもたちとの交流）活動のきっかけとなりました。

その後、平成16年、17年と埼玉県支部の指定するモデル奉仕団の指定を受け、「青少年赤十字能楽教室」や「赤十字ビーズブローチ作り」、「クリーンパトロール事業」を青少年赤十字委員会と連携して実施し、交流活動の拡大を図るなど「赤十字子育て支援」として子ども参加型の活動を積極的に企画するようになりました。

これらの活動を継続することで、一人でも多くの子ども達が赤十字活動に参加できるよう啓発活動を行っています。

子どもたちに「赤十字って何？」をお話する委員長と団員の皆さん

## 活動内容

子ども参加型、地域密着型の活動を事業内容により地域の関係団体に協力をいただいています。団員が各会場に出向き、直接子どもたちに体験をさせることを重視し実施しています。

●「赤十字ビーズブローチ作り」

結成10周年記念事業として奉仕団が主催する活動で、地域の小学生や中学生と赤十字ビーズブローチ作りを一緒に行うことによって交流を図っています。

●「青少年赤十字能楽教室」

奉仕団主催で、地元の能楽の先生（関根祥六・観世流能楽師）のご指導をいただき、日本の伝統芸能に直接触れてもらう機会を作りました。

●「小・中学校クリーンパトロール」

市の青少年赤十字協議会で主催している活動です。従来からＪＲＣ加盟校には「赤十字奉仕団だより」をお届けしています。また、ＪＲＣ協議会の総会に出席したり、ＪＲＣの小･中学生の児童・生徒と一緒に清掃活動（ゴミ拾い）を行ったりして交流を図っています。

●「ＡＥＤ体験」

地域の消防署の方を講師として迎え、小学校の児童にＡＥＤの使用方法を体験していただきました。また、ＡＥＤを使用した救急法のやり方を寸劇にして発表会を行いました。

●「避難訓練時の炊き出し実習」

小学校から避難訓練時にハイゼックスを使用した炊き出しの実演を依頼されたことを受け、具体的な事項について打合せを重ねて奉仕団が学校に訪問し、炊き出しを行い、非常食の体験を教師やＰＴＡにもしていただいています。

●「ハイゼックスの炊き出し体験学習（結成10周年記念事業）」

団員研修の一環として検討し、「子ども対象事業」の事業としたことから、市の事業「放課後子ども教室」の場で実施していくことになりました。

活動当日までの流れ

## 越谷市放課後子ども教室「ハイゼックス炊き出し体験学習」（子育て支援）の実施例

平成20年８月８日（金）
参加人数　子ども達20～25人程度（学校ごとではなく、地域ごと）
スタッフ数　奉仕団員10人、越谷市放課後子ども教室のスタッフ２～３人。市の社会福祉課の職員１人

14：00　開会、委員長挨拶（①赤十字のお話。「赤十字って何？」、「赤十字マークについて」、「青少年赤十字について」。②本日の概要等を子どもたちに説明）
子どもたちは４つの班に分かれ、奉仕団員もそれぞれ担当の班に付き添います

奉仕団員は子どもたちにわかりやすくハイゼックス体験を指導

14：24　ハイゼックス体験開始
　一班から順々に調理場に移動し、ハイゼックスに米、水を入れて、輪ゴムで封をする作業を開始します。奉仕団員はみな手際よく、子どもたちにわかりやすくやり方を指導しています。また、予め、この作業がやりやすいように、米と水量は紙コップではかり、底を切り抜いたプラスチックコップを予めハイゼックスに輪ゴムで固定し、スムーズに米、水が入れられるように工夫をしています。
　団員が子ども一人ひとりに順番に丁寧に教え、一通り作業を終えて、ハイゼックスを鍋にかけて「今から30～40分だから、何時ごろだね」という説明をし、一度ハイゼックスの部を終了します。

「赤十字ビーズ・ブローチ」作り

完成した赤十字ビーズ・ブローチ▶

14：40　赤十字ビーズブローチ作り（ハイゼックスの炊き出し中に実施）
　ハイゼックス炊き出し準備の作業が終わった一班から、ハイゼックスが炊き上がるまでの時間を利用し、「赤十字ビーズ・ブローチ」作りを行います。
　班毎のテーブルに、一人ひとりに、赤と白のビーズ、安全ピン（親ピン１本と子ピン10本）、

説明資料が配られ、担当の奉仕団員が丁寧に作り方を教えます。

子どもたちは細かい作業ながら、集中して各々のビーズブローチ作成に取り組んでいます。さっきまでにぎやかだった子どもたちも、この時ばかりは自分の作業に夢中になっていました。早めにできた子は、「まだできていない子の手伝いを！」とボランティアの精神、気づきの精神を発揮しつつ、作業は進んでいきました。

赤十字ビーズブローチ作りのいいところは、このブローチが思い出の記念品になることと具体的な達成感が味わえること、そして自然に「赤十字」の話ができることです。

15：10　炊き上がり

ハイゼックスがすでに炊き上がり、ビーズブローチ作りの終了した班の子どもたちから、再び調理場へ移動します。

ここで予め子どもたちに持ってきてもらったハンドタオルの上に、熱々のハイゼックスを一人ひとりのタオルの上で渡し、包んで持って帰るように指導します。そして、別途試食用に作っていたハイゼックスを小さい容器で小分けにして人数分配り、ハイゼックスの試食を行います。このハイゼックスは予めだし汁が入っているので、そのまま食べてもとても味が良く、子どもたちは自分たちで作ったハイゼックスができた達成感を味わっていました。

まとめの挨拶をして終了

15：34　最後に奉仕団委員長や「越谷市放課後子ども教室」※のコーディネーターから今日の活動のまとめの挨拶をして終了になります。

15：40　奉仕団と行うプログラムはここで終了しますが、子どもの親たちが戻ってくる午後４時半までは引き続き「放課後子ども教室」による読み聞かせなどが行われます。

### ※「越谷市放課後子ども教室」について

平成19年度から国において創設された「放課後子どもプラン」に基づき行われているのが「放課後子ども教室推進事業」です。これは、すべての子どもたちに安全・安心な子どもの活動拠点（居場所）を設け、地域の人々の参画を得ながら、子どもたちと共に勉強、スポーツ、文化活動、地域住民との交流活動等の取り組みを推進するもので、越谷市でも、公民館などを活動拠点として、放課後や週末に地域のボランティア等の協力を得て実施しています。

### 活動の費用、財源

費用……講師謝礼、材料費、準備費、会場費、イベント出店料

財源……埼玉県支部からの助成金、日本赤十字社越谷地区からの助成金（地区交付金）

### 他団体等との連携

- 市内の小・中学校や公民館等と連携して実施する活動がたくさんあります。
- 越谷市社会福祉課に協力していただいていることは次の通りです。
  ①啓発文書の配布　②事業の宣伝　③実施する際の助言（アドバイス）
- 越谷市地区に協力していただいていることは次の通りです。
  行政とのパイプ役として常に担当職員との間で報告・連絡・相談の実施。
- 越谷市青少年赤十字協議会に協力いただいていることは次の通りです。
  協議会に対して事業への参加の呼びかけを行い、機会があるごとに交流を実施。

## 活動の効果、成果

多方面にわたる子育て支援により、募金活動に協力する子どもたちの増加や青少年赤十字加盟校の増加などという形で、赤十字活動に対する理解を広げるための一助になっています。このことは、越谷市青少年赤十字協議会からも高い評価を受けています。

また、学校や公民館などの地域と連携した活動を行ったことにより、地域における奉仕団の存在が再認識されたとともに、赤十字奉仕団の活動にも注目が集まりました。

奉仕団員からは、活動をしたことで「赤十字活動の責任を自覚することができました」「子育て支援で自分にできることが生かせました」などの声が聞かれました。このことは、新たな団員の確保や奉仕団活動への参加者増加などの成果を上げています。

## 創意工夫している点

子育て支援の意味を幅広く捉え、児童の健全育成活動を主眼に置いて活動しています。

具体的には、「赤十字ビーズブローチ作り」を通じての交流活動やイベント会場における「100円玉募金体験綿菓子」※などの実施により、子どもたちと協力しながら、募金活動にまで広がりを持たせていることです。

また、越谷市ならではの活動として、「青少年赤十字能楽教室」事業により、「越谷市らしさ」や「地域とのつながり」を大切にした独自色を持った活動をしていることで、創意工夫をしています。

プログラム終了後の反省会

※　100円を募金してもらい、綿菓子作りの体験ができる事業

## 日頃から心がけていること

奉仕団員各自が「できることを出来る範囲で」という活動方針を心がけて活動に参加し、クラフトや料理などといった各自が得意としている分野を生かしています。そのことにより、生活のリズムに合わせて無理なくボランティア活動を組み込み、責任の持てる範囲の活動をしています。

また、奉仕団員が地域で密着して活動できるように団員をそれぞれの地域の５分団に編成して、地域住民・各種団体との関係を大切にしています。

## 現在抱えている悩み、問題点

学校との連携を考えたときに、当初はもっとスムーズに連携が図れると考えていましたが、実際には、学校の教育現場というのは、すでに年間行事が決まっており、そこにさらに追加していただく必要があります。そのためには、学校長と早期の連絡・調整を行い、活動に対するご理解をいただくことが何よりも重要であり、改めてその難しさを感じました。

他方で、実施後に「有意義な活動だった。」との声もいただくこともあり、これからも学校長やＰＴＡ等への働きかけに工夫をしていく必要があると考えています。

## 今後の展望

平成20年に結成10周年を迎えたことを契機に、児童の健全育成活動支援事業の見直しを行い、社会情勢の変化や子育て環境に対応したものへと充実を図る予定です。

子どもたちを中心にした事業を企画・実施することで赤十字を支える未来の社員になってもらえるよう意識の醸成を図るとともに、「人に役立つ優しい心」を育み、成長を支援し、赤十字思想の普及や青少年赤十字加盟校の増加へとつなげたいと考えています。

# 地域に必要とされている奉仕団活動を展開

## ―越谷市赤十字奉仕団の活動―

帝京平成大学
助教　山口　佳子

越谷市赤十字奉仕団の活動に、子どもたちに交じって参加させて頂きました。子どもたちは赤十字の活動紹介を生き生きとした表情で聞き、「１日１回以上、人のためになることをしましょう」との呼び掛けに大きくうなずいていました。体験学習によって子供たちの社会的視野が広がり、大人たちが自らすすんで活動する姿に触れることで、自らの意思で様々な活動へ取り組むことにつながると思われます。自分で作った赤十字ビーズブローチを胸にした子どもたちの誇らしげな顔は、とても印象的でした。お母さんたちも参加しており、「赤十字活動について聞いたことはあったが参加したことはなかったので、いい機会でした」と話されていました。親子で参加することで、子どもたちと共に考え、分かち合うことができます。若い世代へ活動を広めるきっかけにもなるでしょう。

当奉仕団の優れている点は、組織の運営体制です。役割分担がなされ、責任をもって活動が行われています。他の多くの団体がメンバーの不足や高齢化に直面し、発展的な取り組みが難しくなり、新たなメンバーが加わりにくい状況にあります。組織が維持されるには様々な世代のつながりが必要です。ここでは、組織の運営にもあらゆる世代の協働がみられます。メンバーが、趣味や特技を生かし、自分にできることを積極的に提案しています。それぞれ仕事、家庭や地域での役割を持ち、忙しい生活の中で、無理なく参加しています。当日皆さんと共に過ごす中で、互いを尊重し、信頼し合っている様子が伺えました。だからこそ、できる範囲内で参加するということが可能になるのです。気軽に参加できる環境づくりは重要で、団員になったら縛られるようでは参加しづらくなります。自由意志にもとづくボランティア活動では、どのような人でもそれぞれの価値観やライフスタイルに合ったその人なりの活動をすることをお互いに認め合うことが重要です。ここではスタッフ自身が楽しみながら、自分らしく、生き生きと参加しています。いろいろな特技を出し合い、持てる力を発揮し、価値や生きがいを見出しています。自分の活動に主体的な意識と責任を持って臨む姿勢があり、役割分担、リーダーシップの分散がはかられています。これにより、どのメンバーが集まっても同様の活動ができ、長く安定して継続することができます。よって地域からの信頼、理解を得られ、さらに活動の場が広がり、赤十字への理解も広がっています。市内のイベントにはいつも声がかかり、様々な場で活動を行っています。越谷市赤十字奉仕団は地域に必要とされている、頼りになる存在と言えるでしょう。

# 兵庫県姫路市 赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和23年８月
- 団 員 数：17,942人（女性：17,942人、男性：０人）
- 委 員 長：有馬　妙子

**団員数の年代分布**

年代別団員数については不明

**姫路市の地域の概要**

- 人　　口：533,026人
- 世　帯　数：208,701世帯
- 面　　積：534.27 平方キロメートル
- 高齢者比率：20.1%（65歳以上）

## 兵庫県姫路市

### 地域紹介

およそ１万年昔の縄文時代から人が住んでいたといわれる姫路の地には、太古の昔から受け継がれた壮大なロマンが宿っています。この地が播磨の中心になったのは、大化の改新の後（７世紀）に播磨国の国府が置かれ、さらに８世紀中ごろに聖武天皇の勅令で国分寺が建てられてからのことです。今に伝わる広峯神社や書写山円寺増位山随願寺が創建されたのも同じ時代です。そして、室町時代に入ると、播磨の豪族赤松氏によって姫山とりでが築かれ、その後に秀吉が天守閣を持つ姫路城を築城、次いで姫路に入った池田輝政が現在の名城を築き上げました。

このような郷土の歴史を教えてくれる施設が、姫路城のすぐそばにあります。貴重な民族資料を展示する兵庫県立歴史博物館と、城郭の研究を行う日本城郭研究センターです。姫路城のヒロイン「千姫」ゆかりの千姫天満宮や、恋物語「お夏・清十郎」のモデルになった二人の墓のある慶雲寺をはじめ、伝説に彩られた史跡も市内に数多点在しています。また、平成８年４月、手柄山にオープンした姫路市平和資料館では、戦禍を浴びた被災都市として平和への願いをこめつつ、近代の歴史を紹介しています。

平成18年３月27日には飾磨郡家島町・夢前町、神崎郡香寺町、宍粟郡安富町を編入合併しました。「躍進を続ける播磨の中核都市」「心かよう交流の都市（まち）」を将来像に掲げ、地方分権時代の新しい行政体制の展開に向け、新たなステップを踏み出したところです。

兵庫県立歴史博物館

姫路市のシンボル、姫路城

## 奉仕団の主な活動

姫路市赤十字奉仕団には５つの分団があり、社員（社資）募集活動、ＮＨＫ海外たすけあい募金活動、災害救護・防災活動、高齢者の支援活動、児童の健全育成活動等の活動を行っていますが、特にそれぞれの分団では次のような特色豊かな活動を繰り広げています。

- **八幡分団**……幼稚園における「七夕まつり」や「運動会」の実施を通じた子育て支援活動
- **的形分団**……幼稚園における「うさちゃんランド」事業の実施を通じた子育て支援活動
- **英賀保分団**…幼稚園における「七夕会」「皆で踊ろう」「やきいも大会」等を通じた子育て支援活動
- **野里分団**……「ふれあい訪問」「ふれあい給食」「三世代ふれあい遊び」「学習会」「お餅つき大会」等の実施を通じた高齢者支援活動
- **飾磨分団**……「ふれあい交流会」の実施（地域のお年寄りを招き、落語家を招いて漫談・漫才の公演会を実施するなど）を通じての高齢者支援活動

## 活動に至るまでの経緯

● **八幡分団**……20年程前から幼児期の子育ての大切さの重要性を力説し、月１回程度の学習会を持ちながら子育て支援に取り組んできましたが、今回、兵庫県支部からモデル奉仕団の指定を受けたことを契機に、より一層の活動推進につなげることができました。

● **的形分団**……「こどもたちを見守り、共に育てる」をコンセプトとして地域全体で子育てを支援していくことができる街づくりを目指し、後世を担うこどもたちのために何ができるかを団員同士で協議を重ね、幼稚園・保育所と連携して、年８回の活動を開始しました。

● **英賀保分団**……英賀保校区連合婦人会が中心となり平成19年度のコミュニティー事業の一環として、姫路市社会福祉協議会、英賀保校区各種団体と協働し、年間行事計画を立て活動を開始しました。

● **野里分団**……ふれあい訪問、ふれあい給食、高齢者支援活動等を実施してきました。三世代ふれあい映画会などを実施するなど、ユニークな活動にも取り組んでいます。廃園間近の幼稚園の庭の桜が見ごろを迎えると、お花見やお餅つき大会を計画するなど、常に地域の人々にふれあいの場を提供しています。

● **飾磨分団**……継続して地域高齢者生活支援活動に取り組んでおり、毎年５月の始めに年度の計画を立てますが、老人クラブの皆様を対象に、どのようなことが一番喜んでいただけるかを最優先に考えています。今回はブームとなっていた落語を取り上げることに決めました。

## 活動内容

● **八幡分団**……８月初旬に姫路市立八幡幼稚園の遊戯室をお借りして「たなばたまつり」を開催しました。昔は各家庭で「たなばた」のお祝いをしたものですが、こうした伝承行事も衰退しつつある現状を踏まえ、子どもたちに文化を伝えるために、参加者全員で大きな笹飾りをつくり、各家庭へは小さな笹飾りをお土産に持って帰ることができるようにしました。また10月初旬の運動会を山所公園で実施しました。参加者は120人と盛況で、かけっこや球入れ、輪くぐり等、秋空のもと心地よい汗をかきました。

● **的形分団**……７月から８回に亘り、幼稚園・保育所の園庭において、縁日の金魚すくい、水遊び、奉仕団員による人形劇の上演、ミニ運動会、秋祭りごっご、餅つき大会、クリスマス会、保護者と一緒に遊ぶ会などを開催してきました。

● **英賀保分団**……初回は「七夕会」、２回目は「みんなで踊ろう会」、

八幡幼稚園で「たなばたまつり」を開催（八幡分団）

３回目は「焼き芋大会」、４回目は「クリスマス会」を開催しました。特に、２回目の「みんなで踊ろう会」では、英賀保校区婦人会70周年記念歌である「あがほ魂燃え」に「よさこい」の振り付けをつけていただき、保護者も幼稚園児も交えて、何度も練習を繰り返し、運動会で発表しました。

● **野里分団**……ひとり暮らしのお年寄り宅を定期的に訪問する「ふれあい訪問」、月に一度、ひとり暮らしのお年寄りのための給食を作り、食後には踊り・大正琴・カラオケ・民謡などの催しものがあり、大人気を博している「ふれあい給食」、小学校４年生のリサイクルの授業に協力する「牛乳パックから葉書作り」、町の小学生とともにその町の高齢者宅を訪問し長寿をお祝いする「敬老の日」、地域の最高高齢者宅を訪問し、花束を贈呈する「最高高齢者訪問」、の他「三世代ふれあい遊び・映画会」「お餅つき大会」「小学校創立記念公園会」など幅広い活動を実施してきました。

● **飾磨分団**……「ふれあい交流会」と題し、飾磨校区全体の老人クラブの方に案内状をお渡ししました。三遊亭楽団治さんをお招きし、第１部はトーク「元気はつらつすこやか人生」、第２部は落語をお願いしました。

◎ 活動の頻度

● **八幡分団**……年２回　● **的形分団**……年８回　● **英賀保分団**……年４回
● **野里分団**……月３～６回　● **飾磨分団**……年１回

## 活動の費用、財源

● **八幡分団**……七夕さま　59,741円
運動会　43,694円（不足分3,435円は八幡校区婦人会より助成）
● **的形分団**……子育て支援事業活動費　100,000円（不足分1,060円は社協より助成）
● **英賀保分団**……社協英賀保支部基本事業助成金　英賀保連合婦人会助成金
● **野里分団**……日本赤十字社兵庫県支部より20万円の助成金、不足分は野里分団にて拠出
● **飾磨分団**……日本赤十字社兵庫県支部より20万円の助成金、不足分は4,935円は婦人会より助成

## 他団体等との連携

● **八幡分団**……幼児期の子育てについては校区の主任児童委員と協働し、折紙や工作については園長経験者や校長経験者と協働している他、市の広畑児童センターとも協働しています。
● **的形分団**……自治会、社会福祉協議会、老人クラブ、民生委員、各種団体、幼稚園・保育所と協働しています。
● **英賀保分団**……社会福祉協議会、英賀保校区各種団体、小学校校長、幼稚園園長と協働しています。
● **野里分団**……野里校区各種団体（自治会、社会福祉協議会、老人会、小学校等）と協働しています。
● **飾磨分団**……各自治会、老人クラブと協働しています。

## 活動の効果、成果

● **八幡分団**……「七夕さま」については、子どもたちに七夕の由来を説明すると、星へのロマンを感じたようでした。夜、親子で星を眺め、話し合うひとときを想像すると嬉しくなります。大きい七夕と小さい笹飾りを作り、各自小さい七夕を持って帰りました。「運動会」については、音楽に合わせて思う存分身体を動かしました。子どもたちはかけっこを特に好んでいるようでした。奉仕団員も共に動き元気を貰いました。
● **的形分団**……回を重ねるごとに、子どもたちの表情が豊かにな

ふれあい交流会（飾磨分団）

るのを感じました。時折見せてくれる真剣なまなざしと、喜びを素直に表現できるとびっきりの笑顔が印象的でした。目の届く範囲に子どもたちがいる安心感もあり、毎回和やかな雰囲気で、保護者からも喜びと感謝の声が寄せられました。子育て支援を通じ、交流の場を持つことの大切さ、地域で子どもたちを守っていくことの重責を改めて感じました。

● **英賀保分団**……地域全体が子育てに関心を示すことで、若い人たちが地域に愛着を持ち、子育てが終わった年齢層の中でも、地域活動に熱心な人たちが無関心層を受け入れることにより活動の場が広がったように思います。また少しずつですが子育てを地域・社会で支えることの大切さが認識されてきたようです。今後も、一人でも多くの人々に子育て支援に関心を持っていただき楽しく和気藹々と活動していきたと思います。

● **野里分団**……活動時に奉仕団バッジをつけたこともあり、奉仕団員としての自覚が出てきました。参加してくださったお年寄りの方からは「楽しい時間を過ごせました」といつも喜びの声をいただいています。また、赤十字奉仕団としての活動に対する理解も深めることができたと感じています。

● **飾磨分団**……「久しぶりにお腹の底から笑うことができて、若返ったような気がする」等、参加者からは喜びや感謝の声が多く寄せられました。

## 創意工夫している点

● **八幡分団**……幼児期は長時間、人の話を聞くことが難しいものです。しかし聞けるようなこどもに育てていくことも大切です。保護者の膝の上で、時々頭をなでて、褒めることで10分位なら話を聞けるようになってきました。あとは親子で楽しく遊んだり、スキンシップをたくさんとると、とても喜びます。途中に「ごほうびの時間」としてささやかな飲み物とおやつを準備します。その際に「ありがとう」「ごちそうさま」そしてごみの後始末をきちんとできるように指導します。「がんばり競争」といって最初は30秒「気をつけ」ができるように、次回からは40秒～１分程度集中できるよう工夫しています。

幼稚園での「七夕会」の様子（英賀保分団）

● **的形分団**……手作りの活動を基本としています。活動当日に出席できる団員をグループに分け、保護者の方々の意見も聞き、参考にしながら、活動を進めています。

● **英賀保分団**……子どもたちが一番喜ぶことは何かを考えることと、姫路市連合婦人会よりいただいたオレンジ色の子育て支援のジャンパーと帽子を着用して一人でも多くの方に覚えていただくこと、親しみを感じていただき子育てや安全見守り活動につながるように努力しています。また、子育て中のお母さんとの交流行事として各種団体（自治会・老人会・民生委員）と「もちつき大会」などを行い、コミュニケーションをとるようにしています。

● **野里分団**……本分団では婦人会が奉仕団の構成員となっていますが、現在、婦人会離れが進んでいるので楽しい雰囲気の婦人会となるよう努力しています。

● **飾磨分団**……老人クラブを対象としてどんなことをすれば喜んでいただけるかを一番に考えるようにしています。

## 日頃から心がけていること

● **八幡分団**……幼児期にしておきたいしつけとして「はいの返事」「あいさつ」「履物を揃える」を目指しています。また「親子遊び」を通してふれあいや友達作りを目指しています。子育ての先輩として、体験談を話したり、相談や悩みがあれば、気軽に聞いていただけるように父母にも子どもたちにも明るく接しています。子どもたちには特に、愛情を持って接

奉仕団員による人形劇の上演（的形分団）

しています。

● **的形分団**……子どもたちには常に、分け隔てなく接することを心がけています。また、集団活動において必要なルールを幼い頃から教えること、ルールを守ることの大切さを活動を通じて伝えていくことができればと思っています。

● **英賀保分団**……子育て支援活動を行うことで、三世代交流が少しでも広がり、若いお母さんたちとの関わりの中で私たちも一緒に成長していけたら良いと思う気持ちと、姫路市、そして英賀保校区をもっと知ってもらい、どのように考え、どのようなことで悩み、何を求めているか、耳を傾けていきたいと思います。また精神的にあまり難しく考えすぎず、リラックスして活動をするよう心がけています。

● **野里分団**……阪神大震災を初めとする近年の災害を見聞きするにつれ、ひとり暮らしのお年寄りの安否が常に気になります。遠い親戚より隣近所同士の思いやりの心が大切だと考えています。

● **飾磨分団**……校区の中で火事・水害などが起こった際には、赤十字への活動資金がもととなりお見舞い、日用品を配布していることを地域住民に説明するように心がけています。

## 団員同士のコミュニケーションの方法

● **八幡分団**……子育て支援活動はすでに20年近くの伝統があり「楽しめて、勉強にもなる」という口コミが広まり定着を見せています。「他の校区ですが入れていただけますか？」という問い合わせも受けるくらいです。この場合、人数に余裕があれば受け入れることにしています。子育て支援活動が終了してからも、親子でおしゃべりが弾み、皆なかなか帰ろうとしません。このような雰囲気の中で、団員同士のコミュニケーションも自然に図れています。

● **的形分団**……活動を実施する前の事前打ち合わせと、実施後の反省会を行うことで、コミュニケーションを図るとともに、次回の活動にも生かすことができるよう努めています。

● **英賀保分団**……子育て支援活動以外のコミュニティー活動、また婦人会行事後の研修会、反省会、ミーティングを行う際に、できるだけ手作りのお菓子を作るなどして、会話や人の輪をとりながら、和めるような時間を持ち、楽しい雰囲気での活動を心がけています。

● **野里分団**……ふれあい訪問などで常に仲良く楽しく、団員同士が連絡を取り合い、情報交換や交流を図っています。

● **飾磨分団**……月１回の支部長会の際、意見を求め合ったり、話し合いを行ったりすることで、コミュニケーションを図ることを目指しています。

## 現在抱えている悩み、問題点

● **八幡分団**……人口が急増し、元気な子どもの声が聞けるようになりました。幼児も多く、親子で200人近い参加があり、会場がいっぱいです。しかし校区には公民館しか建物がなく、困っています。本分団では婦人会が奉仕団の構成員となっていますが、婦人会員は1,000人以上おり、役員も熱心に子育て支援に関わっています。一番の悩みはやはり、会場の確保が難しい点です。

● **的形分団**……仕事を持っている団員が多いため、準備や活動をする時間が十分に確保できないことが悩みです。また、施設が狭く広いスペースを必要とする活動ができないことも悩みです。駐車場がないために、参加者が制限されてしまうという問題も起きています。

● **英賀保分団**……婦人会が奉仕団の構成員となっています。子育て支援活動に取り組むのが初めてであることもあり、婦人会活動との両立に苦戦した１年間となりました。団員同士のコミュニケーションはもちろん、忙しさの中で健康状態の維持にも苦労しました。まずは団員が健康でなければ、考える意欲や向上心も半減してしまうのではないかと思います。また、他の子育て支援活動団体との情報交換や協働の方法、地域

の子育て世帯への広報の仕方やPRの方法について更に検討したいと考えています。

● **野里分団**……民生委員にひとり暮らしのお年寄り宅の状況を聞くと、個人のプライバシーということで教えていただけないことがあります。一人でも多くの方に参加していただきたいのですが、状況を把握できないことが悩みです。

● **飾磨分団**……社資を集める際に留守宅が多いので、何度も足を運ぶのが大変です。また自治会単位で一括して社資をいただくというケースが多くなり、主旨を理解した上での募金という現状にはないことが悩みです。赤十字の理念・主旨を理解していただくことに困難を感じます。

## 研修会、講習会の実施

● **八幡分団**……兵庫県子育て応援ネット推進協議会の行事やパンフレットによる研修会、資料等による勉強会を行っています。また中播磨の講演会にも参加しています。その他、姫路市教育委員会生涯学習課の「家庭教育」の講演会や行事にも積極的に参加しています。

● **的形分団**……研修会・講習会は特に実施していません。

● **英賀保分団**……社会福祉協議会、支部子育て支援事業研修会、男女共同参画に関する講演会、人権学習会についての講演会を実施しています。

● **野里分団**……年に１度、保健所に協力を依頼し、介護方法や認知症の防止方法の講習会を実施しています。また消防署に協力を依頼し、AEDを使用した救急法の講習会を実施したり、奉仕団員主導による体操会も実施しています。

● **飾磨分団**……研修会・講習会は特に実施していません。

## 今後の展望

● **八幡分団**……幼稚園園長経験者、小学校校長経験者、教師等、素晴らしい指導力や技術を持った人材がたくさんおり、皆さん快く協力していただいています。今後も人材の発掘に努めるとともに、子どもの育て方や文化の継承、悩みごとの相談などの活動を推進していきたいと思います。こうした活動の呼びかけや計画を行う上で、リーダーが必要になることから、リーダーや後継者の養成を目指していきたいと考えています。

● **的形分団**……子どもたちを地域全体で支えるという体制を築くため、他機関との連携を密にし、的形地域での子育て支援事業のネットワーク化を目指しています。そのために、自分たちにできることは何か、また現状で何が不足していて、何が必要となるのかを地域全体で検討していきたいと考えています。

● **英賀保分団**……子育て真っ只中の親と子どもが気軽に集い、仲間づくりを通して、子育ての悩みを話し合える場を提供するため、１人でも多くの参加者を集めることができるように、ポスター掲示や活動内容を記載した媒体の各戸配布、活動スナップ写真の掲示を行う等のＰＲを行っていきたいと考えています。また、各種団体との共催行事を実施することで、より多くの方が少しでも子育て支援事業に興味を持っていただけるようにしたいと考えています。

● **野里分団**……校区の中に活動拠点が誕生することを願ってやみません。また赤十字奉仕団活動に対する理解を得ることができるよう、今後も地域の各種団体と連携しながら、活動していきたいと考えています。なお、近々、落語会を開催することも予定しています。笑いの中で、楽しい雰囲気で新しいものごとを勉強したいと考えています。

● **飾磨分団**……団員が年に１度、家庭看護法講習会を受講することを目指しています。

野里分団の皆さん（お餅つき大会時）

# 子どもたちには遊びの場を、保護者たちには交流の場を提供する地域奉仕団の取り組み

日本社会事業大学
教授　村川　浩一

兵庫県姫路市（人口約54万人）は、秀麗な姫路城でも有名な瀬戸内海に面した兵庫県南西部の地方中核都市です。地元で展開されている姫路市赤十字奉仕団の活動は、年少期の子どもたちに重点を置いた健全育成の取り組みとして、全国の中でも大変活発に取り込まれており特筆すべきものがあります。

第１に、姫路市赤十字奉仕団の活動は、２～３歳前後の幼児を中心に就学前の児童とその保護者に対する支援活動として、子どもたちが「遊び」や集団活動に入っていく、育児経験の少ない母親など保護者たちが和やかにグループに溶け込んでいけるような、子育て支援の場が展開されていることです。近年、地域社会の深刻なテーマとして様々な動機から児童虐待問題があらわれており、その手前のところで育児不安を訴える若い保護者たちも少なくありません。

第２のポイントは、地域共通の「子育て広場」を具体的に実現しており、地域の公民館といった比較的集まりやすいところに、インストラクターの的確なリードによる遊びやリズム運動などプログラムが用意されており、若い世代の母親たちをはじめとする児童の保護者や、地域の人々に安心感を与える活動を行い、多くの参加者を得ることに成功している取り組みであるといえます。

姫路市赤十字奉仕団の活動が評価される第３の点は、地域での少子化が進行する中で、地域の奉仕団組織が委員長（リーダー）を中心に役割分担が図られており、人口の多い姫路市であるにも関らず各分区間の連絡調整がよくとれていました。

また、地区のリーダーとインストラクターの的確さといった、いわば運営管理面と親子指導・支援面のシステム化が図られており、奉仕団の内外におけるコミュニケーションの良好さがうかがわれることです。

また、姫路市赤十字奉仕団は以上の取り組みのほかにも、地域の高齢者支援活動を展開しており、その活躍ぶりは高く評価されるものです。

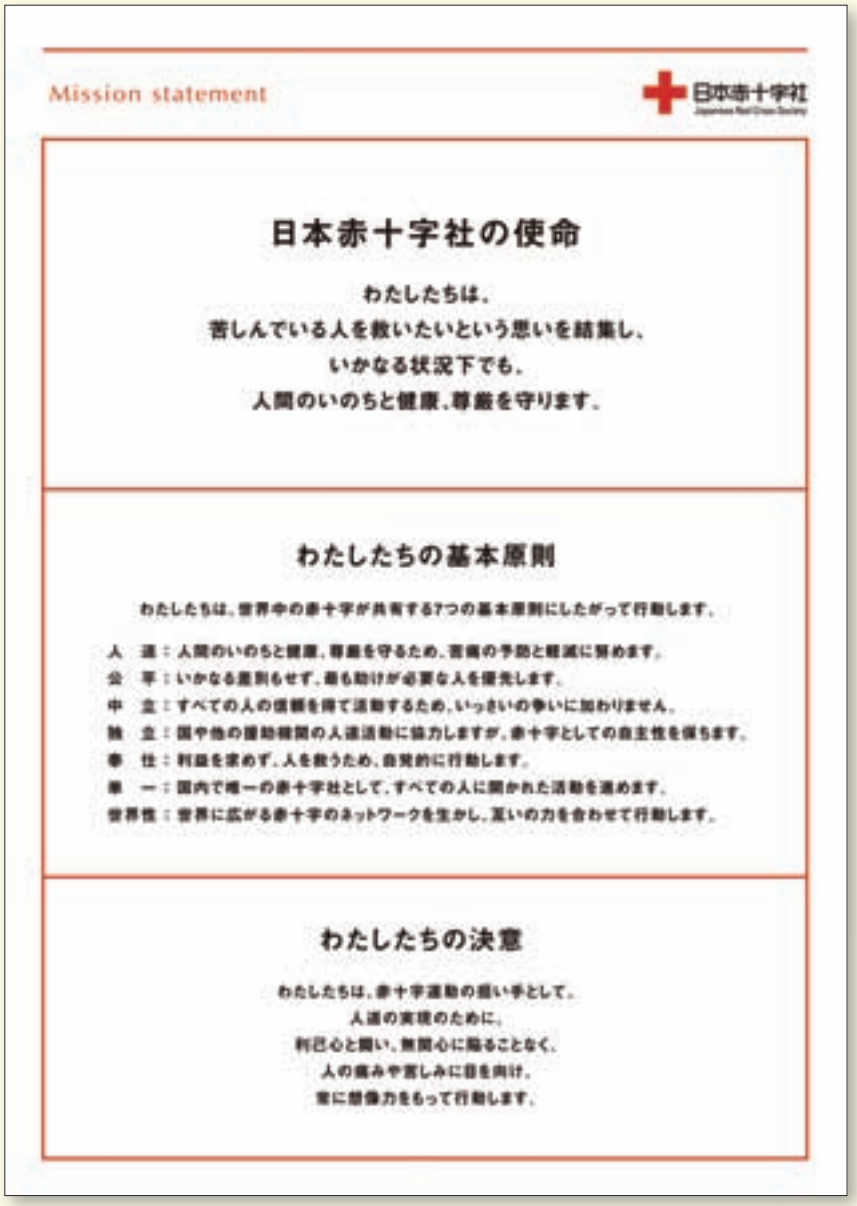
以上の経過からも明らかなとおり、地域の女性の方々を軸に、子どもたちを地域で支援し、健全育成を図る取り組みが生き生きと日常的に展開されているといえます。少子高齢化や核家族化が進行する地域社会の中で、子どもを取りまく様々なリスクを取り除きつつ、健全な発達・成長を促進する望ましい環境づくりの実現を目指した貴重な取り組みとなっています。

こうした活動や取り組みの背景には、日本赤十字社兵庫県支部の支援や助言があったことも付記されるところです。

コラム2

# 日本赤十字社の ミッションステートメント紹介

平成21年
1月、
ミッションが
明文化



Mission statement

日本赤十字社

## 日本赤十字社の使命

わたしたちは、
苦しんでいる人を救いたいという思いを結集し、
いかなる状況下でも、
人間のいのちと健康、尊厳を守ります。

## わたしたちの基本原則

わたしたちは、世界中の赤十字が共有する7つの基本原則にしたがって行動します。

人　道：人間のいのちと健康、尊厳を守るため、苦痛の予防と軽減に努めます。
公　平：いかなる差別もせず、最も助けが必要な人を優先します。
中　立：すべての人の信頼を得て活動するため、いっさいの争いに加わりません。
独　立：国や他の援助機関の人道活動に協力しますが、赤十字としての自主性を保ちます。
奉　仕：利益を求めず、人を救うため、自発的に行動します。
単　一：国内で唯一の赤十字社として、すべての人に開かれた活動を進めます。
世界性：世界に広がる赤十字のネットワークを生かし、互いの力を合わせて行動します。

## わたしたちの決意

わたしたちは、赤十字運動の担い手として、
人道の実現のために、
利己心と偏い、無関心に陥ることなく、
人の痛みや苦しみに目を向け、
常に想像力をもって行動します。

日本赤十字社のミッションステートメントは、３つの要素から構成されます。

**日本赤十字社の使命**

日本赤十字社の使命は、活動にかかわる全ての人（社員、ボランティア、職員等が）共有するものです。赤十字の普遍的な使命である人道的任務の達成を「人間のいのちと健康、尊厳を守ります。」と明解に表現し、あわせて「苦しんでいる人を救いたいという思いを結集し」により、多くの人々の温かい思いを結集して赤十字運動を推進して行くことを強調しました。

**わたしたちの基本原則**

わたしたちが、日本赤十字社の使命を達成するために、世界中の赤十字が共有している７つの基本原則（赤十字の基本理念と行動規範）に従って行動することを明確に宣言しました。1965年にウイーンで開催された第20回赤十字国際会議で宣言され、1986年にジュネーブで開催された第25回赤十字国際会議で一部改定採択された「赤十字の基本原則宣言」をもとに、分かりやすく表現しました。

**わたしたちの決意**

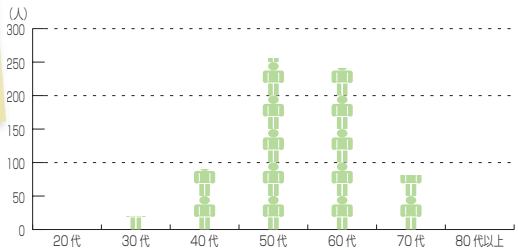
日本赤十字社の使命である「人道の実現」を達成するために、まずは職員から、そして社員やボランティアの方々など、赤十字の活動に携わるわたしたち一人ひとりが心にとめて、具体的に行動していくことを決意として表明しました。

# 徳島県徳島市地区 赤十字奉仕団

**奉仕団**
- 結成年月：昭和24年５月
- 団 員 数：5,274人（女性:5,234人／男性:40人）
- 委 員 長：片山　ユミ子

**川内分団**
- 結成年月：昭和30年３月
- 団 員 数：700人（女性:700人／男性:０人）
- 分 団 長：安芸　美重子

団員数の年代分布（川内分団）




徳島市の地域の概要

- 人　　口：259,920人
- 世　帯　数：110,232世帯
- 面　　積：191.39平方キロメートル
- 高齢者比率：22.1%（65歳以上）（出典：平成20年度版全国市町村要覧）

## 徳島市川内町

### 地域紹介

徳島市川内町は1955年に徳島県板野郡にあった旧川内村が徳島市に編入し誕生しました。徳島県の北東、徳島市の北部に位置し、四国三郎で有名な吉野川と今切川に挟まれています。

町の中心部を国道11号が通っているために周辺には多くの店舗が建ち並び、町内には人形浄瑠璃で有名な阿波十郎兵衛屋敷や市内有数のレジャースポットである小松海岸、四国三郎で有名な吉野川など、多くの観光名所があります。観光の際には、町内にあります四国縦貫自動車道の徳島インターチェンジを利用していただくと非常に便利です。

また、吉野川河口の肥沃な土壌を活かしたさつまいも、レンコン、大根などの野菜や米の生産も盛んで、収穫された野菜は主に京阪神方面へと出荷されています。

夏に多くの人で賑わう小松海岸

県内最大河川の吉野川

阿波十郎兵衛屋敷（徳島の伝統芸能の阿波人形浄瑠璃の実演もあります）

## 奉仕団の主な活動

- 児童の健全育成活動（手話体験・箸袋づくり）
- 〃（登下校時見守り隊＝スクールガード）
- 社員募集（事業所年１回、町内会未加入地区へは戸別訪問）
- 防災活動（非常食講習、救急法）
- 高齢者支援（ひとり暮らしの高齢者宅訪問）
- 赤十字思想普及（赤十字のリーフレット配布）
- その他
  平成７年から環境衛生で資源ゴミ回収、マイ箸運動で緑を守ること、青少年赤十字加盟校の活動支援

## 活動に至るまでの経緯

青少年赤十字のトレーニングセンター（リーダー研修）で「暖かい食事を」と給食奉仕を引き受けたのが平成18年のことでした。県で初めての試みでしたが大好評に終わりました。その時、子どもたちとの交流で自己紹介とサザエさんの歌を手話で表現したところ、子どもたちの目が輝いていたのが印象的でした。

平成19年８月、徳島県支部を通じて徳島市立八万中学校１年生に「手話体験をお願いします」とのお話がありました。

手話を楽しみながら学びたいと手話コーラスクラブを結成して10年になります。人に教えるということは大変難しく、どのように取り組めばよいか不安でしたが、担当の先生から詳しいお話を聞き、団員と話し合ううちに少しずつ自信がもてるようになり、私たちも勉強のつもりで共に学ぼうと手話体験活動を始めました。

さらに、川内分団がエコ活動に「箸づくり」をして割箸を使わない「マイ箸運動」を進めていることがマスコミ報道されたのがきっかけで、徳島市立川内小学校６年生に「箸袋づくり体験をお願いします」との依頼が寄せられ活動を行うことになりました。

## 活動内容

徳島市立八万中学校から総合学習・福祉の時間で手話体験の依頼を受けて、同中学校の１年生251人（７クラス）を対象として、１クラスが約35人のため、奉仕団員４人～５人による手話の交流活動を計画しました。

手話がまったく初めての子どもたちに対し、手話がどんなものであるかを理解してもらうためには「とても２時間では足りない」と懸念されましたが、中学校側からは「まずは体験の一つとして教えてみて下さい」とのお話でしたので、次のとおり指導計画を立てました。

① 手話は障害者だけのコミュニケーションの手技ではなく、健常者にとっても重宝であること。
② 手話で簡単なあいさつや自己紹介ができること。
③ 手話コーラスで１曲マスターすること。

徳島市立川内小学校６年生113人（３クラス）に、総合学習・環境の時間を２時間使ってマイ箸運動を始めたきっかけを伝え箸袋づくり体験を通して環境を考える機会になればと考え、団員３人ずつで同校を訪問しました。小学校ではミシンは使わない直線縫いだけを学習するとのことでしたので、ハンカチ１枚のみで

川内小学校６年生と箸袋づくり交流（右の写真：マイ箸づくりを説明する安芸分団長）

作る方法にしました。

加茂名中学校は昭和46年にＪＲＣ（青少年赤十字）に加盟している実績のある学校ですが、川内分団との手話交流は県内のＪＲＣ加盟校（八万中学校）のＪＲＣ指導教師の紹介で、平成20年８月に実現しました。同９月の文化祭での発表を目指して、同校の１学年約200人が参加し、全員による「翼を広げて」を合唱する計画で、その中の20数人の生徒が手話による歌を披露します。

同８月に行われた第１回の練習では生徒全員の前で、安芸分団長はじめ５人の団員が手話で挨拶をした後、文化祭当日に手話コーラスをする生徒たちが教室に集まり、奉仕団員から約１時間の指導を受けました。最初はぎこちなかった手の動きや顔の表情も次第に和らぎ、時々笑顔をみせるなど手話の練習を満喫していました。同校の先生や担任の先生も生徒と一緒に手話の練習に参加しました。９月の発表会まで３回から４回練習をする予定で、当奉仕団では「手話を通じて、生徒たちに障がいをもつ人の気持ちを少しで理解する第一歩になってほしい」と期待をしています。

手話コーラスの練習風景

## 活動当日までの流れ

〔中学生〕 ● 資料作り（挨拶）、自己紹介、事前特訓（奉仕団による）、テーマ曲決定（指導用）、交流会など

〔小学生〕 ● ハンカチ購入（ヒモ、ボタンも）

## 当日のタイムスケジュール

中学生

- 12：30　公民館集合
- 12：50～13：10　中学校到着
- 13：30～14：20　あいさつ、自己紹介など
- 14：30～15：20　「翼をください」を練習
- 14：30　公民館帰着

小学生

- 9：15　学校到着
- 9：30～9：50　マイ箸運動と環境について（講話）
- 9：50～11：20　箸袋づくり（実技）
- 11：30　活動終了

### 活動の開始時期、頻度

**中学校**　平成19年９月から平成20年１月（毎回火曜日で、８回実施）、最終日に体験発表交流会を実施。
活動日は以下のとおり。
平成19年９月11日、10月２日、16日、11月13日、20日、27日、12月４日、平成20年１月29日

**小学校**　平成19年９月　毎回木曜で、３回実施。
平成19年９月20日、26日、27日

## 活動の費用、財源

約35,000円（支部モデル奉仕団活動費より）

## 他団体等との連携

今回地元の八万分団からも奉仕団員と中学生全員の「体験発表交流会」に参加されました。野口雨情のしゃぼん玉のダンスを踊り、川内分団の団員も手話で表現しました。雨情の作ったこの歌の誕生秘話にも触れ、最近の青少年の行動において命の大切さを再認識してほしいと訴えかけました。

八万中学校との手話交流

川内北小学校は平成18年度にＪＲＣ加盟校に登録されました。同校の総合学習でマイ箸運動を通じ、川内分団との交流が行われました。私たち奉仕団と青少年赤十字との初めての交流でした。男子生徒も普段経験したことない針仕事に熱心に取り組んでおり、世界に一つの自分のマイ箸袋を完成することができました。

## 活動の成果および効果

小学生も中学生も率直で熱心に取り組み、手話クラブ員が奉仕団員として、熱心に手話と向き合い活動しています。

また、子どもの反省にもありましたが、手話を世界のみんなが習えば仲良くなれると思います。

八万中学校での手話交流が評判となり同校ＪＲＣ指導講師から加茂名中学校のＪＲＣ指導講師の先生に伝わり、平成20年８月11日に加茂名中学校と第１回の手話交流を実施しました。加盟校間の連携で川内分団と学校との新たな手話交流の輪が広がりました。

割箸は環境問題のみならず、そもそも「もったいない精神」から生まれた端材の利用ですが、自然破壊や健康被害が報道されている昨今、子どもたちに環境問題を身近に感じてもらえるように、マイ箸袋づくりにより森を守り温暖化のストップにも有効なマイ箸運動を普及していくことを考えています。

### 手話交流会に参加した中学生からの声

- ●赤十字奉仕団の方々の手話は、やっぱり温かみがあってとてもきれいでした。今回、手話合唱団に入って学べたことがたくさんありました。
- ●とても感動したのはしゃぼん玉の曲です。背景を知らない人は楽しそうに歌うけれど、そのような意味があったのかびっくりしました。
- ●お話で聞いたように、手話は耳が聞こえない人だけのものではなく、耳が聞こえる人も一緒になって手話を広めていけたらいいなと思いました。

はし箸の作り方

ストップ温暖化

マイはし箸

使い捨てせずごみ

徳島新聞　平成19年５月23日▶

### 読者からの反響

平成19年９月27日付徳島新報（「読者の手紙」から）

**マイ箸運動、全国発信して**　（藍住町、匿名希望・39歳・主婦）

先日、とあるエコイベントに行った。温暖化やリサイクルについて、楽しくまた興味深く見て回った。その中で思わず足を止めたのが、企業展示に交わり小さなブースに並べられたかわいい手づくりハンカチだった。それは外国の森林を伐採し、安価で輸入され、一度の使用で破棄される大量の割り箸の使用を、自分の箸を持参することにより見直すマイ箸運動というものらしい。私がハンカチと思っていたのは、実は箸包みだったのである。

よく見るとかわいいのもがあり、またモダンな布のそれぞれには箸先を入れる工夫がしてあり、箸を包みクルクルと丸めた最後をとめられるように、端には紐やボタンなどが付いてある。機能的でありながら、おしゃれに携帯することができるようになっているのである。

県外では、マイ箸持参で割引という食堂も出てきたらしいが、残念ながら、県内ではまだまだだそう。祖谷そば・たらいうどん・徳島ラーメンが堂々と並ぶ麺大国徳島から、ぜひとも全国に向け発信し、エコバックに続く、すぐできる活動として広めたいと思った。

割りばしを使わない「マイはし運動」に一役

川内町婦人会

持ち運び用袋を手作り

端切れ持ち寄り500枚

地域住民や園児らに贈る

徳島新聞　平成19年６月26日

## 創意工夫している点

手話も箸袋づくりも興味をもって取り組んでもらいたいと、あまり難しいことは言わず楽しく活動してもらいました。また、愛される奉仕団となれるように青少年の気持ちも考えながら努力しました。

子どもが興味深く向き合ってくれたことが私たちの活動の力となり、充実感が得られたように思います。

## 日頃から心がけていること

川内分団は常に各種団体の行事にも参加し、お互いに協力する体制にあります。町内敬老会、町民文化祭、お茶席、町民大運動会、春秋の交通安全キャンペーン、地域防災行事、火災予防運動、青少年健全育成の講演やスクールガード、各種募金活動など、すべて協働で行われます。

何事も計画の段階からよく会合を持ち意思統一するようにしています。

## 現在の悩み・問題点

団員の高齢化に加え、中高年の女性が仕事を持つようになり、若い団員の入団がなく減少する傾向にあります。

手話交流から一歩進んで実際に手話使っている人との交流へ活動の幅を広げるなど、魅力ある活動を増やすことで団員数も増やしたいと考えていますが、厳しい現況です。今回の活動は少人数ではありましたが、指導力や責任が問われる活動でした。

日ごろから継続して熱心に練習を行うことにより、手話も上達しますので努力は怠らないように努めます。

## 団員同士のコミュニケーション方法

毎月１回、理事会には同分団の23支部から支部長ら約40人が集まり、年間行事計画の細部にわたり検討します。団員には理事会等で決まったことや連絡事項を回覧するなどして情報の共有をしています。

意見の集約をし、会員への連絡徹底に努めています。絶えず集会をもち、よい意見を集めることを基本にします。雑談の中からも意外な意見も出るのでやはり会うことから始め、そのため、各自がアンテナを出していくように心がけています。

## 活動のために行っている研修会、講習会等

- 救急法、炊き出し講習、県支部施設見学、マイカー点検、マナーアップ講習、分別ゴミ講習
- ２年間の水質検査（町内13ヵ所）からの考察、二酸化炭素削減に関する研修
- 身近な人権問題、裁判員制度研修、健康歯8020運動の重要性

## 今後の展望

中学生との交流にあたって手話はほんの入口に過ぎませんでしたが、毎回、参加した生徒からの感想文を読むと、「手話をもっと勉強したい」とか、「障害者の手話について、これまではその動きだけを見て偏見を持ち彼らを差別してしまっていたが、自分が間違っていた」などとの反省の声もあり、生徒たちの貴重な体験学習の場になっています。今後は町の広報誌などにも手話指導の出前を掲載するなどし、生徒たちと手話交流を続けていきたいと考えています。

マイ箸運動も底辺を広げることが先決です。幼稚園児は白いハンカチに両親とお絵かきをしてもらい、それを団員が草木染で染めあげて箸袋に仕上げました。この運動を奉仕団などの各種会合でも広めていきたいと考えています。また、環境破壊が心配される今、青少年に環境問題に関心をもってもらうため、「箸袋づくり」を通じて、国土、地球の緑化に少しでもプラスになることを願っています。

# 地域奉仕団が学校と協働で、障がいのある人達を理解するきっかけづくりに貢献

広島国際学院大学
准教授　田中　里美

徳島市地区赤十字奉仕団川内分団は、平成18－19年に県のモデル奉仕団となったことをきっかけに、小中学校との交流を活発化させています。今回は市内にある加茂中学校を訪ね、中学生26人に手話コーラスを指導する様子を見せて頂きました。９月に行われる文化祭の出し物、１年生全員による「翼を下さい」の合唱に、これらの生徒は手話で参加します。

手話通訳の新居見恵美子さんを擁する川内分団では、地域のさまざまな集まり、施設等で手話コーラスを披露してきました。今では、「手話といえば…」と声がかかるまでになっています。

川内分団は、徳島県内の他の奉仕団と同様、地区の婦人会と重なっており、今回の中学生との交流も、婦人会のネットワークが機縁となっています。加茂中学校の板東喜美代先生が婦人会の集まりで、近所に住むメンバーの斎藤貴子さんがメンバーであるこの手話コーラスを見て、中学生への指導を依頼したのです。

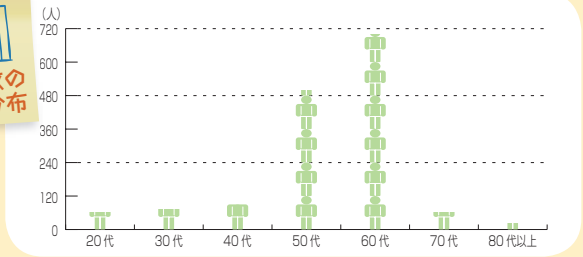
さて、新しい団員を増やすことは、全国の奉仕団の課題となっています。川内分団でも、団員の高齢化が目立つ一方、若い女性は働きに出るようになり、新たな団員の確保が難しくなっています。これに対して安芸美重子分団長は、普段から女性の関心のありかにアンテナを張ること、月１回、分団内各地区の支部長が集まる理事会での話し合いを大切にすることを心がけ、「参加したら楽しい」と思ってもらえるような企画を工夫しておられます。また、仕事を持つ人にも奉仕団の活動をしてもらえるよう、会合は夜に行うようにする他、婦人会が解体した地区では個人の活動として赤十字奉仕団の活動を続けてもらえるようお願いするなど、活動の便を図り、団員を確保するための配慮に努めておられます。

子どもたちが障害のある人達を理解するきっかけとなる、また、耳が聴こえにくくなって閉じこもりがちになる高齢者がコミュニケーションの道具とすることができるなど、手話に多くの可能性を認め、手話コーラスを通じて手話の普及に努めてこられたメンバーですが、一方で、「押しかけてまですることはできない」とおっしゃっています。これに対して今回の取材の席上、徳島県支部から、「青少年赤十字の“出前教室”のプログラムに参加してみてはどうか」との提案がありました。活動の場を県内全域に広げる契機です。婦人会の地域での福祉活動との両立は大変ですが、ますますの活躍が期待されます。

# 長崎県諫早市 赤十字奉仕団

●結成年月：昭和24年４月
●団 員 数：1,500人（女性：1,500人／男性：０人）
●委 員 長：橋本　幸子

団員数の年代分布




諫早市の地域の概要

長崎県諫早市

●人　　口：143,011人
●世　帯　数：54,990世帯
●面　　積：312.24 平方キロメートル
●高齢者比率：21.7%
（65歳以上）（出典：平成20年度版全国市町村要覧）

## 長崎県諫早市

### 地域紹介

諫早市は長崎県のほぼ中央部に位置し、東は有明海、西は大村湾、南は橘湾と三方が海に面し、北は多良岳の秀峰を仰ぎ、４本の国道とJR、島原鉄道が交わる交通の要衝です。地質は大別すると堆積岩類と火山岩類の２つに分けられ、市の中央部を流れる本明川は、市街地を通って有明海に注ぎ、下流の諫早平野は県下最大の穀倉地を形成しています。肥沃な丘陵地帯は野菜やみかんの特産地でもあります。

昭和32年に大水害に見舞われましたが見事に復興し、第24回国民体育大会（秋季）においては主競技場として脚光を浴び、ニュータウンの形成や「諫早中核工業団地」への企業群の進出など、着実に歩みを進めており、平成17年の１市５町（諫早市、西彼杵郡多良見町、北高来郡森山町、同郡飯盛町、同郡高来町及び同郡小長井町）の市町村合併を契機に更なる発展が期待されています。

また諫早市では古くから干拓が進められ、県下最大の穀倉地帯として栄えてきましたが、「諫早中核工業団地」の形成や「九州横断自動車道」の開通により県内の産業拠点として発展しています。

諫早公園　眼鏡橋
（石橋で日本で最初に国の重要文化財に指定）▶

**奉仕団の主な活動**

- 子育て支援
- 高齢者支援
  （おむつたたみ・給食サービス）
- 牛乳パック回収
- 廃食油石けんづくり
- 生ごみのリサイクル

など

## 活動に至るまでの経緯

活動の動機として、子育て中のお母さんたちから、「乳幼児を連れて、学校の授業参観や各種行事に参加できない」「気を遣う、落ち着いて参観できない」との声を耳にして、安心して参加できる環境を提供したいと考え、活動を立ち上げました。活動を始める前に、市教育委員会及び各校区の校長と協議を行い、託児場所や年間の活動機会の調整を行いました。一部の校長から「保育士の資格がない」との理由で反対意見もありましたが、諫早市長に対し「活動時に保育資格者を１人配置してもらえないか」と陳情し、その結果、市長の一言で活動にあたり保母資格は必要ないこととなりました。

試行錯誤しながらのスタートとなりましたが、最初に準備として行った活動は、保護者向け託児ボランティア案内のチラシの配布でした。平成19年度は、県のこども政策局から「長崎っこを育む行動指針」のモデル事業の指定を受け、本格的に市内の校長会に説明した結果、さらに依頼校区数が増え、一層活動が活発になりました。

## 活動内容

授業参観日などに、市内の学校から、主に校内の図書室で畳のスペースがあるところや校区内ふれあい会館などの畳のある部屋を借用して、昼夜を問わず一時保育を行っています。

保育スタッフは、同じ校区内の奉仕団員が担当し、保育料は無料で一日保険（被託児者及び奉仕団員への保険30円／１人）は、奉仕団で負担しています。

ベテランの奉仕団員は、活動に適当な玩具を購入したり、泣き叫ぶ子どもを、だっこしたり、おぶったり、怪我をさせないようにと気を配りながら積極的に活動しています。

子育て応援隊（奉仕団員がベテラン保育スタッフとして活躍）

▲案内用に作成したチラシ

## 活動当日までの流れ

- 各学校の校長又は教頭先生から活動依頼の連絡が校区の地区奉仕団委員長にあります。
- 地区奉仕団委員長は、諫早市赤十字奉仕団委員長へ連絡します。
- 諫早市赤十字奉仕団委員長は、託児の人数を確認のうえ一日保険を申し込みます。
- 地区奉仕団委員長は、参加人員の再確認を行います。

## 当日のタイムスケジュール

①託児人数に合わせ奉仕団員が指定場所へ待機します。
②主に託児時間は１時間程度であるが、長い時は３時間に亘る時もあります。なお、１才児～５才児を託児していると兄弟の小学生児童も託児場所に顔を出して仲良く遊ぶ光景を目にします。

活動の開始時期、頻度
- 平成17年12月から開始、年15回
  １ヵ月に約１回
  （新学期・学年末は集中します。）

子どもたちと笑顔で接する奉仕団員（真津山小学校）

## 活動の費用、財源

- 平成19年度は、県から助成金がありましたが、平成20年度はありませんでした。
  活動費用は概算30万円程度必要と思われます（奉仕団員の交通費、保険等）。
- 平成20年度は支部から３ヵ年の予定で７万円助成がありました。その他、他機関へ助成を申請中です。

## 他団体等との連携

現時点では、他団体と連携した活動は行っていませんが、一例として、若いお母さん方の料理教室の時に、食生活改善グループ（以下「食改」とする）の方々と合同で活動を行いました。その時の役割分担として、食改の方々は、食事の支度を主に担って頂き、託児は奉仕団が担いました。今後更に他団体との協働した活動を行いたいと思います。

## 活動の効果、成果

一度活動に取り組まれた学校では、特に若いお母さん方からの評判がよく、お子さんを安心して預けていただいています。子育て支援活動を子どもを預かるだけで終らせるのではなく、お母さんからの子育て上の相談にも乗り、話し合いもできるよう工夫していきたいと考えています。

奉仕団にとっても、子どもや若い保護者との交流を通して、地域社会に貢献できる社会参加への貴重な活動であると思っています。

子どもたちの動きを温かく見守る団員

● 保護者からの声

「安心して授業参観ができました」

「学校に行くのが何となくおっくうでしたが、これを機会に、学校行事に足を運びたいです」

「（３校合同座布団コンサートで）団員の方が一生懸命見てくださるので心おきなく親子で楽しめました」

● 団員からの声

「久しぶりに小さな子どもたちと過ごすことができて大変楽しく感じました」

「子どもたちが、思いがけないことをしたり、言ったり、また、言葉数の多さにびっくりしました」

「（料理教室で）２歳児の子どもさんは、寝かそうとしてもすぐに目をさまし、最後までだっこし続けていました」

## 創意工夫している点

● 一番の課題は、経費面での財源確保です。その解決策として、地区との連携も視野に入れ、助成金確保に努力しているところです。また、平成19年度は、県からの助成金の中から遊具などを購入し、幼児が使用出来る資材の確保も行っています。その他、幼稚園の先生とも交流を深め、専門的なお話を聞くなどして勉強しています。

● 活動が終わった後にはアンケートをとるなど、利用者の声や団員のからの声を活動の改善に生かしています。

## 日頃から心がけていること

● 大切なお子さんをお預かりするため、安全対策としてキャリアのある団員が絶えず全体の状況を見たり、人員数の確認を必ず行ったりするなどして事故の防止等には細心の注意を払っています。

## 現在抱えている悩み、問題点

- 財源の確保が悩みです。活動をするためには資金が必要ですが、すべて無償では活動に限界が生じてきますので、活動に最低限必要とされる交通費ぐらいは、団員に支給したいと考えています。
- 現在、奉仕団の高齢化と団員数の確保に苦労しています。

## 団員同士のコミュニケーション方法

- 急な要請に備え団員同士の連絡網を通した連絡体制を取っています。
- 毎月20日の定例会は、奉仕団としての活動に対する取組み姿勢を充分説明し、全体の考えが一つにまとまった状態で取り組んでいます。また、各校区の活動状況の報告や問題となった内容について対策を練っています。

## 活動のために行っている研修会、講習会等

- 平成19年10月「児童の健全育成研修会」（長崎県民会議主催）で、活動事例の紹介として、同奉仕団副委員長が「子育て応援隊」を発表
- 平成15年から「長崎っこを育む」ココロねっこ運動に登録し、登録団体として長崎県県民会議主催の研修会に参加
- 赤十字が行なう各種講習会に参加

「子育て応援隊」の活動報告をする西山智子・諫早市赤十字奉仕団副委員長

支部主催の基礎研修会に参加する諫早市赤十字奉仕団の皆さん（前列、左が橋本委員長、左が西山副委員長）

## 今後の展望

「地域における子育て支援活動」を通じて、個々に託児依頼をされる母親等が地域での支え合いに共感することによって、今後の赤十字奉仕団の団員確保に繋がるようその対策を模索しています。

校長会に対しても赤十字奉仕団の活動をPRする共に、同活動を通じて、青少年赤十字の育成強化にもつなげていく予定です。さらに、託児ボランティアを依頼されている若い母親にも託児ボランティアへの参加を呼びかけボランティアの輪を広げていきたいと考えています。

これからも「地域をよくするため、地域が輝いていくために」をモットーに奉仕団活動を展開していくことにしています。

# 自分たちの町は自分たちで支える理念が奉仕団員に浸透

国際医療福祉大学
教授　小林　雅彦

諫早市赤十字奉仕団の活動には、母体である諫早市連合婦人会の60年にわたる活動実績と組織力が活かされています。連合婦人会は、全国的にも例のない事業として会員一人当たり200円ずつを拠出して市内在住の高校生に対する奨学金制度を設けています。また、昭和32年に起きた水害の殉難者の供養塔の清掃や参拝、慰霊祭などを欠かすことなく続けています。これらの事業に象徴されるように、婦人会の会員でもある奉仕団員には、「自分たちのまちを自分達で支える」と言う理念が浸透しています。

その中で、今回当奉仕団の活動として特に注目したのが「子育て応援隊」です。この活動が実現した背景として次の２点があります。第１に、団員自身が、下の子どもが小さかったとき、上の子の学校行事に出るのに苦労や気兼ねをした経験があることです。第２に、そのようなときに下の子を預かる活動をしているという他県の実践報告を研修会で聞いた委員長が、早速そのことを役員会に報告して、すぐに活動に着手したことです。

研修などですばらしい実践を聞くと、そのときは感動し参考にしようと思いながらも、時間の経過とともに忘れてしまうことが少なくありません。ところが、諫早市赤十字奉仕団では早い段階で実行に移されています。その理由として、委員長の取り組みの速さと役員間の意思疎通の良さがありますが、それと共に、前述の第１の点、つまり団員自身が学校行事に参加した時に苦労した経験をしっかり覚えていたことも見逃せません。その実感があり、必要性を具体的に分かるからこそ、教育委員会や校長、そして市長などに対して事業の必要性を理解してもらうための時間もかからなかったのではないかと思います。

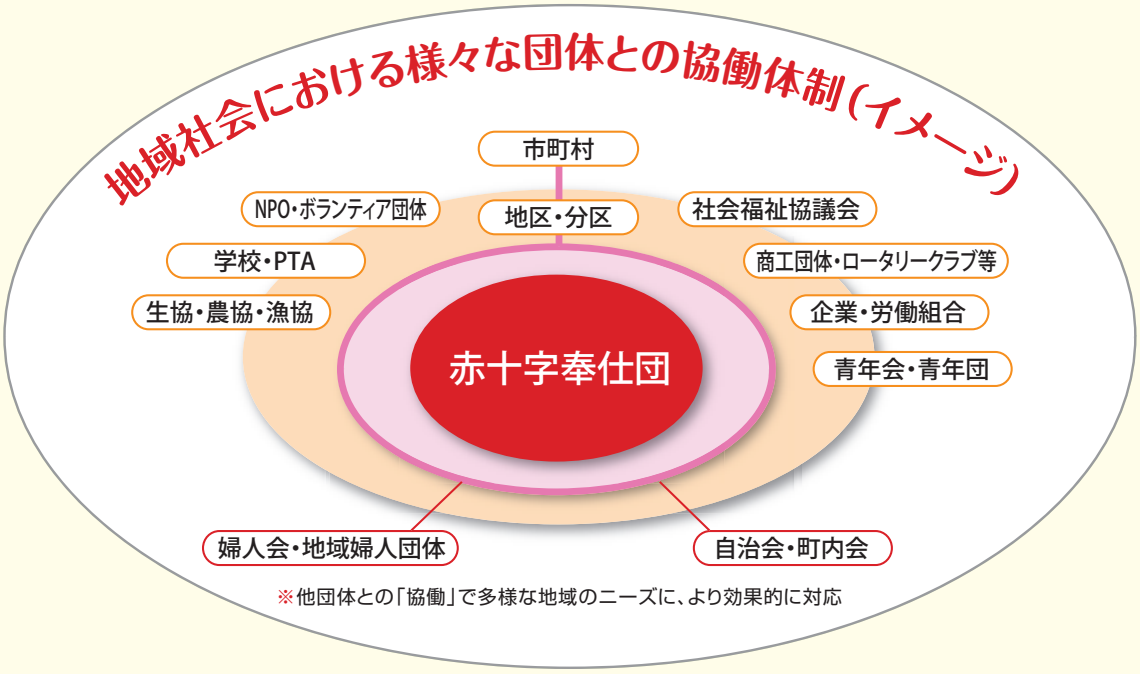
奉仕団活動の中には、例えば、震災時の被災者支援のように、直接自分が当事者になったことがない、あるいは似たような経験もない中で取り組む活動（もちろん、なかには体験者もいますが）と、自分自身が当事者になった経験があり、その活動の必要性やありがたさをリアルに実感できるような活動があります。「子育て応援隊」の活動は、まさに後者の典型でしょう。

この活動が継続していけば、今は子どもを預けている側のお母さんが、いつかは奉仕団員として活動に参加する、そんな地域の中で支え合いの循環が生まれるように思います。子どもを対象とした活動ですので、特に安全面には気をつけながら、さらに活動が活発に展開されるよう期待しています。

コラム3

# 連携から協働へ
# 他団体と積極的につながろう!!

近年、少子高齢化や情報化の進展、都市化による地域の衰退などによる社会環境の変化により、子育て、介護などの福祉、防災、まちづくり、環境などの地域のニーズや課題も複雑かつ多様化しています。この共通の課題に対して、行政、自治会・町内会、NPO、ボランティア団体、企業などが一体となり、それぞれの特性を活かし、相互に協力し合いながら社会に多様なサービスを提供する「協働」によるパートナーシップが求められています。全国に３千以上ある地域奉仕団、特殊奉仕団、青年奉仕団が他団体・他機関と連携し、協働することにより、防災、子育て、高齢者支援などの活動がより充実したものとなり、また、情報を交換し、多様な団体から学ぶことにより新たな価値の発見や活動を見直すことができます。そのことは今後の奉仕団活動の活性化にもつながることでしょう。




## 協働とは

ボランティア団体、NPO、行政、自治会、町内会、企業などが互いの特性や役割の違いを尊重し、目的を共有し相乗効果をあげながら、公共的な課題解決に取り組む活動をいう。

（連携とは、異なる団体がそれぞれの目的達成のために、お互いの人材・資金・情報などの資源を提供し協力する関係をいう。）

## 【「協働」によって期待される効果】

○自らの特性を生かしながら、ミッション（使命）をより具体的に実現できる
○地域ニーズに合った質の高いサービスの提供が可能となる
○新たな価値、活動の場、活動の機会が広がる
○活動の実績や成果により、団体のイメージアップにつながる
○活動の見直しのきっかけを作り、各組織の活性化につながる。
○各団体が協働することで、単独で活動するよりも高い効果を発揮することができる。

※上記の効果は一部にすぎません。もっといろいろな効果が期待できることでしょう。試行錯誤しながらやってみることで素晴らしい効果を挙げることができるかもしれません。

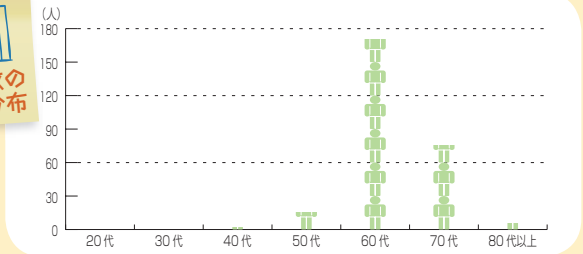
# 災害救護・防災活動

群馬県南牧村赤十字奉仕団
奈良県香芝市赤十字奉仕団
大阪府大東市赤十字奉仕団

# 群馬県南牧村 赤十字奉仕団

●結成年月：平成３年４月
●団 員 数：267人（女性：229人／男性：38人）
●委 員 長：田村　紘子

団員数の年代分布




南牧村の地域の概要

●人　　口：2,852人
●世　帯　数：1,264世帯
●面　　積：118.78 平方キロメートル
●高齢者比率：55.2%
（65歳以上）（出典：平成20年度版全国市町村要覧）

## 群馬県南牧村

### 地域紹介

南牧村は群馬県の南西部に位置しており、まわりは西を長野県佐久市と臼田町、南を多野郡上野村、そして、北と東は下仁田町に囲まれており、東西は16.5km、南北は9.2kmで大変小さな村です。役場の付近で海抜360メートル位なので雪はあまり降りませんが、気温は冬になるとマイナス５～８度位まで下がり、一度雪が降ると日影の道路ではなかなか雪が解けず春先まで残っていて、ヘルパーさんなどは訪問が大変です。高齢化率全国１位の超高齢化の山村としても有名です。

群馬県南西部の小さな村「南牧村」

## 奉仕団の主な活動

- 災害救護、防災活動
  災害時の炊き出し、救急法講習会、炊き出し訓練など講習会の実施
- 赤十字思想の普及活動
  農業祭時に炊き出し実演を行いながら赤十字活動PR
- その他
  各種災害時の義援金の受付等

## 活動に至るまでの経緯

例年の活動としては、炊き出し訓練、救急法講習会、役員視察研修会や災害発生時の募金活動および群馬県支部主催のボランティア研修会への参加が主な活動でした。

炊き出し訓練も「ハイゼックスにお米を入れて」というマニュアルどおりに行っていましたが、今回の台風災害では炊き出しを行う場所そのものは被害を受けなかったので、あえてハイゼックスではなく「おにぎり」に変更したことが良かったと思います。単純に梅干を入れてごま塩をつけてラップに包むだけでしたが、手早く作ることができ、また食べる際も、たとえ手が汚れていてもそのまま食べられるという利点がありました。連日「おにぎり」でしたが、被災された方からは「大変おいしかった」と言われ、本当にうれしい気持ちでいっぱいでした。

しかし、日頃から炊き出し訓練を行っていましたが、実際の災害時には情報が入って来ず、他の地域でも同様に炊き出しをしていたりと大変混乱したことも事実です。

## 活動内容

台風９号が南牧村を直撃したのは、平成19年９月６日から７日の未明にかけてでした。被害状況も良くわからない中、事務局である社会福祉協議会からの連絡で、とりあえず５人が、９月７日午前８時30分に「南牧村活性化センター」に集合し炊き出しを行いました。途中の県道は山からの土砂崩れにより片側通行の場所が何ヵ所もあり、少々危険を感じることもありました。

すでにセンターには役場の職員が数人集まっていて、私たちは職員の指示によりおにぎりを作ることになりましたが、役場でも被害状況を把握できておらず、当日の昼食はたった300人分だけでした。電話も不通状態であったため仕方がない面もありましたが、「こんなに少なくてもよいのか」というもどかしさでいっぱいでした。

最終的には、５日間の活動で参加団員は延べ52人、配食数は3,970人分でしたが、非常時は誰の指示でどのように対応すべきかよくわかりませんでした。

炊き出しの様子

## 炊き出しの状況について

| 期日 | 曜日 | 団員数（人） | おにぎり（食） |
|---|---|---|---|
| ９月７日 | 金 | 5 | 300 |
| ９月８日 | 土 | 役場職員 | 3, 100 |
| ９月９日 | 日 | 10 | 1, 418 |
| ９月10日 | 月 | 11 | 750 |
| ９月11日 | 火 | 13 | 1, 176 |
| ９月12日 | 水 | 13 | 326 |
| 合　計 | | 52 | 7, 070 |

## 台風9号による南牧村被害状況

- 全　　壊　1世帯
- 半　　壊　7世帯
- 家屋以外の損壊　22世帯
- 床上浸水　22世帯
- 床下浸水　67世帯

## 災害当日の流れ

**9月6日（木）**

- 午後11時　台風９号の風雨により水位が最高となる。

**7日（金）**

- 午前４時　役場総務課長（災害対策本部）より、避難所の方々に対して赤十字奉仕団による朝食の炊き出しができないか、事務局（社会福祉協議会）に打診。
- 午前４時20分　川の増水による影響で奉仕団員が炊き出し場所に向かうにはまだ危険な状況であったため、避難所に備え付けの非常食（アルファー米）で対応できないか事務局から総務課長へ連絡。朝食は非常食により対応。
- 午前７時　再び総務課長から、昼食の炊き出しはできるかとの打診が事務局に入る。
- 午前７時10分　事務局が田村委員長に連絡し、対応することに決定。
- 午前８時30分　奉仕団が南牧村活性化センターへ到着し活動を開始。
- 午前10時30分 ～ 午後４時30分　昼食と夕食をそれぞれ２回ずつ計４回に分けて配食。
- 午後５時　反省会
- 午後５時15分　解散

「おにぎり」による炊き出し

## 活動の経験を踏まえ、今後に向けて

南牧村に大損害を与えた台風９号災害の発生後、当奉仕団では平成19年10月11日に緊急役員会議を開催しました。災害とは無縁と思われていた南牧村が道路の決壊等により一時的に「陸の孤島」となり、飲料水にも事欠く中での災害時の赤十字奉仕団としての対応について協議しました。

【協議内容】

●出動時の連絡網の確認

●行政（分区長）からの要望がなければ出動できないことへの問題

要請を区長に任せるのではなく、奉仕団自らが対応できないか。

●奉仕団員の活動拠点の調理機材の不備

災害時に活動の拠点となるセンターの調理器具が、大きさなども含めて災害時の対応を考慮したものになっていないこと。

●避難所の問題

避難所へ避難しようとしても場所が遠すぎて大変危険を伴うので、地域内の比較的安全な一般家庭（たとえば子供110番の家など）に対して一時避難所とさせて頂けるようお願いできないか。

【今後に向けて】

●地域別の炊き出し体制について

村内15地区（集会所単位）の奉仕団の班長をリーダーとして、それぞれの地区で独立した炊き出し訓練を実施しました。これにより遠くの避難所への移動を避けることができ、迅速な炊き出しの体制がとれるようになりました。機材などは家庭用のものも使うことで目下のところ対応しています。

●出動時の連絡方法（連絡網）について

災害時に迅速に対応するため、区長や分区長及び消防団の役員に、赤十字奉仕団員の名簿を渡すことを検討しています。

●炊き出しの出動等について（行政への要請）

◎行政からの要請がないと炊き出し等に出動できませんが、火災発生時の出動は、区長・分区長の指示で行っているので、各区長（南牧村内の15の地区の自治会長）・分区長（15地区内のさらに細かな地域単位の長）の判断でも出動できるようにしていただきたいと考えています。

●その他行政への要望

◎避難所は、大きな区域でなくて地域に設置されている集会所等の小さな単位で設置して頂きたいと思います。

◎今後、行政が災害反省会議（仮称）を行うと思いますが、その際に各種団体の長（奉仕団委員長・食事改善推進員協議会代表者等）を同席させて頂くことで今回の反省を活かした様々な意見を伝えたいと思います。

## 活動の費用、財源

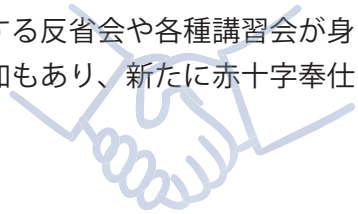
米、塩、サランラップなど　約16万円
財源は、群馬県共同募金会「災害支援制度、活動拠点事務所配分」100万円から支出。

## 活動の効果、成果

災害発生直後の奉仕団による「おにぎり作り」が南牧テレビで放映されると、多数の団員からお手伝いをしたい旨の声がたくさん寄せられました。しかし、大勢の団員が協力して行える施設もなく、最終的にはお断りせざるを得ませんでした。おにぎりに入れる梅干などは、ほとんどが団員の持ち込みで賄えました。

また、テレビや新聞で南牧村の被災状況が報道されたため、団員あてにお米を送ってくれた方もいました。

実際に災害を経験したことで、その後の災害時の活動に関する反省会や各種講習会が身近に感じるようになりました。予想に反する人数の団員の参加もあり、新たに赤十字奉仕団のことを知ってもらう良い機会を得られたと思います。



## 現在抱えている悩み、問題点

高齢化率全国一位の本村における団員確保は大変困難です。今年度も２地区でようやく新役員を見つけて活動の継続が可能となったという事実があります。

さらに村内は、交通の便が悪く自動車を運転することのできない人は、村の中心部に行くだけでも大変苦労しています。

## 研修会・講習会の実施

（１）群馬県支部主催研修への参加
　　赤十字ボランティア研修会　　約５人参加
（２）日本赤十字社南牧村分区研修
　　救急法講習会（含むAED）　　約60人
　　災害時高齢者生活支援講習会　約60人
　　役員視察研修会　　約20人

## 今後の展望

・災害マップの作成（お年寄りの所在等も含めて）
・災害体験者（特にお年寄り）へのアンケートの実施
・団員未加入地区の解消
・村民に対する赤十字活動の周知徹底

# 「災害を経験して、さらにたくましく」南牧村赤十字奉仕団の活動について

帝京平成大学
助教　山口　佳子

南牧村での台風災害発生時に行われた活動においては、訓練段階では分からなかった連絡体制における課題等が明らかになりました。また、活動に参加できなかった奉仕団員からは、「自分たちも力になりたかった、どうして声をかけてくれなかったのか」という声が多く寄せられたそうです。この方たちは必要な時に活動できないもどかしさを感じたのではないでしょうか。

南牧村赤十字奉仕団の優れている点は、この経験の後、すぐに会議を持ち、問題点を明らかにし、連絡体制の整備などの対応策を検討したところです。さらに、行政に連携をはたらきかけ、災害対策本部などとの連携・調整の体制の確立を提言したところです。ボランティア団体は、地域で生じている課題に自ら気づいていき、ネットワークづくりで連携体制をつくり、行政では対応しにくい問題への柔軟な対応を行ったり、市民の側からの政策提言や行政サービスの変更や創設について提案する立場にあります。

災害時のよりよい支援のためには一つの団体による活動だけでは限界があります。したがって災害時には地域内の様々な団体が力を合わせて救援活動に取り組めるような仕組みをつくる必要があります。地域の防災のために分野を超えて対等に意見交換や話し合いを行い、共に考え企画し、責任を分担し、問題解決します。ノウハウや資源をお互い補い合い、相互に情報共有や連携を持つネットワークが必要です。日頃より各団体の交流の場、協議の場を増やし、組織・活動間の信頼関係を築くことが大事です。

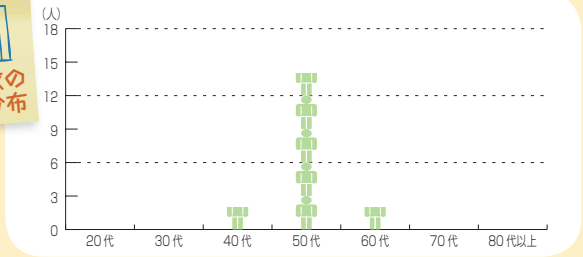
また当奉仕団では災害発生時に一人で避難場所まで行けないひとり暮らしのお年寄りなど、要援護者に関する情報や、村内の人的・物的資源などを把握するために、防災マップを作る予定もあるそうです。災害時の避難支援への取り組みをきっかけに、災害以外の、あらゆるニーズの発見や対応策の検討など活動範囲が拡がって行く可能性があります。住民同士、団体同士が協働して課題に取り組むことで、信頼関係や協力体制がさらに強まることを期待します。

「村の駅」にある農産物の直売所やカフェでは、村の人どうしが明るく声を掛け合っていて、皆が家族のような雰囲気でした。人口規模や高齢化率ではなく、「地域社会のために活動できる人々がどれだけいるか」が重要なのだと実感しました。南牧村に、人と人とのつながりや交流が活発な地域社会を見ることができました。

# 奈良県香芝市 赤十字奉仕団

●結成年月：平成16年４月
●団 員 数：18人（女性：18人／男性：０人）
●委 員 長：奥山　江利子

団員数の年代分布




香芝市の地域の概要

●人　　口：73,329人
●世　帯　数：26,075世帯
●面　　積：24.23 平方キロメートル
●高齢者比率：16.3%
（65歳以上）

## 奈良県香芝市

### 地域紹介

香芝市は、奈良県の北西部にあり、金剛生駒紀泉国定公園を挟んで大阪府に接しています。

道路網では大阪市から三重県津市を結ぶ国道165号、和歌山県新宮市から大阪府枚方市を結ぶ国道168号、及び大阪府松原市から名古屋方面にリンクする西名阪自動車道香芝インターチェンジを有しています。鉄道網ではJR和歌山線、近鉄大阪線及び近鉄南大阪線が市の中心部を縦横に走り、８つの駅を有し、大阪市内へは最短22分という至便なところに位置しています。「香芝（かしば）」。その名の歴史はまだ新しく、命名の由来は、昭和31年の五位堂村、下田村、二上村、志都美村４村合併の少し前、昭和24年に開校した４村及び當麻町加守村（当時）の組合立「香芝中学校」の「香芝」を採用したものです。

この名は、広く一般から公募し、当時の県視学中川良秀氏らによって命名されました。「香芝」は、香芝中学校がある小字「香の池尻」の俗称地名「カマシバ」の転訛の説が有力で、大字の「鹿島」があったことや下田の鹿島神社の鎮座する「鹿島（カシマ）」との間に小字「鹿島前（カシママへ）」があったことや、これが、「カマシマへ」と訛り、音節の転倒によって「カマシバ」……「コウノシバ」「香の芝」となったのだと考えられています。

また奈良という土地柄もあり、数多くの重要文化財に恵まれており、武烈天皇陵、顕宗天皇陵などの古墳も存在しており「石器のふるさと」としてもよく知られています。

香芝市からの二上山の眺望

**奉仕団の主な活動**

- 地域の幼稚園・保育所で「防災紙芝居」を実施
- 災害救護、防災活動

平野自治会での自主防災勉強会で救急法を学ぶ参加者▶

# 防災紙芝居の作成・上演

**活動に至るまでの経緯**

私たちの街では「赤十字奉仕団は何をしている団体なのだろう？」というように受け止められることが多いように思います。実際、自分自身も数年間婦人会長をしていた時、同じように感じていました。奉仕団が婦人会の組織の一部であったため、会員の方々もなおさら理解しにくかったと思います。そこで組織を別にすべく単独の赤十字奉仕団が平成16年に誕生しました。団員は元・婦人会役員の中から10数人に名乗り出ていただき現在に至っています。婦人会とは別の組織となったものの、何から手をつけたらよいのか判らず、団員同士で意見交換をしながら手探りで始めたボランティア活動です。人数は少ないのですが、常に「無理のないボランティア」を合言葉に日々つながりを求めて、地域の方々と一緒に成長していきたいと思います。

◀子どもフェスティバルに参加し非常食実演実習をアピールしました

**活動内容**

奈良県香芝市赤十字奉仕団では、独自の「防災紙芝居」を作成し、地域の幼稚園・保育所で上演することで、地域の子どもたちに防災意識の啓発を行っています。また、夏休みには親子防災ずきん作りを実施し、災害への備えのみならず、年代を超えた、地域の子どもたちやその親との交流に一役買っています。最近では、地域における防災マップの作成にも取り組んでいます。「無理のないボランティア」を合言葉に、今後も行政と協働し地域の安全を守るために日々活動していきます。

今回取り組んだ防災紙芝居の作成と発表については、作成時にある本の幾場面より４パターンの場面をつなげ、「登下校時」「放課後」「自宅で外遊びのとき」を選択しました。作成していく過程で、「音を入れたほうがよりその場の雰囲気が出るのでは」という意見が出たため、色々な音を集めてカセットに入れたり、登場人物がわかるように、「団扇に似顔絵を書いた方がいいのでは」など、色々な角度から沢山の意見が出ま

旭ヶ丘幼稚園にて防災紙芝居を上演しました

したので、小道具係も作りました。全団員が何らかの形で作成に携わることができることを目指しました。いよいよ完成したものの、発表の場を作るにはどうしたらよいのか、こうなったらおばさんパワーを発揮して子どもたちの恩師にお願いしてみたところ、快く避難訓練の一部として組み入れていただきました。園児の前で発表する際に、繰り返しの場面が多いため、話の展開を先に悟られたりしましたが、ナレーターの切り返しで対応は成功しました。

## 活動当日までの流れ

活動会議で音あわせ等について何度か打ち合わせをしました。
幼稚園に活動の主旨と奉仕団について説明し、幼稚園の行事の中のどのような行事に入れてもらえるのか相談したところ、避難訓練の中に組み込んでもらえるようになりました。

## 当日のタイムスケジュール

- 10：00　「幼稚園で地震が起こった」と想定し、先生と一緒に園庭に避難
- 10：10　一段落したため、部屋に戻る
- 10：12　園長先生の話・奉仕団からの話
- 10：15　紙芝居の実演
- 10：35　終了

## 活動の開始時期と頻度

平成19年４月～
※紙芝居作成には６ヵ月間を要しました。
※実際の発表は幼稚園と保育所の２回のみでした。

## 活動の費用、財源

市からの助成金と年に一度の市行事に参加したときの収益金の一部

## 他団体等との連携

２年前より夏休みの子どもたちを対象として防災ずきん作りを開催しました。風の便りでこの活動のことを聞いたという女性の方々が興味を示されたり、私たちの市以外からの問い合わせもあり、年配の方々と子どもたちが楽しく作っていただいたことを奈良県支部の担当

総合福祉センターで非常食の配付をし、赤十字をアピールしました

者に話したところ、「ほかの奉仕団の方々と一緒に作成し、交流を深めてはどうか」という助言があり、数回実施してみました。自団で苦労している点など色々な話を聞くことができ、非常によい交流の場となりました。これを機にお互い災害に遭遇した場合、助け合えるのではないかと感じました。

## 活動の効果、成果

市内で行われている自主防災活動の中に赤十字奉仕団も参加できるのではないかと思い、平成19年から、自治会に活動内容を説明し、一つのテーマに一緒に取り組める場をいただきました。奈良県に住む人の中には災害が発生しにくい地域であると常に安心しきっている方もいるため、防災活動も他所事のように感じられているのが現状ですが、少しずつ防災意識を浸透させるために、人々の関心も高く必要性の大きいAEDを使用した救急法講習をメインに、災害時の非常用品や足湯、簡易トイレの作り方を奈良県支部担当者の指導で自治会に拡げている最中です。

## 創意工夫している点

防災紙芝居については、子どもたちの気持ちをどこで盛り上げ、またどこで抑え、上演中集中させることができるか、20分ほどの発表の中に起承転結を組み込むのが難しいです。団員の多くが子育てを経験していますので子どもの心を掴む努力には慣れていますが、地域によって子どもたちの感情は多少違っており、それをすぐに察知できるよう発表の場を増やすことができれば、より効果的に実施していけると思っています。できるだけたくさんの子どもたちに触れ合えるよう発表の場を増やし、その都度、団員の反省会も行っています。

### 「防災紙芝居」

## 日頃から心がけていること

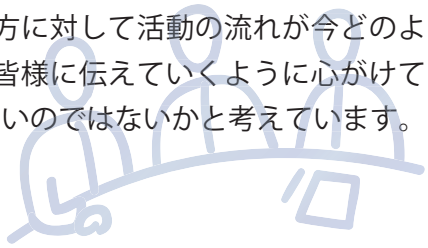
団員数が少ないため、行事を学校区ごとに行ったり、班分けをして対応していますが、活動を皆で作り上げるためには団員の増員が常に課題になってきます。市の広報誌に団員募集記事等を掲載していただいているのですが、なかなか思うようにいきません。「人々の興味を惹く活動とは何か」について他の団とも意見交換をしていますが、結局は団員の知人・友人に声かけし、ひとり、またひとりというくらいの増え方です。今は団員数10数人で活発に行事をこなすことができていますが、これからの活動が活性化するかどうかは、団員の拡大ができるか否かにかかっていると思います。

## 悩み問題点

前述のとおり、団員募集をどのように進めていくかということが香芝市赤十字奉仕団の課題です。今は少ない人数でどうにか活動をこなしていますが、今回の防災紙芝居や、次年度に取り組む予定の防災マップの作成については、各校区に団員が点在していれば詳細部まで調査もスムーズにできるのではないかと思います。現状における情報収集の仕方では時間も要するのみならず、内容的にも改善の余地があります。行政や民生委員の方々とつながり、うまく協働できるかどうかは、これからの私たちの努力次第であると考えています。

## 団員同士のコミュニケーションの方法

前婦人会の役員を中心に団員が構成されているため、意思の疎通は十分できていると思っていますが、活動会議に出席できなかった方に対して活動の流れが今どのようになっているか、活動内容を毎回文書で送付し、皆様に伝えていくように心がけています。これにより少し活動を休止された方でもすぐに活動を再開しやすいのではないかと考えています。



## 研修会・講習会の実施

- 夏休み防災ずきんづくり（子どもとお年寄り）
- 防災センターへの協力
- AEDを使用した救急法講習会（団員・広報誌で一般募集）
- セラピューティック・ケア（団員）

## 今後の展望について

平成20年度より防災マップの作成に取り組んでいます。各自治会・地域で災害が起こった際に、「どこにひとり暮らしの方がおられるのか」「この道が塞がった場合にはどうするか」など、様々な事態を想定し、安全な場所へ避難できるよう行政と共に考えながら作り上げることができればと考えております。いつもつながりを求め目標達成できるよう、今後の活動は市全域に浸透するよう、団員が協力し「無理のないボランティア」を合言葉に日々努力していきたいと思います。

# 「防災紙芝居」づくりを通じて、次世代の防災意識向上・健全育成に取り組む

日本社会事業大学
教授　村川　浩一

香芝市は、奈良県北部に位置する住宅都市です。地元で展開されている奉仕団活動は、年少期から学齢期の子どもたちの健全育成・防災意識の向上に向けた取り組みとして、全国の中でも活発に取り組まれており特筆されるべきものです。

第１に、香芝市赤十字奉仕団の活動は、子どもたちとその保護者に対する支援活動として、「防災紙芝居」を作成し、イベント等を通じて、子どもたちが地域の課題である「防災」について理解を深める良い機会を提供しており、同時に保護者たちが和やかに交流の輪に参加できるような、子育て支援の場が展開されていることです。

特に注目すべきは、地域の奉仕団活動の中で、地域の自主防災のために、「防災紙芝居」という貴重な教材、ツールが確立されたことです。紙芝居というツールは子どもたちにとって大変分かりやすいため、子どもたちが強い関心をもって、この分野に参加できるものです。そしてそのことが地域の自主防災活動への動機付けとなっています。

香芝市赤十字奉仕団の活動が評価される点は、防災をテーマにするとき、子どもたちに対して恐怖心をあおるような仕方は不適切であることから、分かりやすく、前向きな関心を引き出すように取り組まれていることです。

少子化と呼ばれる社会状況の中で、次世代育成支援がわが国の社会において重要なテーマになっており、地域防災、とりわけ一人ひとりの日常的な危機管理活動が重要であると位置づけて、子どもたちが積極的にこの課題に関心を持てる環境づくりに取り組んでいることは、若い世代の保護者をはじめ、地域の人々に安心感を与える地域活動として、高く評価されるものです。

また、全国どこの地域でも、防災活動をしっかりと次世代に引き継いでいくことは、欠くことのできない大切なテーマとなっています。

こうした活動や取り組みの背景には、日本赤十字社奈良県支部の支援や助言があったことも付記されるとともに、今後の香芝市赤十字奉仕団のより一層の活動に期待しています。

# 大阪府大東市 赤十字奉仕団

●結成年月：平成14年２月
●団 員 数：53,403人（女性：26,878人、男性：26,525人）
●委 員 長：川端　直行

団員数の年代分布

年代別団員数については不明

大東市の地域の概要

●人　　口：125,687人
●世　帯　数：52,291世帯
●面　　積：18.27 平方キロメートル
●高齢者比率：18.5%
（65歳以上）

## 大阪府大東市

### 地域紹介

大阪の東部、河内地方のほぼ中央に位置する大東市には、約13万人の市民が暮らしています。東は金剛生駒紀泉国定公園を境に奈良県に、西は大阪市に、北は門真・寝屋川・四条畷市に、南は東大阪市に、それぞれ接しています。飯盛山の西麓にある野崎観音は、地元では「観音さま」と呼ばれ親しまれています。毎年５月１日～10日に行われる「野崎まいり」は江戸時代の元禄期から続く由緒あるイベントです。昭和８年ごろには東海林太郎が歌う「野崎小唄」が大ヒットしました。「野崎まいりは　屋形舟でまいろ……」で始まるメロディーと歌詞は、初夏の河内ののどかな光景と香り高い歴史を感じさせ、野崎まいりへ人々を誘います。また戦国時代には飯盛山を拠点に五畿内を制した戦国武将三好長慶の居城である飯盛城にて、武士73人が洗礼を受けたことから河内キリシタンが始まりました。飯盛城の出城である三箇城は「湖に浮かぶキリシタンの城」として遠くヨーロッパにまでその名を馳せましたが、飯盛城の洗礼からわずか20年後には戦乱の世の常で三箇城は落城し、河内キリシタンは歴史の表舞台から消えていきます。また、10月の第３日曜日を中心に、市内各所で盛大に開かれる「だんじり祭り」は、５月の野崎まいりと並ぶ大東市のすばらしい伝統行事です。

野崎観音本堂

### 奉仕団の主な活動

- 高齢者の支援活動
- ひとり暮らしのお年寄りの見守り活動
- 地域防災マップの作成

昔の野崎まいりの様子

## 活動に至るまでの経緯

大東市赤十字奉仕団では、市内の小学校ごとに「福祉委員会」が立ち上げられたことを契機として、さらには奉仕団の人道・博愛の精神と福祉委員会とはその目的が同じであることから、委員長・分団長・副分団長を中心に活動を行ってきました。「住道南福祉委員会」は平成18年２月に高齢者が安心して住める街づくりを目指して７地区（大野、末広、扇町、新町、栄和町、川中、川中新町）を一つの組織として結成されました。

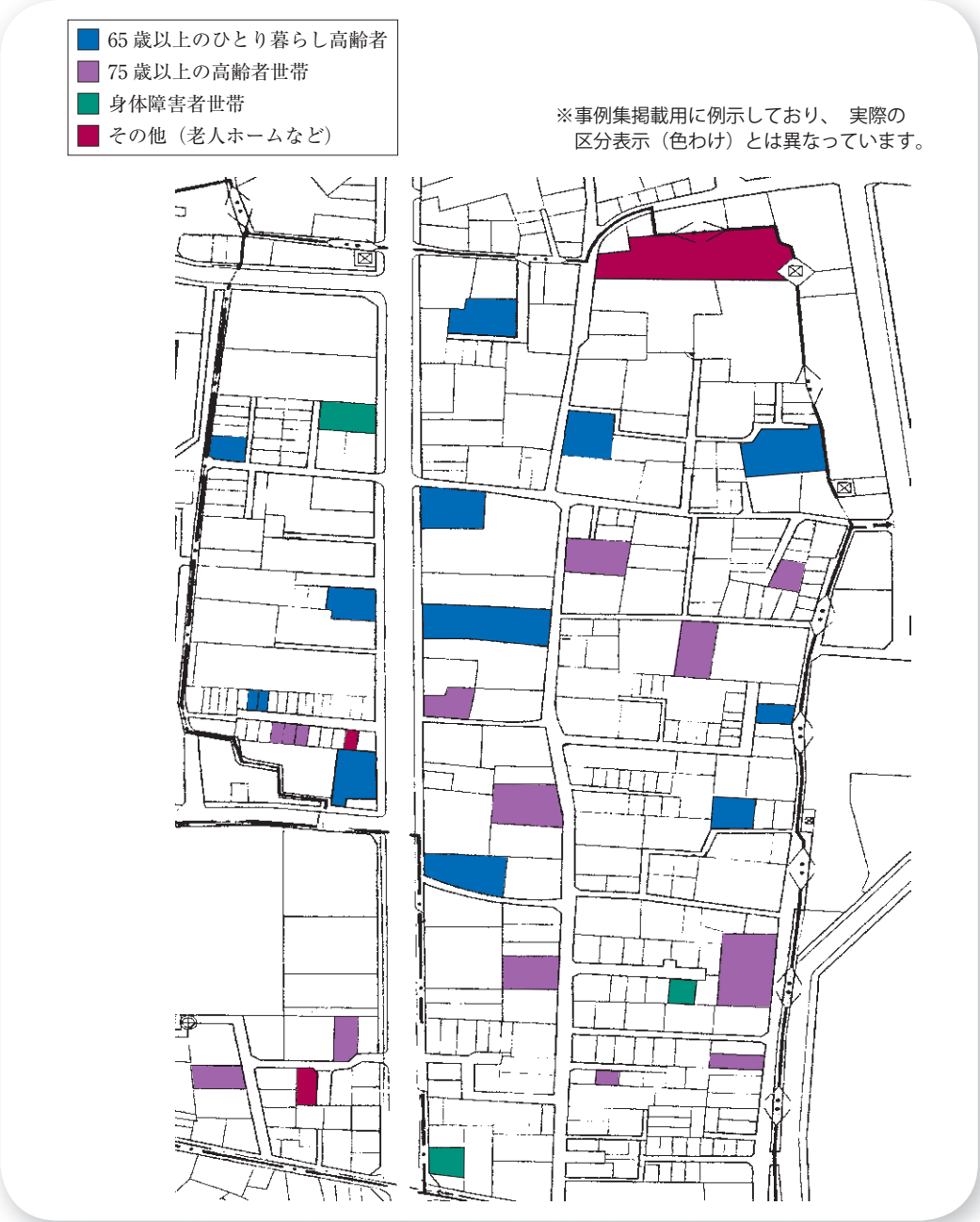
当初は、ひとり暮らしのお年寄りを対象とした見守り活動でしたが、高齢社会の加速化と社会情勢の変化に伴い組織のあり方を検討しなければと考えました。上町台断層地震について報道されると、高齢者や障害者団体との交流会で災害への不安を吐露されたことを受け「奉仕団としてどう対応するか」を使命に掲げ、「福祉委員会」と連携しながら本市の関係部署と協議し「自分たちの地域は自分たちで守る組織づくり」を行うための防災マップを作成し、自主防災組織と協力していくこととなりました。

お年寄りを対象とした「ふれあいサロン」における芸能奉仕団による催し物の様子

## 活動内容

大東市赤十字奉仕団の住道南地区では、災害に備え防災マップ作成のための資料を収集するために、①65歳以上のひとり暮らし高齢者
②75歳以上で、かつご夫婦で暮らしている家庭
③身体に障害がある方
④老人ホームなどの福祉施設
に関する情報収集を地区担当委員に依頼し、防災マップの作成に取り組みました。情報収集にあたっては、個人情報保護法に触れないよう自治会・老人会・行政などと協働しながら名簿を作成しました。

ふれあいサロンで健口体操中の皆さん




市の福祉委員会と協力して作成した地域防災マップ

## 活動当日までの流れ

- 高齢者・身体障害の方の名簿作成　2月～5月
- 防災マップ作成　扇町地区　6月
- 防災マップ作成　新町地区　7月
- 防災マップ作成　大野地区　8月
- 防災マップ作成　末広地区　9月
- 防災マップ作成　川中新町地区　10月
- 扇町の地区防災マップに基づいて自主防災組織と災害時の救助体制などについて協議　6月



## 活動の開始、実施時期

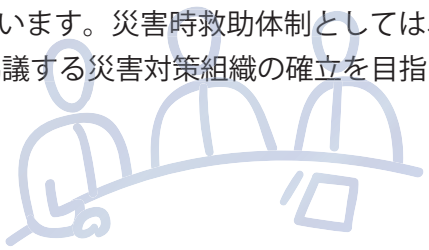
平成20年２月～平成20年12月

## 活動の費用、財源

防災マップ作成にかかる諸経費　150,000 円
（内訳　防災マップ資料の製本、防災啓発活動にかかる啓発費用（機関紙発行など））

## 他団体等との連携

活動する 7 地区には約 4,500 人の住民が暮らしています。ひとり暮らしのお年寄りなどの住まいを記載した防災マップを完成させることにより、地区内の各組織と役割分担を図りつつ、災害時救助体制の確立に向け協議を行っています。災害時救助体制としては、全地域住民の救助、避難場所への誘導、避難場所での様々な問題点を協議する災害対策組織の確立を目指しています。



## 活動の効果、成果

ひとり暮らしのお年寄りを中心に「ひとりの被災者も見逃さない」ことを目標に掲げ、防災マップを作成しようとの意識が団員の間で高まるとともに、民生委員・自治会・老人会と協働し「災害時に支援を要する対象者」の把握活動が積極的に行われるようになりました。また団員からは「住民との信頼関係の構築が大切だ」との声が上がり、特殊赤十字奉仕団である芸能赤十字奉仕団の協力を得ながら、地域ごとに「ふれあい交流会」や「会議」を開催するとともに、災害対策も兼ねて道路や建物の安全点検を実施しています。

## 創意工夫している点

個人情報保護法の施行により、情報収集が難しい状況となっていますので、住民との間に信頼関係を築く努力を行っています。「地域住民一人ひとりとの信頼関係を深めて命と暮らしを守る」をテーマに、社会福祉協議会、福祉委員会や老人会等と協働し、見守り・声かけ活動・ふれあい交流会の開催・機関紙の発行等を行い、信頼関係の構築と住民間の相互扶助の必要性について、啓発活動を実施するなど、住民に対し積極的に情報提供を行うことに努めております。

初期消火活動訓練（バケツリレー）▶

## 日頃から心がけていること

日頃から地域住民と本音で対話を行うことにより、防災マップを始めとする各種奉仕団活動を推進することができると考えています。そのような視点に立ち、ひとり暮らしのお年寄りを対象とする「声かけ・見守り活動」を実施する際は、悩み事や困り事を伺うとともに必要に応じて社会福祉協議会などの相談機関と連携し、個人をきめ細やかに支える支援体制を心がけています。また災害時に起こり得る問題（誘導、介護、食事など）の想定や危険な箇所の把握にも努めています。

児童の健全育成にも力を入れています

## 悩み問題点

今回の防災マップ作成にあたって、支援の必要なお年寄りや身体に障害のある方など対象者を把握しようとする行為が「個人情報保護法」との関わりもあり、また調査拒否をされる方もあって情報収集に大変苦労しましたが、奉仕団員の皆さんのご尽力により結果的には満足できる資料を集めることができました。こうして集めた情報を基に防災マップを作成していくことになりますが、今後は個人情報の適切な管理と情報更新の方法について検討していかなければならないと考えています。

また、福祉委員会や地元自治会との連携や調整をしていくなかで、関係者に対しても情報の漏洩防止と守秘義務の徹底を図ることに全力を尽くしたいと考えています。

## 団員同士のコミュニケーションの方法

団員がひとりで問題を抱え込むことや孤立することがないように、会議を開催して意見の交換や悩みの解消を努めるとともに、有志による親睦会を開催し、気軽に話せる雰囲気づくりを心がけています。

## 研修会・講習会の実施

- 大阪府社会福祉協議会が開催する研修会への参加（個別支援活動・グループ援助活動）
- 個人情報保護法について

## 今後の展望について

市内には小学校区単位で 15 の福祉委員会があります。今回は住道南地区が福祉委員会や自主防災組織との連携により防災マップを作成し、お年寄りをはじめ一般の方々も含む、安心なまちづくり体制の確立を目指しています。

今後も福祉委員会に働きかけ、福祉委員会委員長連絡協議会で奉仕団活動の内容を説明するとともに、大東市全域にも活動を拡げていけるよう関係部署とも協議し、防災マップの整備と自主防災組織体制の普及に全力を尽くしたいと考えています。

# 防災マップを作り、自主防災活動を推進する大東市赤十字奉仕団の活動

日本社会事業大学
教授　村川　浩一

大阪府大東市赤十字奉仕団では、地域におけるひとり暮らしのお年寄り、障害を持つ人々などが一目で分るよう、ご本人の了解を得て「地域防災マップ」づくりを実施し、市役所・消防署等関係機関、ならびに地元自治会・町内会と協働し、粘り強く、親切丁寧に自主防災活動を推進することにより、地域の安心を確保する取り組みを続けており、全国的に見ても高く評価されるものです。

この「地域ぐるみの自主防災活動」の活動が評価される第１の点は、阪神・淡路大震災の教訓を踏まえ、地域社会の中で日ごろから防災を心がける取り組みとして災害に対し、最も不安感を募らせているひとり暮らしのお年寄り、障害を持つ人々に着目し、個人情報保護法に十分配慮しつつ、精度の高い「防災マップ」を作成し、いざという時に出動できる体制を整えていることです。

評価される第２の点は、府営住宅や民間のマンションなど集合住宅が多く立地する環境のもとで、地区のリーダーの方々を中心に地区訪問活動・防災マップづくりの必要性を粘り強く訴えかけ、またプライバシーの保護に十分留意して懇切丁寧に推進することによって、地域からの信頼感を得ていることです。（「防災マップ」の保管にあたっては、悪質業者に付け入られることなく、しっかりとした管理・運用体制が確保されていました。）

そして第３には、地元自治会・町内会との連携はもとより、市役所・消防署等関係機関との連絡調整を図っていることであり、どちらかといえば住民が孤立しがちな都市生活の中で、しっかりとした防災ネットワークづくりを着々と推進していることです。ひとり暮らしであったり、身体的に虚弱なお年寄り、障害を持つ人々と地域の中でふれあいながら支え合う活動として、日常的に取り組まれており、市内の他の地区への普及はもとより、近畿圏をはじめ各地で大いに参考となる取り組みとなっていることです。

阪神・淡路大震災の経験から地域の住民参加型の地域防災や日常的防災への取り組みへの関心が高まっていますが、大東市赤十字奉仕団の方々による熱心な取り組みは、地域住民一人ひとりに対し、防災意識を高め、安心感を与えるとともに、「防災マップ」を通じ、人々が具体的に防災活動にかかわることのできる方法を確立しており、住民相互の安心・信頼度を高めている大変すばらしい取り組みに、拍手をおくりたいです。

今後も大東市赤十字奉仕団のより一層の活動の発展に期待しています。

コラム4

# よりよい赤十字奉仕団活動のための5つのポイント

平成20年６月13日
赤十字奉仕団中央委員会

## より良い赤十字奉仕団活動のための５つのポイント

1．地域ニーズを探り、多くの人を巻き込んだ魅力ある活動を企画すること

2．災害時に備えた救急法の普及と、災害時要援護者のための活動に備えること

3．他の奉仕団や青少年赤十字、地域との連携・協働を促進すること

4．広報誌の作成や情報の開示も含め、より広く赤十字や赤十字奉仕団活動を広報すること

5．団員一人ひとりのやりがいが生まれるリーダーシップと、赤十字奉仕団としての意識を高めるための研修を充実すること

上記は、平成20年６月に全国の都道府県ごとの赤十字奉仕団の代表者が集まって開催される「赤十字奉仕団中央委員会」において、協議の上取りまとめられました。５つのポイントをまとめるに当たっては、「赤十字奉仕団活動事例集」に掲載された優良事例の内容も参考にされています。

4. モデル事例

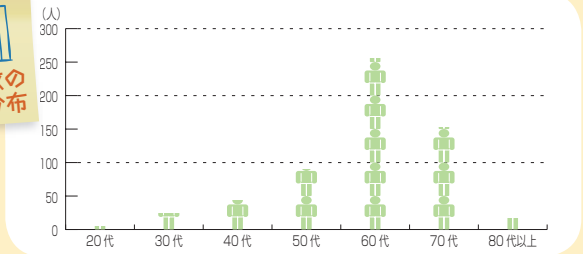
# 赤十字思想の普及・ＰＲ活動、社員増強に対する支援対策

福岡県北九州市門司区赤十字奉仕団

# 福岡県北九州市門司区 赤十字奉仕団

●結成年月：昭和23年10月10日
●団 員 数：585人（女性：356人／男性：229人）
●委 員 長：竹内　幸子

団員数の年代分布




北九州市の地域の概要

●人　　口：982,836人
●世　帯　数：448,856世帯
●面　　積：487.71平方キロメートル
●高齢者比率：23.2%
（65歳以上）（出典：平成20年度版全国市町村要覧）

## 北九州市門司区

### 地域紹介

北九州市門司区は関門海峡を隔てわずか680mで下関市と向かい合い、三方を海に囲まれた風光明媚なところです。また、平家滅亡の哀史などを偲ばせる歴史的な地でもあります。早鞆（はやともの）瀬戸と呼ばれる関門海峡は、潮流の速さが最高時速18kmに達し、鳴門海峡・木島海峡と並ぶ日本三大急潮流の一つです。関門海峡の優美な潮騒と外航船の汽笛は、環境省の「残したい“日本の音風景100選”」にも選ばれています。

国の重要文化財に指定されている門司港駅

門司港は明治22年に特別輸出港に指定され、世界各国に定期航路を持つ国際貿易港として発展してきました。

近年では、西日本有数の規模を誇る太刀浦コンテナターミナルに加え、国内最大級の長距離フェリー基地である新門司に、「新門司自動車流通センター」が整備され、さらに港湾機能が拡充されました。また、ＪＲ貨物の全九州の物流拠点として「北九州貨物ターミナル駅」も開業し、本州と九州の鉄道網の結節点であるという立地条件を活かし陸路と併せ、日本有数の物流拠点となっています。

「門司港レトロ地区」は、「旧門司三井倶楽部」や「旧大阪商船」、「旧門司税関」、「国際友好記念図書館」などの歴史的建造物をはじめ、日本最大の「歩行者専用はね橋」「門司港ホテル」「門司港レトロ観光物産館」海峡プラザ」「門司港レトロ展望室」「海峡ドラマシップ」「九州鉄道記念館」が建ち並び、大正ロマン漂う街並みは、毎年多くの観光客が訪れ、いまや全国レベルの観光地へと成長しました。

門司区では、このような観光振興や物流機能の整備とともに、「門司みなと祭」や「レトロフェスタ」など市民が主体となったイベントも盛んに行われており、市民と行政が力を合わせた「賑わいのあるまちづくり」、人と人とが交流し、支え合いながら心豊かに暮らせる「安全・心のまちづくり」が進められています。

**奉仕団の主な活動**

- 社資募集（新規会員の開拓・既存社員の継続確保）
- 街頭献血及び地域献血の実施
- 家庭看護法など各種講習会の実施
- ＮＨＫ海外たすけあい募金

**活動に至るまでの経緯**

現委員長が平成18年に奉仕団委員長へ就任した頃は、一般社員からの社資実績が落ち込んだ時期でした。高齢化による人口減や住民の地域離れも大きな要因であったかもしれません。

また、各世帯を訪問していて耳にする声は「何に使われているの？」「また募金ですか？」「日赤は知っているけど身近な地域で何をやっているのだろう？」といった声があったのも事実でした。一般住民だけでなく社資募集で協力を仰いでいる町内会長からもそういった声が聞こえてくることに大きな危機感を覚えました。そこで、広報の重要性に目を向けました。

**活動内容**

５月８日のボランティアデーでは、各校区奉仕団により門司港駅周辺のボランティア清掃を実施しました。当日は、まちの美化はもちろんのことですが幟旗を設置し、団員は揃いのエプロンを着用して活動することで観光客など行き交う人々に赤十字奉仕団活動をアピールすることができました。５月下旬に北九州市最大の観光スポットである門司港レトロ地区で開催される「門司みなと祭」は、日本三大みなと祭のひとつに数えられ、例年40万人を超える観光客で賑わいます。当奉仕団では、このイベント最終日に開催される祝賀パレードに各校区の団員がナースに扮して参加しています。沿道の観光客や地元住民からは歓声を浴びながら地域における赤十字奉仕団組織や事業のＰＲにつとめています。

当奉仕団の平成20年度事業計画の重点施策は次の３つです。①社資募集の増強、②献血事業の拡充、③施設ボランティアの調査・研究

▲▼門司みなと祭で、奉仕団員がナースに扮してパレード

**社資募集**

**〔ケーブルテレビを活用した協力依頼〕**

北九州市近郊で放映されている区政番組「ぐっと！門司ing」で、赤十字運動月間である５月に社資募集への協力を呼びかけています。

**〔各地域での協力依頼〕**

校区の奉仕団委員長が地域の町内会長会議へ出席し、社資募集への協力依頼をしています。各校区での社資募集方法は、奉仕団員が直接集金したり、町内会にお願いするなど地域での実情に合わせて効率的な方法がとられています。社資募集には町内会の協力は欠かせないため、前年度の赤十字奉仕団活動報告と併せて日本赤十字社の事業への理解と協力を訴えています。

門司港レトロ地区の清掃活動で、挨拶する市の担当職員

▲▼門司港レトロ地区を清掃活動する奉仕団員の皆さん

## 活動当日までの流れ

〔3月上旬〕
- 門司区奉仕団役員会義
  （新年度事業計画審議）

〔4月上旬〕
- 校区奉仕団委員長会議
  （新年度事業計画審議）

〔5月上旬〕
- 役員打ち合わせ
  （ボランティアデーの反省会とみなと祭パレード用資材製作）

〔5月25日〕
- みなと祭当日

## 当日のタイムスケジュール

- 10：00　役員集合（自治会仮装の手伝い）
- 12：15　奉仕団参加者集合（受付・資材配布）
- 13：00～13：30　みなと祭パレード開始

＊実施結果について事務局と事後協議

ボランティアデー終了後の反省会

## 活動の費用、財源

財　源　日本赤十字社門司区地区事業費交付金（奉仕団費）
経　費　パレード衣装道具材料費・クリーニング代等（約20,000円）

## 他団体等との連携

〔門司区赤十字奉仕団〕
- 門司みなと祭パレード内容の検討
- 資材手配、製作

〔日本赤十字社門司区地区〕
- イベント主催者との連絡調整
- 参加者のとりまとめ
- 経費の支出

## 活動の成果および効果

● 「テレビ報道などで日本赤十字社の存在は知っていたが、身近な地域での赤十字奉仕団の姿を見ることができて良かった。自分と同じような一個人がボランティアとして参加している姿を見て、自分もできることは協力したいと思った。」（沿道で観覧した地域住民の声）

● 「（ボランティアデーで）門司港駅周辺を清掃活動する姿を見た。きれいな観光地に保ってくれてありがたいことだと思った。」（観光客の声）

● 「沿道の知人から多くの声援をもらった。今後の活動の励みになると思う。」（参加した団員の声）

● 「小さな子供や観光客からの歓声を受け晴れがましく感じた。今後もみんなでアイデアを出し合ってボランティアデーや献血、PR活動を工夫していきたい。」（参加した団員の声）

ボランティアデー参加者アンケート集計

## 創意工夫している点

● 華やかに集い楽しむ

日頃は、地域で戸別訪問などを通じて社資募集のお願いをするなど赤十字の活動を陰で支える働きをしている奉仕団員にとって、「門司みなと祭パレード」は年に１度の晴れ舞台です。団員は日頃の苦労を忘れて楽しい一日を過ごしています。

● 参加意識の高揚

パレードの扮装や資材の検討など準備段階から役員を中心として団員同士が様々な意見を述べ合いながら進めることで、団員の参加意識が高まっていくのを感じます。

● 献血事業のPR

日本赤十字社門司区地区の今年度事業計画において、重点施策のひとつとして献血事業の充実があげられています。奉仕団としても街頭献血や地域献血の実施に協力していることから、みなと祭パレードでは従来の啓発物に加えて、献血事業に関する啓発やポスターパネルを手に沿道の観客に協力をアピールしました。

## 日頃から心がけていること

年度末において各校区の委員長会議で報告する活動実績は、社資募集実績のみならず奉仕団が関わった事業全般にわたってその実績と成果について、データや写真を添えて報告するように心がけています。

こうした活動報告は、紺綬会や献血推進協議会においても広く日本赤十字社門司区地区の活動とあわせて協力団体の活動のひとつとして報告するようにしています。こうすることで、団員にとっては一年間携わってきた事業を客観的に見直す機会とな

商店街で献血をPRする奉仕団員

ります。その他の協力団体に対しては奉仕団の活動成果をPRする場となり、その後の地域での社資募集への協力を得やすい雰囲気づくりに役立っています。

また、事業が終わるごとにその様子を地域の活動拠点となる公民館や市民センターに資料を配布しています。それらの資料は、参加者に届けられたり、施設に掲示されたりすることで赤十字事業への参加意識の高揚に繋がっています。

## 現在の悩み・問題点

各分団の代表者のうち数人が毎年交代するため、その都度、赤十字活動の内容について研修を受け直す必要があります。また、社資募集の方法についても研究する必要があります。

門司区地区の場合、各分団は小学校区であり、21校区によって活動の仕方や募集方法が異なっています。各分団で独自の活動をするのが難しい分団もあり、社資募集活動にとどまっているところもあります。

町内会長会議に出向いて、社資募集の協力を呼びかける竹内委員長

## 団員同士のコミュニケーション方法

以前は、赤十字奉仕団と婦人会が表裏一体の団体でしたが、現在は独立した団体として役員構成なども異なっています。しかしながら、公民館や市民センター等同じ場所を活動拠点としていることもあり、日頃から各団体の事業実施にあたってお互いに協力し合っています。

これまでも、会合の際の声かけや電話での相談など緊密な関係を保ってきましたが、一緒に行うボランティア活動の機会を増やしたり、昼食会などを行ったりすることもコミュニケーションをはかるのに有効であると思っています。

## 活動のために行っている研修会、講習会等

①家庭看護法講習会　　平成19年５月30日　参加人数37人

藤松校区赤十字奉仕団が参加し、日常生活の介護法実習や災害発生時の高齢者支援講習会を実施しました。

②幼児安全法講習会　　平成19年６月29日　参加人数21人

藤松校区赤十字奉仕団が参加し、子供の事故に備えての救急措置や病気の看病の知識・技術の習得を行いました。

③病院ボランティア視察研修　平成19年11月13日　参加人数36人

山口赤十字病院の病院ボランティアの活動を視察し、ボランティアの方々と意見交換を行いました。

## 今後の展望

社資募集活動にとどまらず、広く市民の目に触れるような活動にも取り組んでいくことで団員一人ひとりのやりがいを創出していきたいと考えています。

また、社資協力者・地域コミュニティ団体に対して社資の募集実績の報告のみならず具体的な活動実績を報告することが重要です。お預かりした社資がどのように役立てられているかお知らせできるような広報資材の製作なども検討したいと考えています。

# 地域の変化に対応し社資募集を展開

広島国際学院大学
准教授　田中　里美

町内会など地域のつながりの中で、半ば「自然に」集められていた社資も、集合住宅が増え、自治会の加入率が下がり、また、地区全体の人口が減少していく中で、だんだん集めにくくなっている…、というのは全国の赤十字奉仕団の皆さんの実感なのではないでしょうか。

門司区赤十字奉仕団はこうした地域の変化を踏まえ、社資募集のためには「集められた社資がどのように利用されているのか」、「そもそも赤十字の活動とはどのようなものか」、また「赤十字奉仕団の存在そのもの」を発信していくことがあらためて必要であると考えました。

各地区から集まった団員が看護婦の扮装で参加した「みなと祭」パレードは、その広報活動の一環です。多くの観光客で賑わう門司レトロ地区では清掃ボランティアもされています。また、赤十字の活動を伝える全国版の通信に、赤十字の救援物資が地元の被災者に手渡された件数や献血の実施報告といった地域の独自情報を掲載し、これを持って企業訪問を実施し、企業会員の定期的な掘り起こしをされています。

社資募集を中心として、地域の新たな環境に合わせて奉仕団の活動のレールを敷きなおすという作業のキーパーソンは、門司区赤十字奉仕団が事務局を置いている公民館に常駐される北九州市の職員さんです。奉仕団の委員長、役員さんたちとの間には、同じ場所に集い、同じ目的を持つもの同士の円滑なコミュニケーション・協力関係があります。そして変化を遂げる地域の状況に直面しつつも地域のために力を出そうという志を持った地元自治会メンバーが、献血をはじめとする赤十字の活動をバックアップしています。

パレードは、対外的にだけでなく、奉仕団の活動にかかわるメンバーにとっても、活動を見直し、活動に取り組む動機づけを高める良い効果があったとのことです。昨年は山口県の山口赤十字病院の院内ボランティア活動の視察に出向かれるなど、赤十字奉仕団の活動について情報収集に努めておられます。地域の変化に向き合い、地域に今ある資源を生かして着実に活動してこられた門司区赤十字奉仕団の皆さんが、広報活動を活性化の起爆剤としつつ、今後、地域においてどのような福祉ニーズを掘り起こし、これに向けて新たな活動を展開されるのか、さらなる飛躍が期待されます。

コラム5

# 地域赤十字奉仕団 都道府県別団数・団員数

（平成20年3月31日現在）

| | 地域赤十字奉仕団 | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 団数（団） | 団員数（人） | | |
| | | 男 | 女 | 計 |
| 北海道 | 184 | 938 | 24,715 | 25,653 |
| 青森県 | 53 | 2,708 | 13,338 | 16,046 |
| 岩手県 | 35 | 252 | 1,394 | 1,646 |
| 宮城県 | 129 | 7,054 | 6,185 | 13,239 |
| 秋田県 | 54 | 2,176 | 22,576 | 24,752 |
| 山形県 | 44 | 883 | 7,563 | 8,446 |
| 福島県 | 109 | 721 | 11,312 | 12,033 |
| 茨城県 | 45 | 1,013 | 11,524 | 12,537 |
| 栃木県 | 28 | 11 | 7,279 | 7,290 |
| 群馬県 | 46 | 592 | 12,213 | 12,805 |
| 埼玉県 | 57 | 369 | 7,954 | 8,323 |
| 千葉県 | 61 | 896 | 17,029 | 17,925 |
| 東京都 | 39 | 5,726 | 19,418 | 25,144 |
| 神奈川県 | 50 | 13,982 | 7,273 | 21,255 |
| 新潟県 | 37 | 1,447 | 3,848 | 5,295 |
| 富山県 | 55 | 193 | 3,495 | 3,688 |
| 石川県 | 48 | 1,426 | 3,716 | 5,142 |
| 福井県 | 17 | 998 | 13,018 | 14,016 |
| 山梨県 | 28 | 616 | 12,656 | 13,272 |
| 長野県 | 81 | 20,675 | 50,114 | 70,789 |
| 岐阜県 | 66 | 405 | 10,989 | 11,394 |
| 静岡県 | 48 | 3,576 | 29,084 | 32,660 |
| 愛知県 | 74 | 6,738 | 17,412 | 24,150 |
| 三重県 | 14 | 181 | 7,259 | 7,440 |

| | 地域赤十字奉仕団 | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 団数（団） | 団員数（人） | | |
| | | 男 | 女 | 計 |
| 滋賀県 | 56 | 157 | 20,906 | 21,063 |
| 京都府 | 14 | 3,208 | 1,879 | 5,087 |
| 大阪府 | 72 | 625,904 | 564,166 | 1,190,070 |
| 兵庫県 | 46 | 2,679 | 110,374 | 113,053 |
| 奈良県 | 35 | 471 | 8,335 | 8,806 |
| 和歌山県 | 68 | 1,366 | 11,981 | 13,347 |
| 鳥取県 | 38 | 171 | 2,066 | 2,237 |
| 島根県 | 19 | 0 | 13,919 | 13,919 |
| 岡山県 | 44 | 1,694 | 48,120 | 49,814 |
| 広島県 | 19 | 247 | 17,937 | 18,184 |
| 山口県 | 49 | 988 | 31,947 | 32,935 |
| 徳島県 | 23 | 80 | 32,807 | 32,887 |
| 香川県 | 17 | 362 | 22,378 | 22,740 |
| 愛媛県 | 59 | 408 | 17,236 | 17,644 |
| 高知県 | 34 | 1,503 | 11,265 | 12,768 |
| 福岡県 | 34 | 2,417 | 26,667 | 29,084 |
| 佐賀県 | 72 | 0 | 24,372 | 24,372 |
| 長崎県 | 38 | 0 | 13,760 | 13,760 |
| 熊本県 | 37 | 29 | 29,883 | 29,912 |
| 大分県 | 18 | 378 | 9,158 | 9,536 |
| 宮崎県 | 36 | 205 | 3,138 | 3,343 |
| 鹿児島県 | 74 | 367 | 28,754 | 29,121 |
| 沖縄県 | 23 | 26 | 940 | 966 |
| 合計 | 2,327 | 716,236 | 1,373,352 | 2,089,588 |

# 赤十字思想の普及・ＰＲ活動、社員増強に対する支援対策

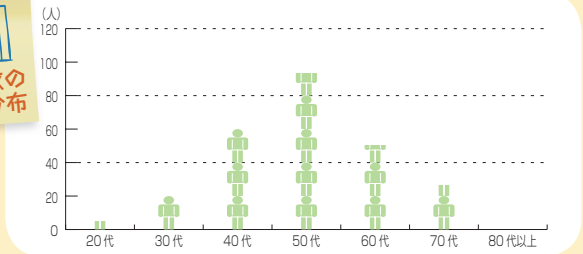
兵庫県新温泉町赤十字奉仕団

※モデル事例の指定ではないものの、選考委員の評価が高かったことから、モデル事例に準じて掲載。

# 兵庫県新温泉町 赤十字奉仕団

●結成年月：昭和50年４月
●団 員 数：254人（女性：254人／男性：０人）
●委 員 長：西村　公子

団員数の年代分布




新温泉町の地域の概要

兵庫県新温泉町

●人　　口：17,499人
●世　帯　数：5,793世帯
●面　　積：241.00平方キロメートル
●高齢者比率：30.3%
（65歳以上）

## 兵庫県新温泉町

### 地域紹介

新温泉町は鳥取県に接する兵庫県の北西部に位置している地域です。「海、山、温泉、人が輝く夢と温もりの郷」として自然の豊かな魅力ある町となっています。

昭和56年のNHKドラマ「夢千代日記」の放送により温泉地域の湯村温泉の名は全国的に知られるようになりましたが、一方では少子高齢化が進み、昭和55年に過疎振興地域に指定されています。なお、旧温泉町（温泉地域）は旧浜坂町と平成17年10月１日に町村合併し、新温泉町となっています。

▲旧温泉町　荒場

旧温泉町　夢千代の像▶

## 奉仕団の主な活動

- 社員（社費）増強のための戸別訪問活動
- 各種講習会の実施による災害救護・防災活動
- ひとり暮らしのお年寄りへの配食サービスをする高齢者支援活動
- 『おんせん子育て応援隊』を結成しての児童の健全育成活動
- 寸劇を通じての福祉、防犯啓発、赤十字思想の普及・ＰＲ活動
- 資源回収活動（牛乳パックやトレーの回収）
- 廃油回収、廃油キャンドルづくり

## 活動に至るまでの経緯

昭和50年４月に発足した当時は、団員数も1,200人程を数え、委員長を中心に「ガンバロウ！」と声を掛け合いながら、奉仕団員が活動内容を共有して一生懸命活動に取り組んでいました。

また、赤十字活動の活動資金になる社員増強のための戸別訪問活動を実施し、声かけをしながら多くの町民の皆様にご理解をいただき、賛同を得てご協力いただいていました。

しかし現在は、当時と比べると奉仕団員数も減少し、地域の婦人会や消費者の会と同じ構成メンバーの中で、一人の人がかけもちして地域の様々な活動を担っているということも多くなってきています。

そのような状況にありながらも、赤十字活動の大切さ、活動のPRを常に心がけて、赤十字奉仕団のワッペンやエプロンを着用し様々な活動に取り組んでいます。

## 活動内容

### 社員（社費）増強のための戸別訪問活動

５月の赤十字運動月間に奉仕団員が直接地域住民宅へ訪問し、「赤十字の活動について」「社資がどのような活動に使われているか」「活動資金へのご協力のお願いについて」等を説明しています。また、広報誌の配布を通じて赤十字奉仕団の活動内容もPRしています。

### 災害救護・防災の活動…各種講習会の実施

救急法、家庭看護法の講習会を毎年実施し、奉仕団員はもちろんのこと、お年寄りの皆様との交流も図っています。参加した団員からは「活動は楽しい」「参加してよかった」と感動の声をいただいています。

AEDを使用した救急法研修

視察研修の模様

### 高齢者支援活動

「高齢化は自分たちもやがて通る道」との思いがきっかけとなり、ひとり暮らしのお年寄りへの配食サービスの活動に取り組んでいます。１回につき６人～８人づつの団員で順番に活動しています。奉仕団は食事

の調理や盛り付け・配布を担当しています。

### 『おんせん子育て応援隊』を結成しての児童の健全育成活動

奉仕団員が登下校時に通学路に立ち、子どもたちに「おかえりなさい」「お疲れさま」などの声かけを行い、通学時の見守りの活動を行っています。青少年が被害者となるような様々な事件が起こる現代の世相を踏まえ、少子化の中で「地域の子どもは地域で守る」という思いをきっかけにはじめた活動です。１回の活動につき奉仕団員13人ほどが参加しています。

### 寸劇を通じての福祉、防犯啓発、赤十字思想の普及・PR活動

５年ほど前からふれあいバザー、福祉ボランティア、献血協力、敬老会等、様々な地域のイベントの場で「オレオレ詐欺に対する予防策」や「悪徳商法にだまされないために」、「環境にやさしいゴミの分別回収」などをテーマにした「寸劇」や「紙芝居」を実施しています。この活動は、近年多発している振込み詐欺、オレオレ詐欺、悪質商法トラブルなどに対してお年寄りがどのように対応すればよいのか理解していただきたい、という気持ちが原点になっています。

▲寸劇「悪質商法にだまされないために」（文化祭にて）

▲ふれあいバザーの模様

◀寸劇「環境にやさしいゴミの分別回収」（敬老会にて）

### 地域のケーブルテレビによる放映、新聞への掲載

この寸劇については地域のケーブルテレビによる放映や新聞紙上に掲載していただいたため、赤十字奉仕団の活動を地域にPRすることができました。

ケーブルテレビによる防犯意識の啓発▶

## 活動当日までの流れ

奉仕団委員長、事務局と事前打合せ
会場の確保、講師の依頼、奉仕団員への協力依頼、来賓への案内

## 当日のタイムスケジュール

- 奉仕団員集合、役員事前打合せ、役割分担による会場準備
  ↓
- 受付開始（来賓・講師のご案内）
  ↓
- 開会
  ↓
- 講習もしくは講演会
  ↓
- 質疑応答、謝辞
  ↓
- 閉会
  ↓
- 後片付け・奉仕団員による反省会、解散



活動の頻度
年間30回程度、さまざまな活動を行っています。

## 活動の費用、財源

活動にかかる費用の負担は、基本的に団員の会費（団費）や持ち寄り、無償の負担でまかなわれています。また、研修等の講師についてもできる限り、町内の方にお願いするなどし、経費の発生を少なくしています。

## 創意工夫している点

現代は、個人の考え方が多様化している時代ですので、奉仕団員の価値観も様々です。そういった中で、赤十字奉仕団の活動内容をいかに理解していただき、次の活動につないでくのか、そして役立てていくのかを考えて活動しています。

救急法や家庭看護法の講習を受講し、その内容を広く奉仕団員へ伝達していくよう心がけています。このことによって、まだ受講していない団員に対して、次の講習会参加への意欲を高めていただいています。

## 他団体等との連携

当奉仕団は、婦人会、消費者の会、いずみ会（食生活の改善について提言をしている団体）、民生委員、老人会等の団体と協働し、「命を守る」との共通の観点から活動に取り組んでいます。

様々な団体と連携を図ることで、共に同じ研修会や訓練等を共有できる場面が数多くあり、意見交換も活発にでき、人間関係もより良い方向に進んでいます。組織の継続のためには、連携による団員同士の一体化が不可欠です。

また、自治会や社会福祉協議会、行政から活動場所として公共施設を借りるなどして、奉仕団の活動を理解していただき、ご協力をいただいています。

総会の模様

## 日頃から心がけていること

奉仕団の必要性を認識し、活動には積極的に参加することが大切であると考えています。そのためには「参加して良かった」「参加したい」と思えるような魅力的な活動を企画することが必要です。

また、奉仕団員同士のレクリエーションを通して交流し、親睦を深めて誰でも気楽に活動に参加できる雰囲気を作ることが大切です。

相手の立場に立って考えること、相手の話を十分に聴くこと、会議における協議は十分に行うこと、まごころや親切、おもいやりのこころを忘れず、奉仕団員同士が一致団結して多くの方々との出会いを大切にしていくことなどを普段の活動時から心がけることで、交流が深まり、楽しく和やかな活動が広まっていくと考えています。そして安心して暮らせる地域づくりを目指します。

資源回収の活動

廃油キャンドルづくり

## 現在抱えている悩み、問題点

女性のみで構成されている当奉仕団員の中にも、女性の社会進出が目覚しい時代の流れを受けてか、奉仕団の活動をするよりも仕事や自分のやりたいことに集中するために奉仕団から離れていく人もいます。また、団員数が減少する中、活動は多いため、参加している団員の一人ひとりにかかる負担が大きくなっているという側面もあります。

団員減少が続いている奉仕団活動を活性化させるためには、魅力的で楽しいボランティア活動ができるように工夫することが必要と考えています。

現在、当奉仕団の中には年齢制限を55歳か60歳までとしている分団もあります。上限は各分団ごとに異なりますが、年齢制限をすることによって、お役目から離れていただき、次の生きがい、すなわち趣味などの時間に充てていただくための制限のようです。

## 団員同士のコミュニケーション方法

視察研修やフォークダンスの会、グランドゴルフ大会、会食会、体力づくり講習会等のイベントを行って団員相互の理解と親睦を深めながら、和やかな奉仕団運営を行うようにしています。

## 今後の展望について

若い団員の加入が少なく、奉仕団員の高齢化と団員数の減少が続いていますが、命の大切さや赤十字の活動や赤十字奉仕団の必要性を多くの人々に呼びかけ、一人でも多くの若い奉仕団員の加入を促進したいと思います。

そして自助・共助が大切といわれていますが、共に支え助け合い、お互いを尊重して赤十字活動の啓発・普及に努めて行きたいと考えています。

# 地域のニーズに応え、多彩な活動を展開“定年制”を導入しつつ

広島国際学院大学
准教授　田中　里美

新温泉町赤十字奉仕団は、町内会および婦人会を母体とし、地域の諸団体と連携を取りながら、児童の健全育成、高齢者の支援、障害者との交流、地域振興等、数多くの活動に取り組んでおられます。

この赤十字奉仕団においても、団員の減少は悩みの種です。地域の女性達には、婦人会および奉仕団の活動は、「地域の人間が地域のためにする仕事」と受け止められているようで、「自分の趣味など楽しいことにもっと時間を割きたいから」という発想でやめていく方がおられるとのことです。そして、一人の脱退が他の人の脱退を呼び、脱退が集落単位に及ぶことさえあるそうです。また、若い世代には働く女性が増え、勤め先が他の地区だったりすると、なかなか地元での活動をしてもらうのは難しいとのことです。今ではこうした状況を勘案して、55歳～60歳（小地区ごとに違う）を上限とする「定年制度」があるとのことでした。

委員長は、近年、団員の減少と反比例して地域の行事が増大してきていると感じておられます。「いったん入ったらいつまでも活動を続けなければならない」という発想が新規の加入を躊躇させ、「やめそこなったら一人あたりの仕事は増えるし、そうでなくても活動内容は増える一方…」という発想が脱退者を増やしているとすれば、「定年」を設けるのも一つの工夫であるように思われます。

他の奉仕団と同様、ここでも、奉仕団の運営にあたって、提案が押しつけにならないように、参加した団員本人が楽しめるように、また、お勤めの方も出席できるよう会議は夜に…という配慮がなされています。一方で委員長は、「最も重要なことは活動すること。活動しなくなれば組織は崩壊してしまう」と強い意志をお示しでした。福祉に関する深い理解を持って奉仕団の活動に精力的に取り組んでおられる委員長のご様子に感銘を受けました。

さて、今回の取材では、お芝居（寸劇）の話しになったとたん、取材に応じて下さった方々の表情が一瞬緩み、あふれ出るような笑顔になられたことが印象的でした。お芝居には他のどんな活動とも違う独特の魅力があるようです。まだ試みておられない奉仕団の皆さん、チャレンジしてみてはいかがでしょうか。

# 高齢者支援活動

# 秋田県北秋田市鷹巣赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和26年５月
- 団 員 数：1,091人（女性：1,090人／男性：１人）
  20代：　０人　30代：　５人　40代：26人　50代：181人
  60代：363人　70代：379人　80代以上：137人
- 委 員 長：中嶋　喜代

【奉仕団の主な活動】
高齢者の支援活動　市中心街の奉仕団員と高齢者のふれあい交流会（年２回）
声掛け訪問（随時）

## 地域のお年寄りを対象とした「ふれあい会」の実施

### ● 活動に至るまでの経緯

平成19年の春に、奉仕団委員長から「地域高齢者生活支援活動推進事業」の提案があり、住吉町奉仕団員、松葉町奉仕団員、町内会有志22人で３回に亘り学習会を開催し、同年夏には「高齢者の健康と自立した生活を地域で支えあう」という活動の目的に賛同した18人で実行委員会を立ち上げました。街の中心部に位置する実森会館を活動拠点として、周辺の17自治会の70歳以上のお年寄りの住む世帯のうち、お年寄りだけになってしまう世帯を中心に172人を選定し、一軒一軒訪問し、活動の趣旨を説明し、賛同いただいた方を対象としました。

▲あじさい観賞交流会

### ● 活　動　内　容

ふれあい会を年２回実施し、交流を深めました。

**・「あじさい鑑賞交流会」**

20年以上前から奉仕団員が手入れをしている鷹巣中央公園のあじさいの花が見頃を迎えた頃に、お年寄り16人と実行委員15人が参加し、あじさいを鑑賞し、園内の憩いの家「青葉荘」でお抹茶とお弁当を頂きながら、懇親会を開催しました。

**・「収穫感謝の交流会」**

お年寄り18人と実行委員16人が参加して新米の「きりたんぽ」を堪能しました。夏に続く２回目のふれあい会となることから、カラオケや余興で大いに盛り上がりました。

▲収穫感謝の交流会

### ● 今 後 の 展 望

参加者の輪がますます広がっていくような、また参加者が更に楽しめる交流会を目指します。新年度からはこの事業を始めた目標でもある「いつまでも健康でいるため」の講習会をお年寄りと一緒に受講する他、対象となっているお年寄りの誕生日には、実行委員から手作りのバースデーカードによる激励のメッセージを贈っています。

# 栃木県上三川町赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和61年２月５日
- 団 員 数：85人（女性：70人／男性：10人）
  20代：０人　30代：０人　40代：１人　50代：13人
  60代：39人　70代：29人　80代以上：３名
- 委 員 長：星　アサイ

【奉仕団の主な活動】
ひとり暮らし高齢者へのお餅・赤飯等の配布、介護保険施設の除草
寝たきり高齢者のオムツ配布、高齢者・障害者スポーツ大会での豚汁サービス
子守ボランティア、各事業でバッチやエプロンを着用し赤十字のPR

## 町の高齢者・障害者スポーツ大会での豚汁配布サービス

### ●活　動　内　容

単独の赤十字奉仕団として出発し、炊き出しや家庭看護法のスキルアップを図るなか、平成元年から、高齢者・障害者スポーツ大会での豚汁配布活動を始めました。毎年９月の最終週に中央公民館で約1,200人の参加者を対象に約30人の団員で炊き出しを行います。当日の昼に無料配布しますが、配布後も大会のアトラクションとして、上三川音頭等の踊りを披露し、参加者に楽しんでいただきます。

豚汁は、前日午前中に材料を買い出し、午後に調理し、翌日午前中に再加熱して味をしみ込ませます。

▲▼豚汁の炊き出しの様子（上・下）

### ●活動の費用、財源

町の健康福祉まつりでのお餅の販売等による収益金と分区からの補助金です。

### ●創意工夫している点

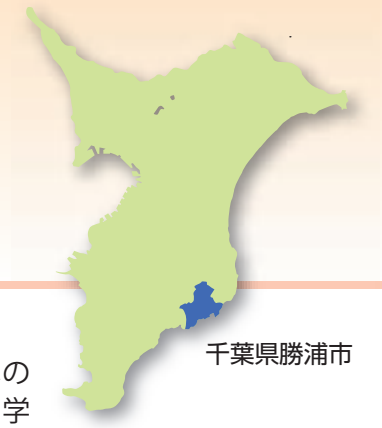
参加者の９割がお年寄りのため、食べやすい大きさにし、豚肉・野菜での出汁をしっかり取り、薄味で旨みを感じるよう配慮しています。今ではイベントのたびに各方面から依頼をいただいています。

### ●今 後 の 展 望

赤十字奉仕団の原点に返り、各事業を見直し、奉仕団ならではの事業を展開し、若い人にも啓発していきたいと思っています。

# 千葉県勝浦市赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和51年３月
- 団 員 数：305人（女性：305人／男性：０人）
  20代：　０人　30代：２人　40代：13人　50代：66人
  60代：122人　70代：89人　80代以上：13人
- 委 員 長：関野　敬子




【奉仕団の主な活動】
法人社資募集、NHK海外たすけあい（団員への声かけ）、防災訓練への参加、高齢者の支援活動（施設ボランティア、ふれあい教室）、小中学校での体験学習、一日赤十字開催など

## 市、婦人会等と協働で高齢者支援活動～ゆうゆう広場の開設

### ● 活動に至るまでの経緯

平成15年から２年間、千葉県支部高齢者生活支援活動の指定を受け、これまで高齢者ふれあい教室が実施されていなかった勝浦市でゆうゆう広場を始めました。計画の作成では君津市赤十字奉仕団「はぐるまの会」を参考にし、県研修会受講者20人で役員会とは別の「レッドクロスよつ葉会」を組織し、この活動に加わってもらいました。平成15年７月８日に行われた第１回の活動には19人の参加者に20人の団員が精一杯接し、無事終了したときの安堵感は忘れられません。

### ● 活　動　内　容

ゆうゆう広場は70歳以上のひとり暮らしの方、高齢者夫妻、身体障害者を対象に、勝浦市保健福祉センターで年６回開催しています。午前９時半から来場順に、保健師による血圧測定や栄養指導を受けてから、全員で童謡や唱歌を合唱して始まります。午前中は輪投げ、生け花、お手玉作り、ぬり絵、カルタなど、参加者が楽しめるように毎回変化をもたせています。できあがった作品は広場に飾り、参加で観賞します。昼食は他団体の協力の下、バランスのよい料理に舌鼓を打ち、午後からは踊りやカラオケで盛り上がります。

### ● 他団体との連携

赤十字奉仕団の活動として開設した広場は、現在は勝浦市ボランティアセンターの事業となっています。各種団体と個人ボランティアが次のとおり協力して活動しています。①会場全体は赤十字奉仕団８人と個人ボランティア２人が担当　②昼食は、食生活改善会、婦人会、響の会など９人が献立と調理を担当　③身体障害者の送迎は移送ボランティアが担当

▲俳句をづくりを始める前に、準備体操をする参加者

### ● 活動の効果、成果

最初はこちらからお年寄りに声をかけていましたが、回を重ねるごとに「参加したいのですが」と申し込まれるようになりました。参加者は年々増えています。様々な人生を歩んでこられたお年寄りの方々の魅力と意外な底力を目にするにつけ、奉仕団員は赤十字活動の無限の広さを実感しています。

▲団員が持ち寄った花を使ってきれいに植える参加者

### ● 今 後 の 展 望

最初、19人の参加で出発した「ゆうゆう広場」も今では40人となりました。費用は全額、勝浦市ボランティアセンターが負担していますので、参加は無料です。市の予算がつかなくなった時は、費用を参加者に負担してもらい実施することになります。それでも開いてほしいとの声が多いのは、この広場がお年よりとって必要な居場所となっているからだと強く感じています。

# 山梨県甲斐市赤十字奉仕団

- 結成年月：平成４年10月
- 団 員 数：30人（女性：30人／男性：０名）
  20代：０人　30代：０人　40代：０人　50代：７人
  60代：18人　70代：４人　80代以上：１人
- 委 員 長：中　三千代

【奉仕団の主な活動】
高齢者の支援活動（特別養護老人ホームのリネン交換を週１回実施）

## 特別養護老人ホームにおけるリネン交換ボランティアの実施

### ● 活動に至るまでの経緯

甲斐市として合併される前の敷島町に初の特別養護老人ホームが開設されたことから、奉仕団では施設見学をし、何かできることがないかを施設側と話し合いました。入所者の直接介護等はできなくても、家庭看護法の受講歴のあった委員長が「リネン交換ならできるのでは？」と提案し、これを施設側も快諾してくれたことからこの活動が始まりました。団員は、委員長から伝達講習という形でリネン講習のノウハウを身につけ、平成５年から週１回、入浴日に当たる木曜日に活動を実施しました。１回の活動あたり、５～６人で活動するよう当番表を作り、活動にあたりましたが、臨機応変に当番を輪番で回しつつ、活動できた喜びを感謝すること等を団員間で心がけました。

▲リネン交換ボランティアの活動

### ● 活　動　内　容

当番表は１ヵ月ごとに団員に配布し、活動する団員は車を持つ団員が送迎しました。午前９時半に現地集合をし、奉仕団のユニフォームを着用の上、２人１組でシーツ、枕カバー、掛け布団カバー等の交換をします。この間、入所者は入浴を済ませます。30床近いベッドのリネン交換をし、終了後はコーヒータイムを取りつつ、ディスカッションをして、午前11時～同11時半頃に解散となります。

▲活動終了後のコーヒータイムの様子

### ● 今 後 の 展 望

年に一度、夏休みを利用して小・中・高校生を対象に体験ボランティアを募集し、毎年15人程の参加者を集めています。今後は、より幅広く、家庭の主婦や男性も対象とし、ベッドメイキングの講習会を開催しながらリネン交換ボランティアに参加する人の増加を目指します。そして、このボランティア活動を通じて、赤十字の理念を、地域の人々に伝えることができれば、当奉仕団の存在意義・位置づけも確固たるものになるのではないかと期待しています。

# 鳥取県北栄町大栄赤十字奉仕団

- 結成年月：平成３年２月
- 団 員 数：132人（女性：126人／男性：６人）
  20代：０人　30代：０人　40代：２人　50代：15人
  60代：64人　70代：49人　80代以上：２人
- 委 員 長：山田　早百合

【奉仕団の主な活動】
・社員（社資）募集　・NHK海外たすけあい等の募金活動　・災害救護・防災活動
・高齢者の支援活動　・児童の健全育成活動　・赤十字思想の普及活動
・その他（呼びかけ活動等献血事業）

## 愛の声かけ訪問活動の実施

### ● 活動に至るまでの経緯

地域における高齢化が進行し、高齢者世帯やひとり暮らしの世帯が増加してきたこと、また農業の町であるために高齢者が日中一人きりになってしまう現状が認められたことから、こうした方々に対し身近に住む奉仕団員が積極的に声かけしたり、気軽な話し相手になることを目指して、「愛の声かけ訪問活動」を開始しました。町の社会福祉協議会とも協働し、高齢者世帯への食事作り、ひとり暮らしのつどいへの協力支援等を通じて、誰もが安心して暮らせる、とともに支え合える地域づくりを目指して活動を継続しています。活動をスムーズに実施するために専門部として福祉部を設置し、材料の準備、製作についての講習会の開催、伝達等、企画推進を図っています。

▲高齢者世帯への食事づくり

### ● 活　動　内　容

町内には85歳以上の高齢者が500人近くいますので、この方々のもとへ２～３人ずつがグループとなって年２回訪問します。１回目は９月の「敬老の日」前後に訪問し、２回目は年明け２月に訪問します。

プレゼントの製作については、福祉部から講習を受けたものをそれぞれの部落単位で団員が集まって製作します。団員同士の交流や親睦にもつながり、大変和やかな雰囲気の中で製作しています。プレゼントの内容は、これまで「ふくろう」や「貝の根付け」などを製作してきましたが、最近は第１回目には「ティッシュボックス」、第２回目には「干支のミニ色紙」に言葉を書き添えて贈っています。受け取った方々は皆さん大変喜んで下さり、私たちの訪問を心待ちにして下さっています。中にはおしゃべりに花が咲いて、半日くらい談話をしたこともありました。

▲訪問時に渡すプレゼントづくり

### ● 今 後 の 展 望

高齢者福祉では、災害時における支援について各地域で自治会、消防団、民生委員等と連絡を密にし、防災時支援マップづくり等を検討中です。青少年への赤十字精神育成事業については、分区、小・中・高校への呼びかけはもちろん、教育委員会（子どもほくえい塾サポーター事業）と連携をし、各こども会、保護者会への呼びかけをし、夏休み中の防災活動を通じた赤十字思想の普及活動を継続していきたいと考えています。

7.応募事例紹介

# 児童の健全育成活動

# 青森県五所川原市赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和34年４月
- 団 員 数：45人（女性：45人／男性：０人）
  20代：０人　30代：０人　40代：１人　50代：１人
  60代：20人　70代：22人　80代以上：２人
- 委 員 長：開米　實枝

【奉仕団の主な活動】
社員増強運動　赤十字思想普及活動　炊き出し訓練および防災訓練への参加
義援金・救援金の募集　ひとり暮らしのお年寄りを地区芸能大会へ招待
使い捨てナプキンを病院へ贈呈、道路わきの空き缶拾い、公共施設地内の除草
地区小学校へのマスコット贈呈

## 子どもたちを対象にした防災マップづくり、防災研修（1日研修）

### ● 活　動　内　容

私たちの地域は、集中豪雨災害の経験を持ち、また常に河川の氾濫の危険が予想されるため、住民の防災に対する意識は非常に高いです。また防災上地域の高齢化も心配されており、地域防災に力を入れることにしました。子どもたちにも防災に関心を持ってほしいと、地域住民と三好小学校の児童５、６年生との合同研修会を開催、午前中は、炊き出し訓練、過去の災害についての三好地区住民協議会長の講演と防災マップの作成を行いました。昼食は参加者が各自作ったハイゼックスと豚汁を食べます。午後は、地区住民と奉仕団員がともに救急法の実習を受けます。

### ● 防災マップ作り

事前に奉仕団員が、災害時の避難場所、避難経路の確認、危険な箇所、消火栓の位置などを確認し、あらかじめ元になるマップを作っておきます。マップ作りの時間には小学生を含めたグループに分かれ、意見交換をしながらマップを完成させます。

▲防災マップの発表

### ● ひとり暮らしのお年寄りを地区芸能大会へ招待

赤十字奉仕団三好分団、三好地区住民協議会、三好地区社会福祉協議会共催の「敬老の日」の芸能大会には、三好小学校児童が作文を発表し、招待したお年寄りと一緒に食事をし、とても喜ばれています。

### ● 活動の効果、成果

炊き出しの訓練は、初めて体験した小学生に対して食べ物の大切さを実感させ、防災マップの作成を通じては災害に対する心構えができてよかったという反応を得ました。

### ● 今 後 の 展 望

今後さらに高齢者夫婦世帯、ひとり暮らし高齢者世帯の増加が予想され、奉仕団として災害時の避難方法等の啓発や、孤独にならないためのコミュニケーションの取り方などを重点に掲げて、活動していきたいと思っています。

# 茨城県日立市十王地区赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和61年４月
- 団 員 数：39人（女性：39人／男性：０人）
  20代：０人　30代：０人　40代：１人　50代：７人
  60代：28人　70代：３人　80代以上：０人
- 委 員 長：岩瀬　玲子

【奉仕団の主な活動】
青少年赤十字メンバーと地域赤十字奉仕団の合同研修を開催（年１回）
地域の防災訓練に炊き出しで参加
お年寄りを対象とした手作りの食事会の開催
お年寄りへの声かけ（安否確認）

## 青少年赤十字メンバーとともに行う研修会の開催

### 活動に至るまでの経緯

当奉仕団は、平成６年に地域婦人連絡会から独立して活動を開始しました。それ以降、茨城県支部が主催する救急法や家庭看護法の講習会で、技術を習得し、地域においては非常時のテント設営、非常食の炊き出し、ひとり暮らしのお年寄りを対象とした「ふれあい食事会」などを開催してきました。しかし、活動のマンネリ化を避けるためにも、新しい活動をしたいと考え、奉仕団員、分区の事務局と話し合いを行い、青少年赤十字加盟校の児童とともに研修会を行うこととし、教育委員会を通じて学校側の承諾も得て、「防災の日」に実行することになりました。

### 活　動　内　容

櫛形小学校の青少年赤十字メンバーと地域赤十字奉仕団との研修会は、健康福祉センター内の研修室と調理室で開催しました。救急法指導員による赤十字奉仕団の心構えや役割についてのお話の後、三角巾を用いた包帯法やAEDを用いた救急法技術を習得している奉仕団員が、児童と２人１組となって指導していきました。昼食には、ハイゼックスを用いたごはんとレトルトカレーの炊き出しを行い、地元で収穫された野菜のサラダとともに団員と児童で会食し、楽しい時間を過ごしました。

児童には赤十字のパンフレット、炊き出した非常食、手作りの赤十字バッジをお土産に持たせて、家族にも赤十字へのご理解ご協力を呼びかけました。

▲▼AEDを用いた救急法の研修（上・下）

### 今後の展望

小中学校の子どもたちとともに救急法や防災訓練を行っていくことで、その子どもたちを通じて赤十字活動が広がることを期待するとともに、私たち奉仕団員も地域の防災組織の中の要になれるように活動をしていきたいと思います。

# 東京都府中市赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和50年５月
- 団 員 数：402人（女性：383人／男性：19人）
  20代：　０人　30代：　０人　40代：６人　50代：52人
  60代：160人　70代：179人　80代以上：５人
- 委 員 長：鈴木　益子

【奉仕団の主な活動】
・社員（社資）募集　・NHK海外たすけあい等の募金活動　・災害救護・防災活動
・高齢者の支援活動　・児童の健全育成活動　・赤十字思想の普及活動　・その他
（青少年赤十字メンバーへの食育活動、災害時の帰宅困難者支援所の設置、親子で学ぶ赤十字救急法、環境美化清掃活動）

## 親子で体験する食育活動（そばの種蒔きから収穫・試食まで）の実施

### ● 活動に至るまでの経緯

飽食の時代といわれる今日、命にかかわる食の大切さ、食育の問題について、青少年赤十字メンバーとともに、府中市民農業大学「そばコース」に参加し、体験学習を行うことにしました。府中市用水組合、東京都麺類協同組合府中支部、地域住民、学校、市職員の協力のもと、畑を借り、種の購入から始めました。青少年赤十字メンバーと用水組合の畑の割り振りを行い、青少年赤十字メンバーの畑には赤十字マークが完成するよう赤い種を撒き、周囲に白い種を撒きました。用水組合の畑には赤い種で川の流れが完成するようにし、ウェーブの周りには白い種を撒きました。面積のバランスに苦労しましたが、農家の方のご協力も得て、見事な赤十字マークと川の流れが完成しました。

▲実をつけたそばの苗の刈入れの様子

### ● 活　動　内　容

元・田んぼで転作により小麦畑になった畑を利用しました。開校式のあと早速種撒きに取り組みました。芽が出てからも鳩に食べられたケースもあり、５～６人でもう一度種撒きをし直しました。台風９号のあと、全員で間引きと土寄せを行いました。間引いたものも無駄にせず、それぞれの家庭に持ち帰り、サラダや胡麻和えにして食べました。お花見の際には、白い花の中に赤い花が咲き、赤十字マークがくっきりと浮かびあがり、皆で歓声を上げて喜びました。刈入れと脱穀の際も農家の方の協力を得て、実を乾かしました。赤い実は粉になりませんでしたが、白い実は唐箕で選別し、石臼で粉にしました。

▲苗からそばの実を取る脱穀作業の様子

### ● 今 後 の 展 望

奉仕団の主催による「にこにこ赤十字健康教室」の実施を検討中です。青少年赤十字メンバーには、ハンドケア、車椅子、アイスマスク等の講習も普及させたいと考えています。また、いつ発生するかわからない災害に対して、救護安全部会が中心となり「エイドステーション（災害時帰宅困難者支援所）」での対応の仕方の講習会も計画したいと考えています。

# 新潟県村上市赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和29年４月
- 団 員 数：75人（女性：75人／男性：０人）
  20代：０人　30代：０人　40代：１人　50代：４人
  60代：10人　70代：54人　80代以上：６人
- 委 員 長：板垣　愛子

【奉仕団の主な活動】
歳末たすけあい募金活動
市主催の防災訓練での炊き出し訓練（毎年）
高齢者世帯へ電話での安否調査や訪問活動
子育て支援事業の育児講座での託児ボランティア活動
イベント等に赤十字コーナーを設けてパネル展示等の普及活動
献血推進活動

## 行政と連携した託児ボランティア

### ●活　動　内　容

市の子育て支援事業として、未就園の子ども・保護者を対象に、育児講座などを実施しています。育児講座は年間５～７回、子育て支援センターで行われ、ここで母親が受講中の２時間、奉仕団員が託児ボランティアを行っています（過去５年間継続して実施）。施設の関係で１回の託児数は18人限定なので、団員10人で対応しています。活動に当たっては救急法指導員資格を持っている団員を講師に、幼児安全法を研修し、保育士さんからは幼児の心理や遊ばせ方の講話をお願いしています。

▲託児ボランティアをする奉仕団員

当日は開始１時間前に会場へ集合、ルームに敷物を敷き、遊具の準備をします。子どもの胸と、飲み物やオムツのバッグに名札をつけて、母親から子どもの様子を聞いてから預かります。遊ぶ子どもから目を離さず、一緒に遊び、飲み物を欲しがる子には、持参の飲み物を与え、オムツを交換することもあります。

### ●活動の効果、成果

参加している母親は専業主婦で、ほとんど核家族の世帯です。奉仕団員は子育て経験者であり、子どもを預けることに安心感があるようです。母親が子どもから解放されて研修に集中できるのはストレス解消の面からも有効だと思います。

### ●今 後 の 展 望

今後は育児講座だけでなく、「子育て広場」など母親や子どもたちとの仲間に入って活動していきたいと思っています。

# 大分県宇佐市赤十字奉仕団

- 結成年月：平成17年５月
- 団 員 数：100人（女性：100人／男性：０人）
  20代：０人　30代：０人　40代：10人　50代：20人
  60代：35人　70代：30人　80代以上：５人
- 委 員 長：奥城　朝恵子

【奉仕団の主な活動】
NHK海外たすけあい等の募金活動
消防署職員の協力を依頼しての消火器の使い方等の防災活動
ひとり暮らしのお年寄りのお弁当作り活動
小学校のイベントの際のお食事作り活動
環境美化（花植え活動、町内清掃活動）
社会福祉施設等の訪問活動

## 地域で行う子育て支援活動

### ● 活動に至るまでの経緯

この地域では、年間40人ほどの赤ちゃんが産まれていますが、当奉仕団では、以前から産まれた赤ちゃんにタオル１枚から手作りで作ったエプロンとガーゼのハンカチ、そしてメッセージをそえてお祝いする活動を行なっていました。

しかし、他にも何か更にお母さんと子どもとの交流が出来ないものかと思案していたところ、毎月行われている家庭教育講座「なごみ」の話を聞き、奉仕団内で検討し、子育て支援の活動に取り組むことにしました。

### ● 活　動　内　容

若いお母さんたちの互いの交流が少ない時代ですので、毎月開催されている家庭教育講座「なごみ」の子育て支援として、お母さんたちが学習している際の時間、子どもたちを預かり、子守をしています。

具体的には、子どもたちに本の読み聞かせを行なったり、一緒にゲーム体操、おもちゃで遊ぶなどしてお母さんたちには安心して学習をしてもらっています。

講座が終わると、お母さんたち、子どもたちと一緒にお茶を飲んでコミュニケーションを重ねています。

▲子育て支援活動の様子

### ● 今 後 の 展 望

お母さん達が集って安心して学習できるためにも、私たち奉仕団員ももっと学習をしていきたいと考えています。

また、今後は幼児安全法を活動に取り入れて行くことを検討しています。

# 災害救護・防災活動

# 宮城県美里町南郷赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和32年８月
- 団 員 数：144人（女性：79人／男性：47人）
  20代：０人　30代：０人　40代：５人　50代：34人
  60代：44人　70代：55人　80代以上：６人
- 委 員 長：鈴木　潤一

【奉仕団の主な活動】
社員（社資）募集活動の実践、すぐに役立つ災害時対応研修の開催、街頭献血の支援
赤十字思想の普及活動（研修会に赤十字理念の話し合いを実施）

## 災害救護・防災活動「自分の地域は自分で守る」

### ● 活動に至るまでの経緯

平成15年７月26日の宮城県北部連続地震は、これまで経験したことない大規模な災害でしたが、１日に大きな地震が３回（震度５強の前震、震度６強の本震、震度５強の余震）続きました。建物被害としては全壊489棟、半壊1,231棟に加え、人的被害も負傷者が649人に上り大変な思いをしました。平成16年からは毎年７月26日を防災の日と決めて、体験型町民防災訓練として行ってきました。

### ● 活動当日のスケジュール

| | | | |
|---|---|---|---|
| ９：20 | 開会・挨拶 | 12：30 | 軽食と懇談 |
| ９：30 | 研修 ・講習（救急法・災害時における応急手当）<br>・講話（非常災害と赤十字奉仕団） | 13：30 | 閉会 |

### ● 活動の開始時期、頻度

平成15年の災害以降、年１回開催しています。

### ● 活動の効果

美里町は平成18年１月に旧南郷町と旧木牛田町との合併により一つなりました。このため地区ごとに防災訓練を実施しています。今後、確実に宮城県沖地震が起きると予測されていますので、活動を継続していくことで、奉仕団員の活動の広がりが出てくることが期待されます。

▲三角巾を使用した応急手当の仕方を学ぶ

### ● 日ごろから心がけていること

会議等で奉仕団員が集まった時に、災害時の対応について話し合いをするようにしています。

### ● 創意工夫している点

講習会を開催する曜日については平日の午前中を計画していますが、奉仕団員も仕事をしている方が多いことから、日曜日に変更して行うことになりました。一日に午前、午後２回に分けて行うことで都合のよい時間帯で受講できるようにしました。

### ● 現在抱えている悩み、問題点

奉仕団員の研修会への参加を呼びかけても、若い団員の参加が少ないことです。

▲街頭献血の支援

### ● 今後の展望

宮城県沖地震は近いうちに必ず起こることが予想されるので、奉仕団員の増員、特に仕事をリタイヤした団塊の世代への勧誘を積極的に行い、また、救急法の研修会の数も増やしていきたいと考えています。

# 神奈川県大磯町災害救護赤十字奉仕団

- 結成年月：平成９年４月
- 団 員 数：20人（女性：12人／男性：８人）
  20代：３人　30代：０人　40代：１人　50代：６人
  60代：６人　70代：４人　80代以上：０人
- 委 員 長：内田　よしの

【奉仕団の主な活動】
地域に根ざした防災・救護活動（年15回）

## 団員総合訓練の実施

### ● 活動に至るまでの経緯

団員総合訓練は、奉仕団創設から、１年間の団の活動のまとめとして行われてきた事業で、その年度に行われた講習会の内容や救護の経験、団員の希望等によって、訓練内容を検討し、机上の訓練にするか、実際の訓練にするかを選択して実施しています。

### ● 活　動　内　容

今回の訓練は、平成20年２月24日に行いました。いろいろな年代（10代から70代まで）の参加者が協力して１つの目的を達成することを訓練の目的としました。

様々なゲームを通してグループ作りや話し方についての実践を行い、三角巾を用いた包帯法を実施する中で、わかりやすく説明することの大切さを実感しました。

他にも、この訓練では、包帯法、運搬法、心肺蘇生法の個々の手技の確認とともに、コミュニケーションの方法や表現方法も学習しました。

▲三角巾を使用した包帯法

### ● 参　加　団　体

当奉仕団の他に、大磯町女性防火クラブ、ボーイスカウト大磯一団、開成町赤十字奉仕団、県内赤十字防災ボランティアの４団体が参加し、神奈川県救護赤十字奉仕団には心肺蘇生法などの手技の指導を行っていただきました。

### ● 活動の成果、反響

幅広い年代の方々も含めて地域の関係団体と合同で訓練を行うことができたことが成果です。その中で、情報を簡潔にわかりやすく伝達することの大切さを学ぶことができました。そして、「また来年度も同様に地域ぐるみで訓練を行いたい」という参加者の声をいただいています。

▲担架搬送の模様

# 富山県射水市大島赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和56年12月
- 団 員 数：65人（女性：65人／男性：０人）
  20代：０人　30代：１人　40代：０人　50代：13人
  60代：36人　70代：14人　80代以上：１人
- 委 員 長：福岡　美津

【奉仕団の主な活動】
社員（社資）募集活動、NHK海外たすけあい、自主防災の炊き出し訓練・指導、高齢者宅の訪問、児童の健全育成（救急法等に参加）、赤十字思想の普及活動

## 地域自主防災との連携

### ● 活動に至るまでの経緯

災害救護は当奉仕団の活動の柱ですが、実際に災害が発生した時には、地域の様々な団体との連携が不可欠であり、それがないと自分たちの活動さえままならないということが、実感として芽生えてきました。

JRC加盟校でもある地域の小学校の避難訓練時に、児童に対して炊き出しや包帯を体験させて赤十字活動を学んでもらったり、町の防災訓練時の炊き出し要請に応えたりしていくうちに、地域の奉仕団に対する認識も深まり、炊き出しといえば大島奉仕団と言われるようにまでなりました。

▲自主防災訓練に参加する
小島４区自治会と奉仕団の皆さん

### ● 活　動　内　容

平成16年の中越地震での活動経験から、いざという時に迅速に対応できるように普段から団員の連絡網を使って連絡を取り合い、団員相互のコミュニケーションを深めるようにしています。奉仕団は地域自治会が行う防災訓練のなかで、食料供給を第一として非常炊き出しの役割を担っています。また、地域自主防災会の立ち上げにも積極的に関わり、平成18年から現在まで５つの自治会で訓練を実施しています。今後は複数の自治会が参加する防災訓練への参加も計画されています。

▲非難訓練で炊き出しを
体験する生徒たち（大島小学校で）

### ● 活 動 の 効 果

JRCとの連携やひとり暮らし高齢者訪問活動など、様々な活動も奉仕団の活動として認知されてきましたが、大島奉仕団といえば「あっ炊き出しけ」と言われるくらい町の人たちに知られるようになり、今では自主防災会を計画する自治会から相談される立場になりました。今後も市や県の防災訓練に積極的に参加するとともに、自治会からの依頼に柔軟に応えるように団員の災害に対する意識の高揚・維持に努めていくことにしています。

### ● 日ごろから心がけていること

奉仕団の行事には、必ず制服（炊き出しは割烹着、他は社紋Tシャツ、略式はバッチ）の着用を義務づけています。制服を着用することによって統率がとれ、赤十字奉仕団員としての自覚が持てるからです。

ボランティア活動を行う際の心がけとしては、家族の理解を得ながら、決して無理をせずに団員相互の信頼関係を忘れないようにしています。

▲富山新聞（平成16年10月26日付）

### ● 今 後 の 展 望

昭和56年12月に20人の団員で婦人会から独立し、大島赤十字奉仕団が誕生してから平成21年で30周年を迎えようとしています。平成17年の厚生労働大臣表彰をはじめ、数々の表彰を受けました。今後、さらに奉仕活動の輪を広げるため、自主防災等を目的とした災害に対する備品の購入や団員及び地域の他団体との交流、活動時のお揃いのジャケットなどの購入を進める予定です。

# 長野県中川村赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和30年４月
- 団 員 数：135人（女性：135人／男性：０人）
  20代：０人　30代：13人　40代：15人　50代：66人
  60代：38人　70代：３人　80代以上：０人
- 委 員 長：小澤　あい子

【奉仕団の主な活動】
商店街などに募金箱を設置してのＮＨＫ海外たすけあい等の募金活動
火災発生時のおにぎりの炊き出し
消防団訓練へ役員が参加するなどの災害救護・防災活動
ひとり暮らしのお年寄りの集いの際の料理作りなどの高齢者の支援活動

## ふれあい福祉広場における災害時非常食体験の実施

### ● 活動に至るまでの経緯

中川村赤十字奉仕団ではこれまで主な活動として、水害や火災といった災害時に、被災住民や救助活動を行う消防団員に対しておにぎりなどを炊き出す活動を行なっていました。

しかし、当奉仕団員は、地区の女性代表により構成されており、任期が１年間であるため、毎年団員が入れ替わってしまいます。そのため、奉仕団の活動も毎年同じ活動を引き継ぎながら繰り返し行なっていました。

このような現状もあり、若手の奉仕団員において、赤十字思想や奉仕団の活動、役割等について理解の薄い団員も多いのではないかという意見が挙がったため、これまでの単におにぎりを炊き出すだけの訓練を改め、ハイゼックスを使用した非常食体験という形にして、より効果的な炊き出し訓練を実施するとともに赤十字奉仕団の活動を理解していただく機会を設けることになりました。

### ● 活　動　内　容

平成19年10月13日（土）、14日（日）の両日、災害時非常食体験としての炊き出し訓練を「ふれあい福祉広場」（中川村社会福祉協議会主催）の場で実施しました。本訓練を開催するにあたっては、ボランティア情報誌やケーブルテレビを通じて活動のPRを行ったほか、炊き出しに使用するお米についての寄付も呼びかけました。

取り組むにあたっては、まず奉仕団員に対して事前に袋に米と水を入れて、ハイゼックスの使用方法を体験してもらい、炊き出し方を習熟してから訓練に望みました。

### ● 今 後 の 展 望

この活動を多くの住民の皆様に見ていただくことで、奉仕団の活動を理解していただき、興味を持っていただくことができました。

▲災害時非常食体験

▲災害時非常食体験で中学生に指導

# 長野県原村赤十字奉仕団

- 結成年月：平成３年４月
- 団 員 数：61人（女性：37人／男性：24人）
  20代：０人　30代：０人　40代：０人　50代：０人
  60代：50人　70代：11人　80代以上：０人
- 委 員 長：五味　勇吉

【奉仕団の主な活動】
奉仕団員全員参加による街頭募金等の実施による社員（社資）募集活動
原村防災訓練等への参加による災害救護・防災活動
支えあいマップによる高齢者の支援活動
救急法講習会の開催等を通じての赤十字思想の普及活動、献血支援活動

## 災害救護・防災にかかる活動を実施

### 活動に至るまでの経緯

原村赤十字奉仕団は、近年まで男性の奉仕団員がいない状態でしたが、ようやく男性団員が加入し、奉仕団として新しいスタートを切りました。しかし、どのような活動から手をつけていけばよいかわからず、思案のうえ、まず日本赤十字社の本社見学を通じ、赤十字について知識や認識を深め、次にいざ災害が起きた際に迅速に奉仕団員が対応できるようにするための緊急連絡網を作成し、その伝達訓練をしようということになりました。

その他、委員長が本社主催の赤十字ボランティア・リーダー研修会に参加したことで、研修会で習得した知識等を生かし、奉仕団活動の活性化へつなげています。

### 平成19年度の活動内容

| | |
|---|---|
| ５月28日 | 研修会で平成18年度の事業報告を実施 |
| ６月19日 | 原村福祉センターにて、諏訪地方では初めてのAED（自動体外式除細動器）を使用した心肺蘇生法講習会を開催（32名が参加） |
| ８月24日 | 緊急連絡網を使用した防災訓練に参加 |
| ９月１日 | 原村の防災訓練に参加 |
| 10月10日 | 茅野市で開催された諏訪分区の講習会に参加 |
| 11月25日 | 茅野市地震防災講演会へ参加 |
| ３月９日 | 柳沢区で支えあいマップを作り、社会福祉協議会主催の避難誘導訓練が実施され、当奉仕団も避難誘導と炊き出しの分野で協力 |

### 今 後 の 展 望

奉仕団員の高齢化が進み、活動を行う上での不安もありますが、防災グッズの整備や、避難場所や危険箇所をしっかり認識しておくことで、災害に対する備えを進めていきたいと考えています。

▲訓練での炊き出しの模様

# 岐阜県垂井町赤十字奉仕団

- 結成年月：平成元年４月
- 団 員 数：73人（女性：73人／男性：０人）
  20代：０人　30代：０人　40代：３人　50代：21人
  60代：44人　70代：５人　80代以上：０人
- 委 員 長：久保田　礼子

【奉仕団の主な活動】
防災訓練を通じた炊き出し、車椅子介助、心肺蘇生法
高齢者対象の「いきいきサロン」（毎月実施）
子育て支援活動

## 町の防災訓練での炊き出し、車椅子介助など

### ●活　動　内　容

垂井町７校下において１年ごとの輪番で行われる防災訓練は、東海地震発生を想定して行われ、早朝の５時の地震注意報から始まって、災害対策本部撤収の午前８時半まで行われます。

赤十字奉仕団は、炊き出し訓練を中心に参加します。アルファ米のご飯や乾パン等を住民に配布して試食していただきます。また体の不自由な方やお年寄りに車椅子に乗っていただき、車椅子介助の訓練をしています。

「災害が起きたら、私たちに何ができるのか」を考え、岐阜県支部から講師を招いて、災害時に高齢者の避難所での生活を支えるため、
①高齢者に接するときの心配り
②気をつけたい病気の症状
③リラクゼーション
④足浴、清拭の仕方など
の講習を受けたり、心肺蘇生法を習熟して備えています。

ビニールとダンボールを使用して簡単に組み立てられる、屋内用簡易トイレの組立もできるようになりました。「食料と水はすぐには届かない」ため、各自「水」と「非常食」を３日分保存するよう、住民の方々に呼びかけ、災害に対する意識を高めていきたいと思います。

▲防災訓練（車椅子介助）

### ●今 後 の 展 望

当奉仕団は、この他にも３年前から子育て支援活動を実施しています。若いお母さん方と交流を深めながら、自分たちの体験を生かせる場となるよう願って活動しています。

# 静岡県掛川市赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和30年４月
- 団 員 数：416人（女性：408人／男性：８人）
  20代：　０人　30代：１人　40代：４人　50代：70人
  60代：244人　70代：94人　80代以上：３人
- 委 員 長：岩倉　ひろ子

【奉仕団の主な活動】
・社員（社資）募集　・NHK海外たすけあい等の募金活動
・災害救護・防災活動　・高齢者の支援活動　・児童の健全育成活動　・赤十字思想の普及活動
・その他　（チャリティーボックスの設置）

## 地域と連携した防災訓練・防災にかかる講習会の実施

### ● 活動に至るまでの経緯

掛川市は将来大規模な東海地震の発生が予想される区域にあり、また、隣接する御前崎市の旧浜岡町区域には原子力発電所が設置されていることから、防災への意識が非常に強い地域です。

そのため「自分の身は自分で守る」という考え方のもとに、一人ひとりの防災意識の向上を図っています。しかし、近年の地震災害時の報道を見るまでもなく、個人としての防災意識と同時に、地域としての防災意識の重要性も認識されるようになってきたことから、地域住民、地域自主防災隊、行政機関、社会福祉協議会などと協働し、防災活動の充実の必要性が高い地域での災害救護・防災訓練・防災にかかわる講習会等を実施するようになりました。

▲防災訓練（中学生に三角巾の使い方を指導）

### ● 活　動　内　容

当地域を12の区域に区分けし、各々の自主防災隊が中心になり、防災訓練を行います。１回目は災害救護・防災訓練の体制、取り組み方法について検討しました。必要に応じて講師を依頼し、機具等の点検・確認や避難場所の確保について確認を行いました。

２回目は、訓練場所を設定し全地域・全住民参加型で実施しました。当奉仕団は計画・立案の段階から訓練に参加し、救出班・救護班として負傷者の救出・救護を担当し、トリアージの訓練などを実施しました。

なお、応急処置・搬送の訓練、主に小・中・高校生を対象とした三角巾の指導講座を実施しました。炊き出しの実践についても、指導するとともに、参加者全員に非常食を配付しました。また、AEDについても、消防隊員の指導のもと、団員が補助的役割を担い、使用方法の普及に努めました。

▲訓練で負傷者役を演じた団員

### ● 今 後 の 展 望

今後の大規模災害が予測される中で、進行している奉仕団員の高齢化、男性団員の減少が、今後の活動にあたって支障をきたすのではないかと危惧されることから、行政と協働して団員の増強を図っていきたいと思います。また地域でのイベント等に積極的に参加することで、奉仕団の存在意義・必要性を再認識してもらうとともに「いま、しなければ」の精神で奉仕活動に努めていきたいと考えています。

# 三重県伊勢市地区地域赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和35年４月
- 団 員 数：707人（女性：707人／男性：０人）
  20代：　０人　30代：　７人　40代：20人　50代：30人
  60代：400人　70代：200人　80代以上：50人
- 委 員 長：朝比奈　喜美子

【奉仕団の主な活動】
赤十字運動月間（５月）に、駅前等でPR用ティッシュを配布しての社員（社資）募集支援活動
積極的な呼びかけやチャリティーバザーを通じてのNHK海外たすけあい等の募金活動
小学生新入生の下校の見守り・パトロール活動（毎年４月に実施）による児童の健全育成活動
山田赤十字病院で開催される「赤十字健康大学・病院と健康の講座」のPRと参加協力（年６回）

## 地域に密着した災害時炊き出し訓練と赤十字活動のPR

### ● 活動に至るまでの経緯

平成16年度より、「災害支援活動」の充実を図る目的で、三重県支部から災害用の炊き出し釜が配備されたことをきっかけに、この釜を普段から活用し、皆で使い方を覚え、地域の方々の災害に対する意識を高めたいということで、市と相談をして、多くの市民が参加する勢田川の「七夕大そうじ」の際に、炊き出しの訓練をすることになりました。

### ● 活　動　内　容

生活排水による汚染や水害の多い勢田川で、10年程前から毎年７月第１週の日曜日に行政と市民が一体となって「七夕大そうじ」を実施しています。この大掃除は、上流から下流まで広範囲にわたって掃除をするもので、子どもからお年寄りまで1,000人余りの市民が参加しています。

この大掃除の場で、５年前から赤十字のテントを立て、大掃除に参加した方々にハイゼックスで炊いたご飯を試食していただき、ハイゼックスの衛生面での利点と長時間の保存が可能なことを説明するほか、支部が作成したチラシやティッシュを配布することで、広く地域の方々に赤十字のPRと防災啓発を行っています。

### ● 活動する上での工夫

ハイゼックスで使用する水の量をはかり、カップに印をつけておくことで、団員の誰が作っても同量のご飯が炊けるようにした結果、災害に対する心構えができてよかったという反応を得ました。

### ● 今 後 の 展 望

この活動は、すでに６年間続けている活動ですが、今後も河川の流域に沿って活動範囲を広げていきたいと考えています。

▲炊き出し訓練の模様

▲赤十字活動をPRするチラシを配布

# 岡山県新見市哲多町赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和51年２月
- 団 員 数：47人（女性：47人／男性：０人）
  20代：０人　30代：０人　40代：３人　50代：20人
  60代：22人　70代：２人　80代以上：０人
- 委 員 長：佐田　美恵

【奉仕団の主な活動】
社員（社資）募集、NHK海外たすけあい等の募金活動
75歳以上のひとり暮らしのお年寄りや80歳以上の夫婦だけの世帯を対象とした給食を配布しての高齢者の支援活動（年３回）
青少年赤十字への加盟促進の呼びかけ
リーフレット等の配布などによる赤十字思想の普及活動

## 新見市総合防災訓練に炊き出しで参加

### ● 活動に至るまでの経緯

新見市では、総合的な防災体制の一層の充実・強化と市民の防災意識の高揚を図るため、平成17年の合併後初めて、県や自衛隊、消防、その他民間団体を巻き込んでの防災訓練を実施することを計画しました。

岡山県新見市哲多町赤十字奉仕団も「安全で安心して暮らせる街づくりに取り組みたい」との考えからこの訓練に参加しました。

### ● 活動の期日、場所、内容

日　時：平成19年10月28日（日）10：00～12：00
場　所：新見市神郷下神代「健康の森中央広場」
参加者：1,100人（うち当奉仕団員30人）

防災訓練の想定は、「震度６の大規模地震が新見市で発生した」とするもので、被災地域における初期消火や被災者の救出作業、傷病者の応急手当、電気やガス等のライフラインの復旧作業の演習が行われました。

私たち奉仕団員は、ハイゼックスを利用して炊き出しを担当し、200食を作りました。この10月の訓練を行うにあたっては、８月半ばから４回もの打ち合わせを重ねて訓練に望みました。

▲▼奉仕団は炊き出しコーナーを担当

### ● 活 動 の 成 果

普段の日常生活の中では、災害の少ない地域に住んでいるため、災害を他人事のように感じていましたが、訓練に参加したことにより、いつ起きてもおかしくない地震等の災害に対しては、常に備えておかなければならないということを学ぶことができました。

# 愛媛県宇和島市宇和島赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和32年５月
- 団 員 数：980人（女性：959人／男性：21人）
  20代：　０人　30代：　28人　40代：65人　50代：169人
  60代：349人　70代：354人　80代以上：15人
- 委 員 長：水田　幸子

【奉仕団の主な活動】
・NHK海外たすけあい等の募金活動　・災害救護・防災活動　・高齢者の支援活動
・児童の健全育成活動　・赤十字思想の普及活動
・その他（高齢者・障害児（者）通所・施設訪問と支援、古切手収集と整理、献血推進活動）

## 災害時における避難体験と防災訓練の実施

### ● 活動に至るまでの経緯

宇和島市は比較的災害の少ない地域で、奉仕団として災害時に活動した経験がほとんどありません。近年、南海地震等の危険性が叫ばれるようになりましたが、市民の関心もいまひとつの状況です。地域における高齢化が進行している現状を考えると、有事の際に私たちに何ができるか、奉仕団としてどう活動したらよいのかを考え、今まで継続してきた各種講習の実績を振返り、団員一人ひとりの技術の習熟とリーダー養成の必要性を実感しました。そこで、支部からモデル奉仕団として指定を受けたことを契機に、救急法・家庭看護法・高齢者生活支援等の講習に力を入れるとともに、災害救護・防災活動の研修に取り組むことになりました。

▲非常食の炊き出し

### ● 活　動　内　容

団員の災害に対する意識を少しでも高めるため、宇和島市総合福祉センターのホールを会場とし、１泊２日の避難体験と救急法・非常食の炊き出し・セラピューティックケア等被災者の心身のケアについて考えることを目的とした研修会を実施しました。事前に計画案を作成し、関係機関との連絡を行い９月～10月に参加者を募集し、説明会を実施、物資調達、予行練習を行いました。災害を想定し、研修中は会場の電気・水道は使用しないこととし、水は各自ペットボトルに３本用意して臨みました。研修初日は、会場準備・オリエンテーションを経て、応急手当・救急法講習・炊き出し訓練・夕食会・反省会を行いました。研修２日目は、ラジオ体操から始まり、乾パン・スープ等の朝食の後、反省会を行い、今回の１泊２日の研修全般についての感想、避難時の携行品のチェック、今後の課題等について意見交換の上、解散しました。

▲救急法講習の様子

### ● 今 後 の 展 望

今回新たに挑戦した避難体験・防災訓練以外にも、様々な活動に取り組んでいます。例えばすでに10年以上に亘って継続している「赤十字巡回健康講座」は地域住民の間にも浸透しており、開催を楽しみにしている方も多く、毎年150人程度の参加を得ています。今後は、こうした活動および災害時防災訓練に加えて、高齢者生活支援活動に力を入れたいと考えており、平成20年度からは「ひだまり赤十字」というミニサロンを年に４回程度開催していますが、徐々に広めていきたいと考えています。

# 熊本県宇城市地域赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和25年４月
- 団 員 数：1,998人（女性：1,998人／男性：０人）
  20代：　０人　30代：38人　40代：60人　50代：1,050人
  60代：800人　70代：50人　80代以上：０人
- 委 員 長：加々山　弘子

【奉仕団の主な活動】
地域住民、青少年赤十字メンバーと連携した防災訓練の実施

## 宇城市防災訓練における炊き出し訓練の実施

### ● 活動に至るまでの経緯

平成13年に当奉仕団の前身である旧松橋町地域赤十字奉仕団の活動が「災害時の備えを学べ!!主婦ら炊き出し実習」の見出しで新聞に掲載され大きな反響を呼んだことから、それ以降、当奉仕団では災害時に備えた炊き出し訓練を毎年行うことにしました。

また、熊本県支部から講師を招き、赤十字の活動や歴史、救急法、炊き出しの実習、心肺蘇生法など多くのことを学んできました。

### ● 活　動　内　容

平成20年度第１回宇城市防災訓練が５月18日に実施され、宇城市赤十字奉仕団は炊き出し訓練を担当しました。

訓練は、宇城市赤十字奉仕団員、婦人会員、女性消防隊、社会福祉協議会、健康づくり推進課管理栄養士、青少年赤十字メンバーの小学生など様々な人々からの協力を得て実施しました。

炊き出しは500食のハイゼックスを炊き出した後、レトルトカレーを温めて、配食しました。このうち、350食を一般の訓練参加者に、150食を訓練スタッフである奉仕団員や消防団、自衛隊、自主防災隊、小学生らへ、配食しました。

### ● 今 後 の 展 望

第１回目の訓練だったため、協力いただいた関係機関の代表者と話し合いを繰り返し、その結果、活動に対する意識も高まり、自ら「気づき、考え、行動する」ことができた訓練になったと思います。

今後は、団員一人ひとりが知識や技術の向上をはかり、地域住民の皆さまに赤十字に対する理解と協力が得られる活動を考えていきたいと思います。

▲ハイゼックスの炊き出しの準備

▲ハイゼックスの炊き出しの模様

9.応募事例紹介

# 赤十字思想の普及・ＰＲ活動、社員増強に対する支援対策、及びその他特色ある活動

# 長野県青木村赤十字奉仕団

- 結成年月：平成16年９月
- 団 員 数：20人（女性：19人／男性：１人）
  20代：０人　30代：０人　40代：０人　50代：３人
  60代：９人　70代：８人　80代以上：０人
- 委 員 長：堀内　方子

【奉仕団の主な活動】
地区の避難訓練に参加しての炊き出し指導等の災害救護・防災活動
村のイベント等に参加し、赤十字思想の普及・広報活動を展開

## AEDの設置と救急法講習会の開催

### ● 活動に至るまでの経緯

平成16年に奉仕団が発足した当時、どのような活動に取り組んでいくべきかをまず団員同士で話し合った結果、研修会の場や世間でも話題になっているAED（自動体外式除細動器）について着目し、いざというときの心肺蘇生法の重要性や、医療職でなくても適切にAEDを使用することによって、人の命を救うことができるということを知り、自分たちの村にAEDを設置することを目標にして活動を開始しました。

### ● 活　動　内　容

救急法の指導員を招き、AEDの取り扱いも含めた救急法の講習を開催することで、奉仕団員が救急法の技術やAEDの使用法を学ぶだけでなく、村民の皆様にも救急法やAEDについて知っていただくことができました。

また、民生委員会の場においても救急法やAEDの必要性や赤十字奉仕団の活動を説明して、奉仕団の活動に対する協力を訴え、併せて救急法講習会への参加を呼びかけました。

AED設置に必要な資金作りのため、アルミ缶の回収を主として行った他、フリーマーケットやバザーを行いました。

### ● 活動の成果、反響

村にAEDを１台寄贈し、公共施設に設置することができました。また、赤十字奉仕団の活動を住民の皆様に少しずつでも知ってもらうことができたことから、国内の災害が起きた時などには、村の住民から「奉仕団で義援金の募金活動はしないのですか？」と声をかけられるようになりました。

▲いざというときに備えてAEDの使用も含めた救急法を学ぶ団員の皆さん

# 愛知県津島市赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和57年４月
- 団 員 数：107人（女性：107人／男性：０人）
  20代：０人　30代：１人　40代：０人　50代：12人
  60代：50人　70代：40人　80代以上：５人
- 委 員 長：原田　麗子

【奉仕団の主な活動】
社員（社資）募集活動、NHK海外たすけあい、災害救護・防災活動、
高齢者の支援活動、赤十字思想の普及活動、その他（高齢者施設・障害者施設の清掃奉仕、
外出時やイベント等の介助ボランティア、国内外の災害発生時の街頭募金）

## 広めよう赤十字！５月の愛知一斉キャンペーン

### ● 活動に至るまでの経緯

愛知県支部のモデル奉仕団として平成17年度から平成19年度までの３年間指定を受け、青少年赤十字加盟校との交流により、青少年赤十字や奉仕の精神の普及に努めてきました。

赤十字・赤新月マークをデザインした花壇の作成や校舎の壁に植物のつるをはわせ、差し込む日差しの緩和や室内の温度を抑える効果の体感を目指した事業等をおこなってきました。

津島市赤十字奉仕団では、将来を担う子どもたちに、赤十字についての理解を深め、関心を持ってもらうような活動に取り組んでいきたいと考えています。今回、「広めよう赤十字！５月の愛知一斉キャンペーン」にあわせ、赤十字の普及・PRを行うことになりました。

▲団員一同

また、ニュースリリースを積極的に流すことにより、新聞・地元ケーブルテレビなどのマスコミを有効活用したり、活動の様子を奉仕団のHPに掲載する等、広報にも力を入れています。

### ● 活　動　内　容

同キャンペーンにあわせ、毎年４月下旬から５月上旬にかけて津島市の天王川公園で行われている「藤まつり」の会場で、キャンペーンの配布物である赤十字のチラシやティッシュなどと一緒に花の苗約千本を当日、会場で催し物を行っている幼稚園児、市民の方々に配布しました。また、会場でも赤十字のPR活動を行いました。その様子は新聞やケーブルテレビでも取り上げられました。

▲一斉キャンペーンで、エコを会場の園児たちに呼びかける団員の皆さん

### ● 他団体との連携

赤十字のPR活動を「藤まつり」の会場で行うにあたり、津島市観光協会と当日の活動場所や時間を協議しました。幼稚園児や市民に配布した花の苗の代金は、津島市地区から助成で賄い、花の苗もJRC（青少年赤十字）加盟校である県立佐屋高等学校農業科に依頼するなど、赤十字のつながりを大切にしています。

▲佐屋高校へ依頼した花の苗を園児たちに配布

### ● 創意工夫している点

同キャンペーンで、津島市ではチラシや自作のティッシュだけではなく花の苗を配布しました。青少年赤十字の普及という観点からは、特に当日催し物を行っている幼稚園児と保護者を対象としてPRを行いました。また、幼児たちの注目を集めるため、市長のあいさつと対象となる園児の催し物との間に奉仕団のコマを配置するなどの配慮をしました。

### ● 今 後 の 展 望

青少年赤十字と連携することにより赤十字精神の普及・育成につなげたいです。その中でも特にエコについても取り上げ、子どもたちに地球温暖化防止への意識を更に喚起していきたいと考えています。

防災講習など地域住民の参加する行事においても、赤十字事業の必要性などについて周知を図ります。また、団員同士が活動を通じて協力し合うことにより、団員の資質の向上を図かります。

# 兵庫県加東市赤十字奉仕団

- 結成年月：昭和21年４月
- 団 員 数：1,500人（女性：1,500人／男性：０人）
  年代別団員数については不明
- 委 員 長：友藤　冨士子

【奉仕団の主な活動】
- 社員（社資）募集　・NHK海外たすけあい等の募金活動　・災害救護・防災活動
- 高齢者の支援活動　・児童の健全育成活動
- その他（1981年より、故・岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動（PHD運動）を支援する活動を実施・継続している）

## PHD運動（国際社会福祉運動）の支援活動を実施

### ● 活動に至るまでの経緯

PHD運動（国際社会福祉運動）とは、1962年より約20年間、ネパールや東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事された故岩村昇博士が提唱した国際社会福祉運動で、これまで自分の為に使っていた時間、技能、財などのうち10%を捧げて、平和作り（Peace）、健康づくり（Health）を担う人材を育成する（Human Development）運動を世界中に広めることを目的として、1981年から始められたものです。この運動に賛同した当奉仕団では、1981年に１日１円運動を奉仕団員に呼びかけ、集まった募金を寄付する活動を開始しました。

▼▲活動写真（平成20年２月10日開催研修生との交流会）

### ● 活　動　内　容

同活動の中で発展途上国から日本に学びに来る研修生との交流会を年２回開催しています。１回目は、初めて来日した研修生の緊張を解いてもらうことと、日本のよいところをたくさん見聞きし、吸収してもらうことを狙いとして実施するもので、奉仕団員も含めて顔合わせを行います。

２回目は、研修を終えた彼らに、学んだことを発表してもらい、彼らの吸収の早さや器用さに触れようというものです。

これらの活動の礎として、１日１円募金や書き損じハガキ・使用済み切手の収集を団員に呼びかけ、集まった募金を寄付しています。こうした活動を27年間継続してきたことで、寄付金と交流会がうまく連動してきたことが誇りです。一般の寄付金等は、使途が不明となりがちで、寄付金提供者としても何かの役に立ったという実感が湧かないことが多いですが、当奉仕団の活動は寄付金の呼びかけと、その活用先が目に見えるわかりやすいものなので、活動に対する賛同を得やすいといえます。

### ● 今 後 の 展 望

27年間に亘る活動を絶やすことなく「継続は力なり」をモットーにこれからも活動を続けていきたいと考えています。当奉仕団の中にも世代交代が認められますが、継続的に実行していくという「思い」を自覚し、これを伝承していきたいと思います。

# 赤十字奉仕団活動事例集 応募事例一覧

テーマ：1．高齢者支援活動、2．児童の健全育成活動、3．災害救護・防災活動、
4．赤十字思想の普及・ＰＲ活動、社員増強に対する支援対策、5．その他特色ある活動

| 支部名 | 奉仕団名 | テーマ | 応募活動内容 | 応募年度 |
|---|---|---|---|---|
| 北 海 道 | 北広島市赤十字奉仕団 | 1 | 地域のお年寄りを対象とした「赤十字ふれ愛サロン」の実施 | 平成20年度 |
| 青 森 県 | 五所川原市赤十字奉仕団 | 2 | 地域の児童と防災研修会の実施 | 平成20年度 |
| 宮 城 県 | 美里町南郷赤十字奉仕団 | 3 | 地域で行う地震災害対策研修会の実施 | 平成20年度 |
| 秋 田 県 | 北秋田市鷹巣赤十字奉仕団 | 1 | 地域のお年寄りを対象とした「ふれあい会」（交流会）を実施 | 平成20年度 |
| 茨 城 県 | 日立市十王地区赤十字奉仕団 | 2 | 児童の健全育成活動（青少年赤十字メンバーに救急法等を指導する研修会の実施） | 平成20年度 |
| 栃 木 県 | 上三川町赤十字奉仕団 | 1 | 高齢者・障害者スポーツ大会における豚汁の炊き出し・配布を実施 | 平成20年度 |
| 群 馬 県 | 南牧村赤十字奉仕団 | 3 | 台風９号（平成19年９月）に伴う炊き出し活動の実施 | 平成20年度 |
| 埼 玉 県 | 越谷市赤十字奉仕団 | 2 | ＪＲＣと連携した炊き出し体験学習、募金活動、交流活動等の実施 | 平成20年度 |
| 千 葉 県 | 勝浦市赤十字奉仕団 | 1 | ひとり暮らしのお年寄り等を対象とした「ゆうゆう広場」を開設 | 平成20年度 |
| 東 京 都 | 府中市赤十字奉仕団 | 2 | 親子（ＪＲＣメンバー）で体験する食育活動（そばの麦撒きから収穫・試食まで）の実施 | 平成20年度 |
| 神奈川県 | 大磯町災害救護赤十字奉仕団 | 3 | 「団員総合訓練」（研修スキル、救急法や包帯法技術等の１年のまとめの訓練）の実施 | 平成20年度 |
| 新 潟 県 | 村上市赤十字奉仕団 | 2 | 子育て支援活動（行政と連携し、幼児安全法を習得した団員が託児ボランティアを担当） | 平成20年度 |
| 富 山 県 | 射水市大島赤十字奉仕団 | 3 | 地域自主防災会等と連携し、各種防災行事に炊き出しの実施および指導 | 平成20年度 |
| 山 梨 県 | 甲斐市赤十字奉仕団 | 1 | 特別養護老人ホームにおけるリネン交換ボランティアを実施 | 平成20年度 |
| 長 野 県 | 青木村赤十字奉仕団 | 5 | ＡＥＤを含めた救急法技術の習得とＡＥＤの設置のためのアルミ缶回収活動を実施 | 平成20年度 |
| | 中川村赤十字奉仕団 | 3 | 「ふれあい福祉広場」にて炊き出しによる「非常食体験」を実施 | 平成20年度 |
| | 原村赤十字奉仕団 | 3 | ＡＥＤを含めた救急法講習会の実施、研修会への参加、連絡網を使用した伝達訓練の実施など | 平成20年度 |

テーマ：１．高齢者支援活動、２．児童の健全育成活動、３．災害救護・防災活動、
４．赤十字思想の普及・ＰＲ活動、社員増強に対する支援対策、５．その他特色ある活動

| 支部名 | 奉仕団名 | テーマ | 応募活動内容 | 応募年度 |
|---|---|---|---|---|
| 岐阜県 | 垂井町赤十字奉仕団 | 3 | 地域における防災訓練（炊き出し、車椅子の介助、心肺蘇生法など）を実施 | 平成20年度 |
| 静岡県 | 掛川市赤十字奉仕団 | 3 | 地域と協力した防災訓練・防災にかかる講習会の実施 | 平成20年度 |
| 愛知県 | 津島市赤十字奉仕団 | 4 | JRC加盟校で行う花壇作り活動や県支部主催「愛知一斉キャンペーン」時のチラシ、花の苗の配布。広報媒体を活用した赤十字活動のPR。 | 平成20年度 |
| 三重県 | 伊勢市地区地域赤十字奉仕団 | 3 | 地域の行事、勢田川「七夕大そうじ」時の参加者への炊き出しを実施 | 平成20年度 |
| 大阪府 | 大東市赤十字奉仕団 | 3 | ひとり暮らしのお年寄りの見守り活動と地域防災マップの作成を実施 | 平成20年度 |
| 兵庫県 | 姫路市赤十字奉仕団 | 1、2 | 幼稚園のイベント時の子育て支援活動やお年寄りとのふれあい活動等の実施（八幡、的形、英賀保、野里、飾磨分団） | 平成20年度 |
| | 加東市赤十字奉仕団 | 5 | ＰＨＤ運動「国際社会福祉運動」を支援する活動 | 平成20年度 |
| 奈良県 | 香芝市赤十字奉仕団 | 3 | 地域の幼稚園・保育所で「防災紙芝居」を実施 | 平成20年度 |
| 鳥取県 | 北栄町大栄赤十字奉仕団 | 1 | 愛の声かけ訪問活動を実施（85歳以上のお年寄り宅へ訪問し、手作りのプレゼントを添えて声かけする） | 平成20年度 |
| 岡山県 | 新見市哲多町赤十字奉仕団 | 3 | 新見市総合防災訓練に炊き出しによる参加 | 平成20年度 |
| 徳島県 | 徳島市地区赤十字奉仕団 | 2 | 児童の健全育成活動（中学生に対する「手話体験」、小学生に対する「箸袋づくり」）を実施（川内分団） | 平成20年度 |
| 愛媛県 | 宇和島市宇和島赤十字奉仕団 | 3 | 災害に対する意識向上のための研修会（避難体験、救急法、非常食の炊き出し等）を実施 | 平成20年度 |
| 福岡県 | 北九州市門司区赤十字奉仕団 | 4 | ボランティア清掃、地域の祭り、ケーブルTVを等を通じた赤十字のPR。町内会等への社資募集協力依頼を実施 | 平成20年度 |
| 長崎県 | 諫早市赤十字奉仕団 | 2 | 子育て支援活動（授業参観日等の各種行事中の託児活動の実施） | 平成20年度 |
| 熊本県 | 宇城市地域赤十字奉仕団 | 3 | 宇城市防災訓練における炊き出しの実施 | 平成20年度 |
| 大分県 | 宇佐市赤十字奉仕団 | 2 | 子育て支援活動（母親向け学習会受講中の託児活動の実施） | 平成20年度 |

以下に紹介する事例は、過年度応募いただいた事例のうち、平成20年度のモデル指定の選考にあたり再度選考対象とさせていただいた奉仕団です。
同奉仕団においても引き続き活動を継続し、発展的な活動を展開しております。詳細につきましては、当該奉仕団所属支部にお問い合わせください。

テーマ：1．高齢者支援活動、2．児童の健全育成活動、3．災害救護・防災活動、
4．赤十字思想の普及・ＰＲ活動、社員増強に対する支援対策、5．その他特色ある活動

| 支部名 | 奉仕団名 | テーマ | 応募活動内容 | 応募年度 |
|---|---|---|---|---|
| **青 森 県** | むつ市大畑分区赤十字奉仕団 | 2 | 児童・生徒と協力した献血推進活動の実施 | 平成18年度 |
| →本事例集に掲載。 | | | | |
| **秋 田 県** | 北秋田市阿仁赤十字奉仕団 | 1 | 一人暮らしのお年寄りを対象にしたサロンの実施や日帰りツアーの実施 | 平成18年度 |
| →平成18年度事例集のP96に掲載。 | | | | |
| **兵 庫 県** | 新温泉町赤十字奉仕団 | 4 | 社員増強運動（戸別訪問による活動資金の使途説明、広報誌の配布、寸劇）を実施 | 平成18年度 |
| →本事例集に掲載。 | | | | |
| **新 潟 県** | 新発田市赤十字奉仕団 | 4 | 他の赤十字奉仕団と連携した「ボランティアフェスティバル」の実施 | 平成19年度 |
| →平成19年度事例集のP76に掲載。 | | | | |
| **静 岡 県** | 富士宮市赤十字奉仕団 | 3 | 地域自主防災会との訓練等を通じての防災活動を実施 | 平成19年度 |
| →平成19年度事例集のP78に掲載。 | | | | |
| **三 重 県** | いなべ市地域赤十字奉仕団 | 3 | 県内外災害救援活動に参加、住民の防災意識を高める啓発活動等の実施 | 平成19年度 |
| →平成19年度事例集のP80に掲載。 | | | | |
| **奈 良 県** | 奈良市地区赤十字奉仕団 | 3 | 各分団ごとに地域の防災マップ作成等の防災活動を展開 | 平成19年度 |
| →平成19年度事例集のP83に掲載。 | | | | |
| **岡 山 県** | 赤磐市赤坂赤十字奉仕団 | 2 | 子どもたちとともに「災害を学ぶ」体験学習を実施 | 平成19年度 |
| →平成19年度事例集のP84に掲載。 | | | | |